

たて やま
立 山 遺 跡

—高原町教育文化ゾーン整備事業に伴う発掘調査報告書—

1997. 3

みや ざき けん にし もろ かた ぐん
宮 崎 県 西 諸 県 郡
たか はる ちょう
高 原 町 教 育 委 員 会

序 文

高原町は、霊峰高千穂峰の麓にある神話と歴史に溢れた町です。特に「高原」という地名は、「高天原」から転化したと言われており、町内各地に神話にまつわる史跡があります。又、人皇初代であられる神武天皇の御降誕されたという伝承を持つ場所としても名高い町です。

高原町では、高原町第3次総合計画に基づき、教育文化ゾーンの整備計画を作成しました。それに伴い、平成6年度に立山遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査における報告書です

本調査では、古墳時代から古代にかけての住居跡約30数軒が検出され、同時に土器類を中心に多くの遺物も出土しています。中には軽石製のカマドを持つ住居跡など、注目される遺構も検出され、多大な成果を上げることができました。

発掘調査で得られた成果は、先人たちが残した私達の文化遺産であり、これらの成果を生かすことが、私達に課せられた重大な責務と考えられます。

今回の調査で得た様々な成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました高原町土地開発公社をはじめ、御指導・御援助をいただきました宮崎県教育委員会文化課、その他関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

平成9年3月

高原町教育委員会
教育長 正入木 久 男

例 言

1. 本書は、高原町第3次総合計画に基づく教育文化ゾーン整備計画に伴い高原町教育委員会が行った立山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高原町教育委員会が平成7年1月9日から3月31日まで実施した。
3. 現地での実測・写真撮影は主に鎌田次郎が行い、一部の実測・測量は有限会社赤塚測量（現ジパングサーベイ）に、空中写真は株式会社スカイサーベイ九州に委託した。又、遺物の写真撮影については、永友が行った。
4. 整理作業は、高原町教育委員会の依頼を受け、平成7～8年度に宮崎県埋蔵文化財センター及び高原町教育委員会で行った。
5. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の1/50,000図を基に作成し、遺跡周辺地形図は高原町作成の1/2,500都市計画図を基に作成した。
6. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の「新版標準土色帳」に拠る。
7. 本書で使用した方位はすべて磁北である。
8. 本書の執筆については、永友良典・鎌田次郎・大學康宏が各章を担当し、全ての原稿の編集を永友が行った。執筆分担は次の通りである。

第1章 第1節	永友	第2章	大學	第3章	鎌田・永友
第2節	大學				
第4章 第1節	永友	第5章 1.	永友		
第2節 1.	永友	2.	大學		
2.	大學	3.	鎌田・永友		
9. 本書では遺構を次の略号で表している。
S A…竪穴住居・平地式住居、S B…掘立柱建物、S C…土坑
10. 本遺跡では自然科学分析を株式会社古環境研究所に委託して行った。その結果は附編として本書に掲載した。
11. 立山遺跡に関する遺物・図面・写真は高原町教育委員会に保管している。

本文目次

序文	
例言	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	4
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第3章 調査の概要	8
第4章 調査の記録	10
第1節 古墳時代の遺構と遺物	10
1 西区の遺構と遺物	10
竪穴住居	10
土坑	31
遺構外出土の遺物	35
2 南区の遺構と遺物	47
竪穴住居	47
土坑	67
遺構外出土の遺物	71
3 東区の遺構と遺物	75
第2節 古代の遺構と遺物	93
1 古代の遺構	93
(1) 西区の遺構	93
(2) 南区の遺構	93
2 古代の遺物	104
第5章 おわりに	116
附 編 自然科学分析調査報告書	121

挿 図 目 次

第1図	立山遺跡試掘調査トレンチ配置図	1
第2図	立山遺跡試掘調査出土遺物実測図	2
第3図	立山遺跡及び高原町内遺跡位置図	5
第4図	立山遺跡周辺地形図	9
第5図	立山遺跡グリッド配置図	11
第6図	立山遺跡西区遺構分布図	13
第7図	立山遺跡S A 1 遺構実測図	15
第8図	立山遺跡S A 1 出土遺物実測図 (1)	16
第9図	立山遺跡S A 1 出土遺物実測図 (2)	17
第10図	立山遺跡S A 2 遺構実測図	19
第11図	立山遺跡S A 2 出土遺物実測図	20
第12図	立山遺跡S A 1 7 遺構実測図	22
第13図	立山遺跡S A 1 8 遺構実測図	23
第14図	立山遺跡S A 2 3 遺構実測図	25
第15図	立山遺跡S A 2 4 遺構実測図	26
第16図	立山遺跡S A 2 4 出土遺物実測図	27
第17図	立山遺跡S A 2 3 出土遺物実測図	27
第18図	立山遺跡S A 2 5 遺構実測図	29
第19図	立山遺跡S A 2 5 出土遺物実測図	30
第20図	立山遺跡S A 2 6 遺構実測図	32
第21図	立山遺跡S A 2 6 出土遺物実測図 (1)	33
第22図	立山遺跡S A 2 6 出土遺物実測図 (2)	34
第23図	立山遺跡S A 2 2 周辺出土遺物実測図	34
第24図	立山遺跡S A 2 8 遺構実測図	36
第25図	立山遺跡S C 1・4・6・8 遺構実測図	38
第26図	立山遺跡S C 1・3・4・8 出土遺物実測図	39
第27図	立山遺跡西区出土遺物実測図 (1)	40
第28図	立山遺跡西区出土遺物実測図 (2)	41
第29図	立山遺跡西区出土遺物実測図 (3)	42
第30図	立山遺跡西区出土遺物実測図 (4)	43
第31図	立山遺跡西区出土石器実測図	44
第32図	立山遺跡南区遺構分布図	45
第33図	立山遺跡S A 3 遺構実測図	48
第34図	立山遺跡S A 7 遺構実測図	49
第35図	立山遺跡S A 7 出土遺物実測図	50
第36図	立山遺跡S A 8 遺構実測図	51
第37図	立山遺跡S A 9 遺構実測図	52
第38図	立山遺跡S A 9 出土遺物実測図	53
第39図	立山遺跡S A 1 0 遺構実測図	54

第40図	立山遺跡 S A 1 1 遺構実測図	56
第41図	立山遺跡 S A 1 3 遺構実測図	57
第42図	立山遺跡 S A 1 4 遺構実測図	58
第43図	立山遺跡 S A 1 5 遺構実測図	59
第44図	立山遺跡 S A 1 4 出土遺物実測図	60
第45図	立山遺跡 S A 1 5 出土遺物実測図	60
第46図	立山遺跡 S A 1 6 遺構実測図	62
第47図	立山遺跡 S A 1 9 遺構実測図	63
第48図	立山遺跡 S A 2 0 遺構実測図	65
第49図	立山遺跡 S A 2 1 遺構実測図	66
第50図	立山遺跡 S A 2 7 遺構実測図	67
第51図	立山遺跡 S A 2 7 出土遺物実測図 (1)	68
第52図	立山遺跡 S A 2 7 出土遺物実測図 (2)	69
第53図	立山遺跡 S A 2 9 遺構実測図	70
第54図	立山遺跡 S C 3 ・ S C 5 遺構実測図	71
第55図	立山遺跡南区出土遺物実測図	73
第56図	立山遺跡南区出土石器実測図	74
第57図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (1)	81
第58図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (2)	82
第59図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (3)	83
第60図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (4)	84
第61図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (5)	85
第62図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (6)	86
第63図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (7)	87
第64図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (8)	88
第65図	立山遺跡東区出土遺物実測図 (9)	89
第66図	立山遺跡東区出土石器実測図 (1)	90
第67図	立山遺跡東区出土石器実測図 (2)	91
第68図	立山遺跡東区出土石器実測図 (3)	92
第69図	立山遺跡 S A 2 2 遺構実測図	94
第70図	立山遺跡 S A 1 2 遺構実測図	95
第71図	立山遺跡 S A 4 遺構実測図	96
第72図	立山遺跡 S A 5 遺構実測図	97
第73図	立山遺跡 S A 5 出土軽石製品遺物実測図	98
第74図	立山遺跡 S A 6 遺構実測図	99
第75図	立山遺跡 S A 3 0 遺構実測図	100
第76図	立山遺跡 S A 3 1 遺構実測図	101
第77図	立山遺跡 S B 1 遺構実測図	102
第78図	立山遺跡 S B 2 遺構実測図	103
第79図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (1)	107
第80図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (2)	108

第81図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (3)	109
第82図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (4)	110
第83図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (5)	111
第84図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (6)	112
第85図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (7)	113
第86図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (8)	114
第87図	立山遺跡出土古代遺物実測図 (9)	115

図 版 目 次

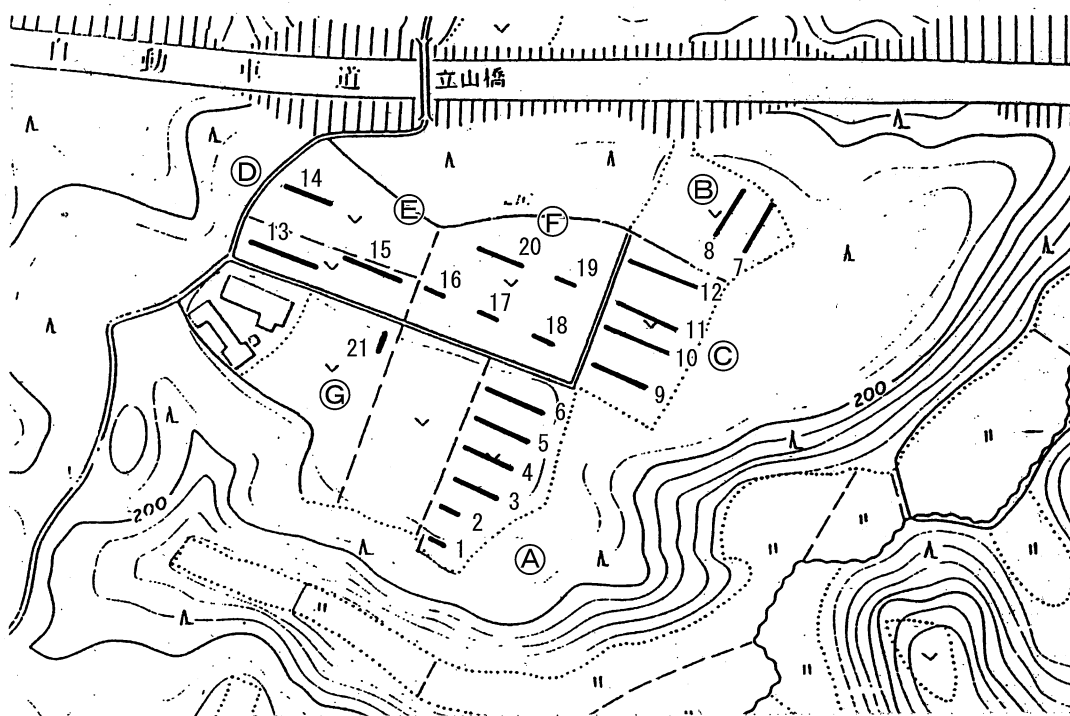
図版1	北方・西方よりの遠景	143
図版2	南方・上空よりの遠景	144
図版3	上空・南方よりの西区遠景	145
図版4	上空・東方よりの南区遠景	146
図版5	南方・東方よりの南区近景・遠景	147
図版6	上空よりの東区全景	148
図版7	西区SA1周辺／SA1／SA2	149
図版8	西区SA17／SA18／SA22・23	150
図版9	西区SA24／SA25／SA26	151
図版10	西区SA28／南区SA3／SA7	152
図版11	南区SA8／SA9／SA10	153
図版12	南区SA11／SA13／SA14	154
図版13	南区SA15／SA16／SA19	155
図版14	南区SA20／SA12・20・21・29／SA27	156
図版15	南区南西側調査区／南区南東側調査区／南区SB1	157
図版16	南区SB1・SB2／南区SB2／東区ピット群	158
図版17	試掘調査・西区出土遺物 (SA1・SA2)	159
図版18	西区出土遺物 (SA1／SA2)	160
図版19	西区出土遺物 (SA15・23／SA24・22周辺)	161
図版20	西区出土遺物 (SA25／SA26)	162
図版21	西区出土遺物 (SA26／SC3・SA4)	163
図版22	西区出土遺物	164
図版23	西区出土遺物	165
図版24	西区出土遺物	166
図版25	南区出土遺物 (SA9・14・15)	167
図版26	南区出土遺物	168
図版27	南区出土遺物・東区出土遺物	169
図版28	東区出土遺物	170
図版29	東区出土遺物	171
図版30	東区出土遺物	172

第1章 はじめに

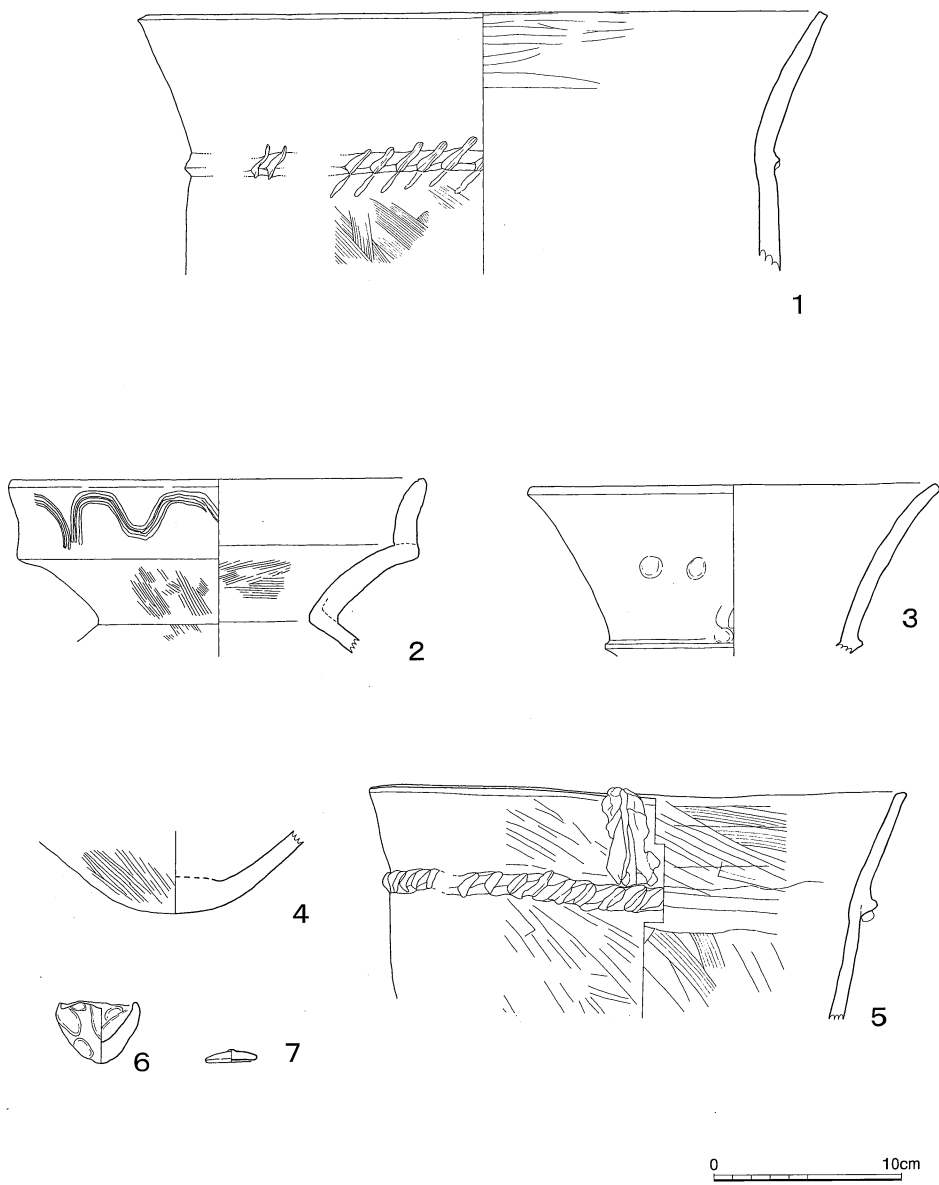
第1節 調査に至る経緯

高原町では、「高原町第3次総合計画」に基づく教育文化ゾーン整備を高原町大字西麓字立山の宮崎自動車道沿いの丘陵地に計画した。計画地一帯は全国遺跡地図（1977年文化庁）にも立山遺跡（散布地）として掲載されているものの、高原町教育委員会では専門職員の配置をしていない事から、宮崎県教育委員会文化課に遺跡の確認調査を依頼した。確認調査は平成5年8月5日・12月21日～22日に同課埋蔵文化財第2係主査石川悦雄が、また、平成6年5月9日～10日・6月3日に同課主査永友良典がそれぞれ担当して実施した。

調査は予定地を現況からa～fの6つの地点に分け、重機を使用して幅2m・長さ10～40mのトレンチを、20～40mの間隔で21本設定して行った。調査でまず、最初の確認調査の段階で確認した基本層序に従ってその後の調査を進めていった。（第1図）



第1図 立山遺跡試掘トレンチ配置図



第2図 立山遺跡試掘調査出土遺物実測図

基本とした層序は次の通りである。

1層：耕作土、2層：高原スコリア、3層：灰白火山灰、4層：黒色土、
5層：黄褐色軟質土、6層：褐色土、7層：2次堆積アカホヤ火山灰、
8層：ウシノスネローム

調査の結果、a地点（t1～t6）では明確な遺構は確認できなかったが、4層～5層上面にかけて古墳時代の土師器が出土した。t3～t6にかけてはすでに大きく削平されており旧地形が丘状になっていたと思われる、丘状の地形を削って北側に盛り土を行ったと推測される。

b地点（t7・t8）とc地点（t9～t12）ではt8～t12の間で4層～5層上面にかけて古墳時代の土師器が出土した。また、トレンチ壁面で2層を切る形でのピットや溝が確認された。

d地点（t13・t14）、e地点（t16～t20）・f地点（t21）ではt13とt14がすでに大きく削平されており、t15とt16では1m～1.5mの盛り土が確認され、小さな谷地形が入り込んでくると考えられる。t17も大きく削平されていた。t18～t20、t21では2層から下の層が良好に残っており4層～5層上面にかけて古墳時代の土師器が出土した。しかし、明瞭な遺構の検出はできなかった。

主な遺物としてはT1から刻み目突帯を持つ「く」の字口縁の甕（261）、櫛描き波状文を施す二重口縁壺（407）、二重口縁壺のものと思われる丸底気味の底部（402）。T3からはミニチュアの蓋（41）と手捏ね土器（42）T5からは頸部に突帯を持ち大きく外反する壺の口縁部片（384）。T16からはくびれない頸部に刻み目突帯を巡らせたバケツ状の甕（27）などの特徴的な土師器類が見られる。（第2図）

以上の結果を受け、高原町教育委員会では開発部局と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねたが丘陵全体を造成時に5m以上も掘削することから、4～5層上面にかけて古墳時代の遺物包含層が確認された丘陵の東側（a・b・c・f地点）を中心に調査対象地とし、記録保存の本調査を実施する事とした。なお、確認調査の段階で建物の撤去が終了していなかったg地点についても調査対象とし、撤去後直ちに確認調査を行って本調査の判断をすることとした。調査対象面積はg地点も含めると約30,000㎡にも及ぶ膨大な調査となった。膨大な調査面積のため、本調査に入る前の平成6年8月10日～9月2日及び同年10月17日～21日の計18日間を事前調査とし、表土剥ぎと基準杭設置等の準備を行った。調査については、高原町教育委員会が調査員として鎌田次郎（前県文化課嘱託・現西郷村教育委員会職員）を雇用し、県文化課の指導を受ける体制で、平成7年1月9日から3月31日まで実施した。整理作業については、平成7～8年度に実施した。県埋蔵文化財センターで古墳時代の、高原町教育委員会では平成7年度より専門職員を雇用し、古代の遺物の整理をそれぞれ分担した。

第2節 調査の組織

発掘調査および整理事業の調査体制は次のとおりである。

調査主体 高原町教育委員会

教育長 正入木 久 男

社会教育課長 福 留 宜 文（～平成7年度） 益 本 忠 男（平成8年度）

係長 松 元 茂 春（～平成7年度） 森 山 博 文（平成8年度）

文化財担当 松 元 茂 春（～平成6年度） 大 學 康 宏（平成7年度～）

調査担当 鎌 田 次 郎（宮崎県文化課嘱託）

永 友 良 典（宮崎県文化課主査）

調査指導 宮崎県教育委員会文化課

事業主体 高原町土地開発公社（高原町役場企画調整課内）

企画調整課長 永 住 五 男（～平成6年度） 宮 司 薫（平成7年度～）

係長 亀 田 光 二

主事 田 上 則 昭（～平成6年度） 上 村 洋 二（平成7年度～）

第2章 遺跡の位置と歴史的環境（第3図）

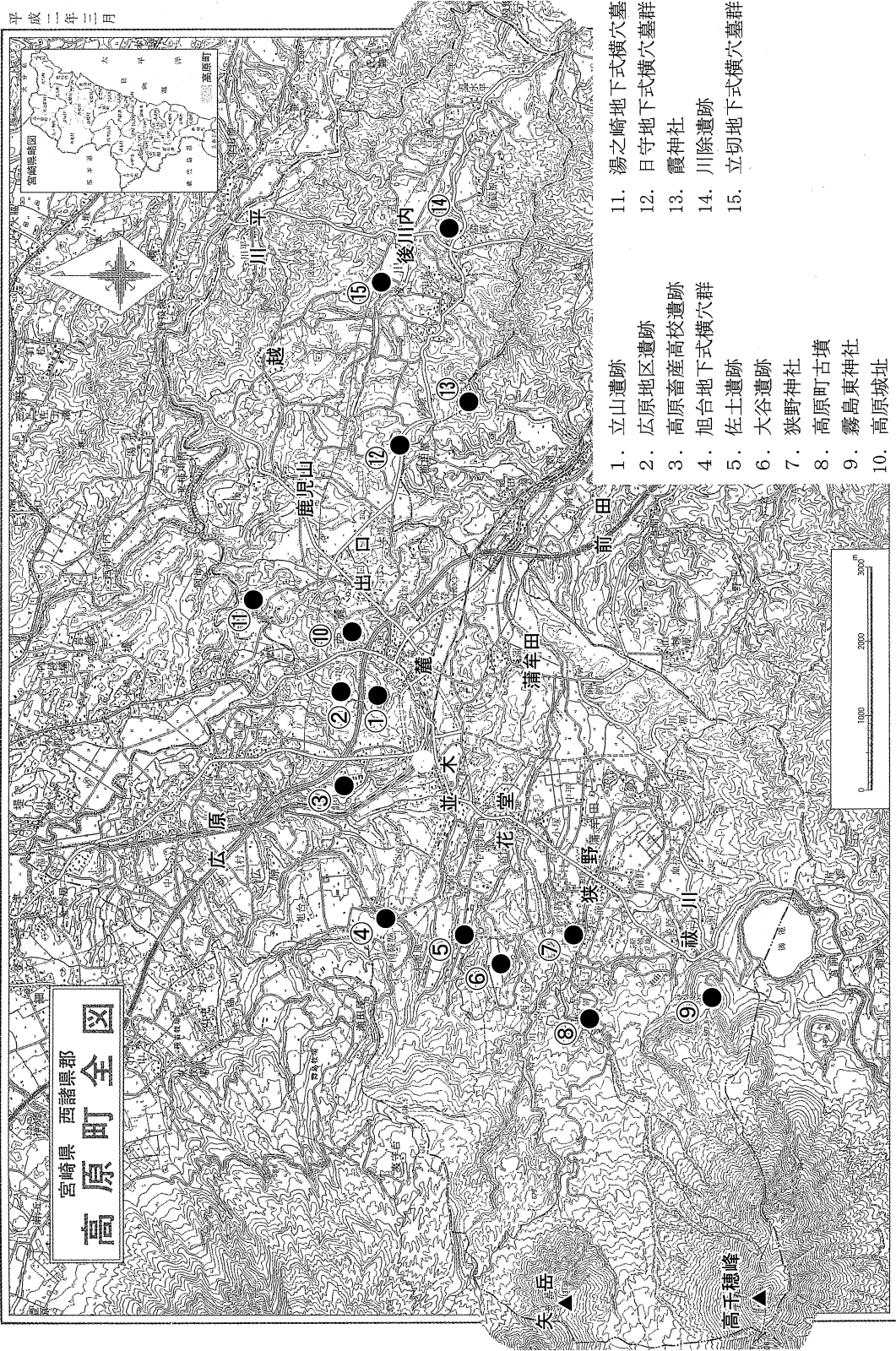
高原町は宮崎県の西南部、霧島山地の東麓に位置する。町域は東西18km、南北10km、総面積85.42km²で、東西に長い。高千穂峰を鹿児島県との境に持ち、南は鹿児島県霧島町・宮崎県都城市・山田町・高崎町、北は野尻町・小林市と接している。市街地は町域の中心部にあり、小林市との町境を流れる岩瀬川の支流である辻の堂川により形成された標高170m～230mの丘陵上に立地している。

立山遺跡は、市街地北部の台地に立地し、その北には広原地区遺跡群が立地している。

高原町では昔より火山の被害に遭う事が多く、A T火山灰をはじめ、アカホヤ火山灰、牛の脛ローム（カシワバン）・高原スコリア等、遺跡の年代決定に使用される火山灰が、他の市町村よりも明瞭に確認できる。又、高原町内のみで確認できる火山灰もあり、霧島山起源の火山灰の出土量は豊富である。反面、それぞれの火山灰の堆積がかなり分厚く、通常の発掘調査では調査範囲が大きく制約される。例えば、A T火山灰は町内では約20m程堆積している。又、アカホヤ火山灰やカシワバンもかなり分厚いため、縄文時代早期より以前の歴史は現在のところ全く不明で、遺物の表採すら確認されていない。

高原町では昭和40年代頃から大規模な圃場整備事業や個人の小規模な土取り・造成にいたるまで様々な開発が行われた。又、同じ頃に九州縦貫自動車道関連の事業も始まり、それに伴って遺跡の分布調査がおこなわれたが、確認された遺跡の数が非常に少ないことや、体制も整っていなかったこともあり、当時は全体的な歴史自体が不明確であった。

高原町での戦後における具体的な調査初例としては高原畜産高校遺跡がある。これは昭和43年（1968）の新校舎建設に伴う造成工事中に完形の土器を発見、地元の要請を受けて県教育委員会が調査を実施したところ、弥生時代中期後半と縄文時代後期の土器が



第3図 立山遺跡及び高原町内遺跡位置図

出土した。明確な遺構は確認できなかったものの、高原町においては土層と遺物の関連性について確認できたのはこれが初めてであった。

これより後に発掘調査の事例は増加するが、今回報告の立山遺跡の発掘調査までは突発的に発見される地下式横穴墓の緊急調査が主で、その他の資料としては天地返しやゴボウ掘りなどの深耕行為により地表に掘り起こされた土器や石器等の遺物から歴史的環境を推測しなければならなかった。

それらの資料から高原町の歴史を辿ると、縄文時代早期以前は先述のとおり調査例・出土例とも全く無い。縄文時代後期以前は若干ながら確認されているが、その規模などは依然として不透明のままである。縄文時代後期から遺物の出土量は爆発的に増加する。その中で最も出土量が多い遺跡として、高千穂峰の裾部に位置する大谷遺跡がある。個人の畑造成の際に大量の土器や石器類が出土した。その後、遺物採集に多くの人が訪れ貴重な資料が散逸してしまった事が惜しまれるが、出土量が膨大且つ土器のバリエーションも豊富で、高原町における縄文後期を代表する遺跡と言える。その後の確認で縄文時代前期まで遡ることが確認された。又、谷を挟んで北側の台地にある佐土遺跡でも、ほぼ同時期の遺物が確認されている。その他、轟遺跡など数箇所でも同時期の遺物が確認され、この頃より人口が増加したものと思われる。

続いて弥生時代に入ると、20年ほど前にかかなり多くの弥生土器が出土したという話は聞くが、遺物が散逸しているため、規模・時期ともに不明確であるが、広原地区遺跡（後に荒迫遺跡と改称）をはじめ数箇所でも確認されている。

古墳時代になると、集落遺跡よりむしろ諸県地域に顕著に見られる地下式横穴墓が多く確認されている。例をあげると、昭和47年（1972）に畑の造成中に発見、1基が確認された湯ノ崎地下式横穴墓、昭和50年（1975）に土地改良のための整地作業中に台地の東端から13基が確認された旭台地下式横穴群、高崎町との町境に位置し、造成や範囲確認調査を含め現在までに29基（平成9年3月に新たに2基発見）が確認された日守・仮屋尾地下式横穴群、そして昭和63年（1980）の圃場整備事業実施中に発見、2度にわたる調査によって72基が確認された立切地下式横穴群、などがある。これらの地下式横穴墓から出土する副葬品の殆どが鉄製武器の一方、貝輪や壺・白玉などの装飾品も出土している。又、玄室内部に垂木や棟木などの建築様式を朱や彫刻で表したものや、堅坑に階段状の足掛けを設置しているものもある。

対して、集落遺跡で具体的に判明している遺跡は立山遺跡と広原地区遺跡のみで、立切地下式横穴墓群の母集落と考えられる轟遺跡や、その南向かいの台地にある宮の原遺跡などは遺物表採により推定できる。その他、鷹巣原遺跡、立脇遺跡などでも確認されている。

しかし、この地下式横穴墓の時期を境に6世紀以降の状況は不明瞭となる。次に具体的に登場する遺跡は平安時代以降である。その代表的な遺跡として、立山遺跡とは宮崎自動車道を挟んで北側に隣接する広原地区遺跡がある。宮崎フリーウエー工業団地造成工事に伴い平成7年1月から平成9年3月まで県教育委員会が発掘調査を実施している。白色火山灰層の下から短期的に使用されたと見られる畠の畝が検出されており、立山遺跡との関連性が指摘されている。その他では、立山遺跡を除く表採資料としては黒色土

器A類や布痕土器・甕などが宮の原遺跡・鷹巣谷遺跡・柳野遺跡などで少量ではあるが確認されている。このように相当量とはいかないまでも、ある程度の遺跡の存在は確認されている。しかし、この時期から御鉢の活動が活発化し、ついには高原スコリアの降下により決定的な打撃を受ける。

これ以降の遺跡としては戦国時代に島津・伊東氏の対決の舞台となった高原城跡がある。立山遺跡の東側、現在城山墓地になっている所を含め、その北東に向かい縄張りはかなり良好に保存されている。それ以外、現在のところ中世の遺跡は確認されていない。

高原町においては、昭和40年代、県教育委員会による九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により数箇所の遺跡が確認されて以降は、突発的な発見による発掘調査によって遺跡の状況が把握できる程度であったため、町内を網羅する遺跡分布地図がなく、町内における遺跡の数量・規模等は不明の状態であった。しかし、平成8年度から2箇年計画で、国・県の補助を受け遺跡詳細分布調査を実施しており、今まで知られていなかった遺跡がかなり姿を現し、今後も増加していくものと考えられる。

【参考文献】

- 宮崎県教育委員会 1972「高原町縄文期包含層調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集
宮崎県教育委員会 1973「高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第17集
宮崎県教育委員会 1977「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集
宮崎県教育委員会 1980「日守地下式横穴54-1～4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集
宮崎県教育委員会 1981「日守地下式横穴55-1～4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集
宮崎県教育委員会 1981「日守地下式古墳確認調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集
高原町史編纂委員会 1984『高原町史』
高原町教育委員会 1991「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第1集

第3章 調査の概要

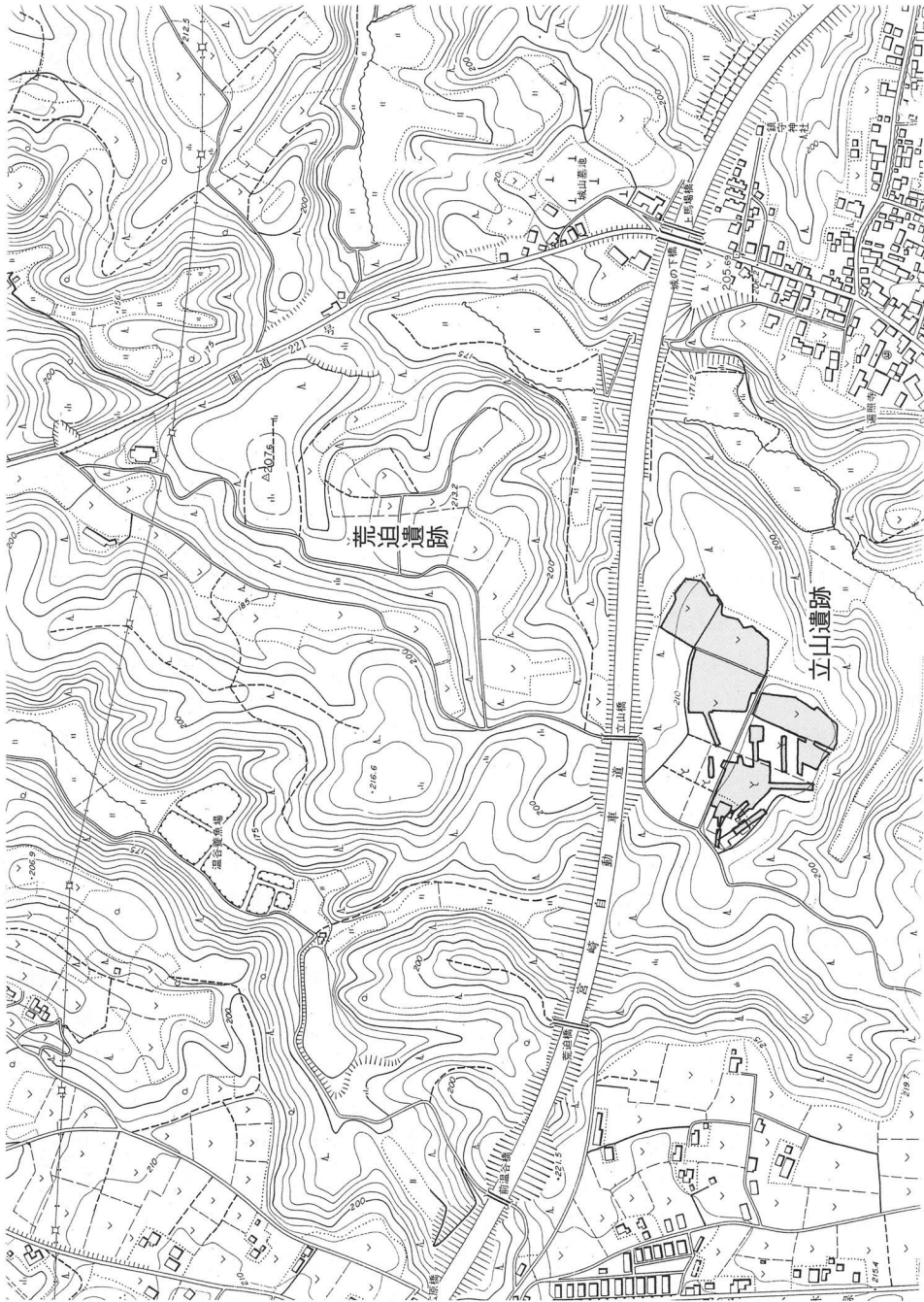
立山遺跡では、確認調査の結果を受けて調査対象地を決定したが、造成予定地の現況を考慮に入れて調査区を西区（同g地点）・南区（同a地点）・東区（確認調査時のf・c・b地点）の3区に分けた。調査は、まず西区の建物の撤去の関係から、東区→南区→西区の順番に調査を進める事にした。まず、東区から重機を使用して耕作土を除去し、南区の表土剥ぎが終了した時点で西区と南区の測量用の杭打ちを行った。杭打ちは国土地座標に平行する形で10mグリッドを組んでいった。その設置杭は南北軸方向にNo.A杭～No.Z杭、東西軸方向にNo.1杭～No.38杭を設置し、それぞれグリッドをA-1・B-2・C-3・・・と呼ぶこととした。調査対象面積は約30,000㎡にも及ぶ。（第4図・第5図）

東区では、確認調査でトレンチ壁面から2層を切る形でのピットや溝らしい痕跡が確認された点や、4層～5層上面にかけて古墳時代の土師器が出土した事などから、表土剥ぎの段階でまず2層上面で遺構・遺物の確認を行ったが、明確な遺構等の検出は確認できなかった。そこで4層面まで一気に重機で下げ、後は人力による検出作業を行った。特に、確認調査で遺物が集中して検出された調査区西側から南側にかけてのI-19グリッド、J-23グリッド、M～N-26～27グリッド、J-30～31グリッド周辺を中心に遺構・遺物の検出を行った。その結果、遺構の検出はL-22グリッドを中心としたピット群のみであった。遺物は古墳時代の遺物が調査区のほぼ全域から、古代の遺物が調査区の東よりの区域（南北軸H列～O列、東西軸21列～27列の範囲）で検出された。最後に確認のためにI-14～18にかけてトレンチ調査を行ったが遺構の検出はなかった。

南区でも確認調査で調査区北側の3/5近くが削平されている事と、4層～5層上面にかけて古墳時代の土師器が出土している事が確認できた事から、調査区の南側を中心に4層面まで重機で剥ぎ取った後に人力で検出作業を行った。調査の結果、南北軸V列以南を中心に竪穴住居16軒、平地式住居5軒、掘立柱建物2棟、不明土坑6基が検出され、古墳時代や古代の遺物が大量に出土した。特に平地式住居からは軽石囲みのカマド跡も検出された。さらに、念のため遺構が密集する一帯の西側へ調査区を拡張したが、遺構の確認は行えず、遺物も古代の遺物が若干出土した程度であった。

建物の撤去後に調査に入った西区では、まず数箇所にとレンチを入れて土層の状況を確認したが、ほぼ全域で2層はすでに削平されていたため、4層面まで重機で剥ぎ、後は人力で検出作業を行った。K～L-7～11グリッドを中心に竪穴住居10軒、不明土坑4基が検出され、北寄りでは古墳時代の遺物、南寄りでは古代の遺物が出土している。さらに、確認のために遺構が検出された調査区から四方にとレンチを入れて調査したが、遺構は確認できなかった。

以上、検出された遺構は古墳時代および古代の竪穴住居26軒、平地式住居5軒、掘立柱建物2棟、不明土坑9基が確認された。又、遺物としては古墳時代および古代の大量の土師器をはじめ砥石、磨石、台石、石包丁等の石器類が出土した。



第4図 立山遺跡周辺地形図 (1/5000)

第4章 調査の記録

第1節 古墳時代の遺構・遺物

1. 西区の遺構と遺物

西区からは調査区の北側を中心に竪穴住居9軒と土坑4基が検出された。検出された竪穴住居の中には遺物を伴わないものも見られるが、周辺の遺物の散布状況等から判断し古墳時代の遺構とした。(第6図)

【竪穴住居】

SA1

遺構(第7図)

西区北側の住居密集地の中央のK~L-9~10グリッドにまたがって検出された竪穴住居。主軸をN35°Wに持つ。長軸約560cm、短軸約400cmの長方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約35cmと検出された竪穴住居の中では深い。南西隅に棚状の施設を持ち、住居中央には1辺約100cmの方形の掘り込みがあり炭化材が検出された。柱は4本で柱間は270cm~340cm、床面からの深さは40~50cmを測る。埋土の上層から下層まで遺物の包含が見られた。

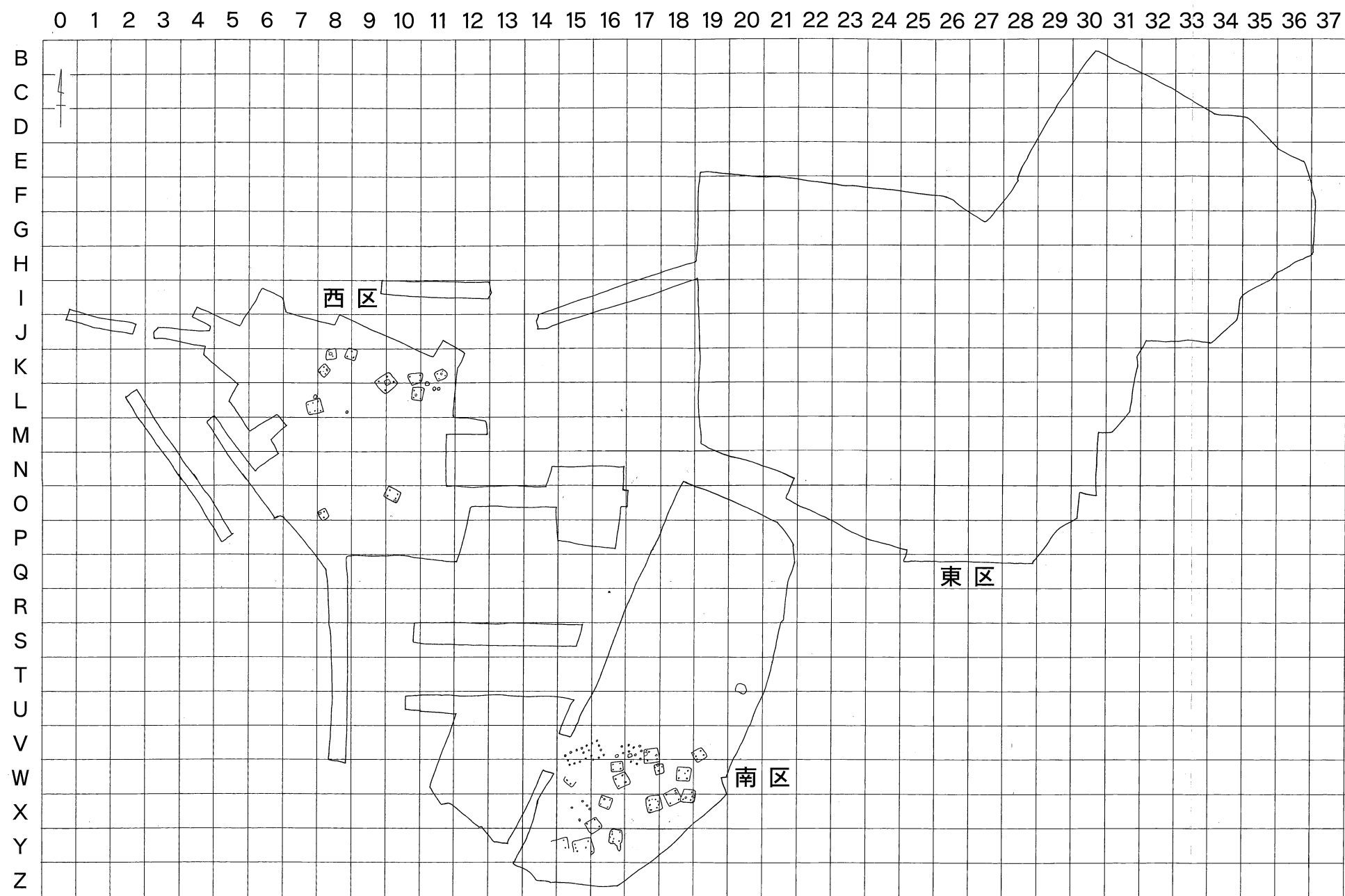
遺物

SA1では住居西側の床面近くを中心に壺・甕・高坏・椀などの土器類と石器数点が出土している。

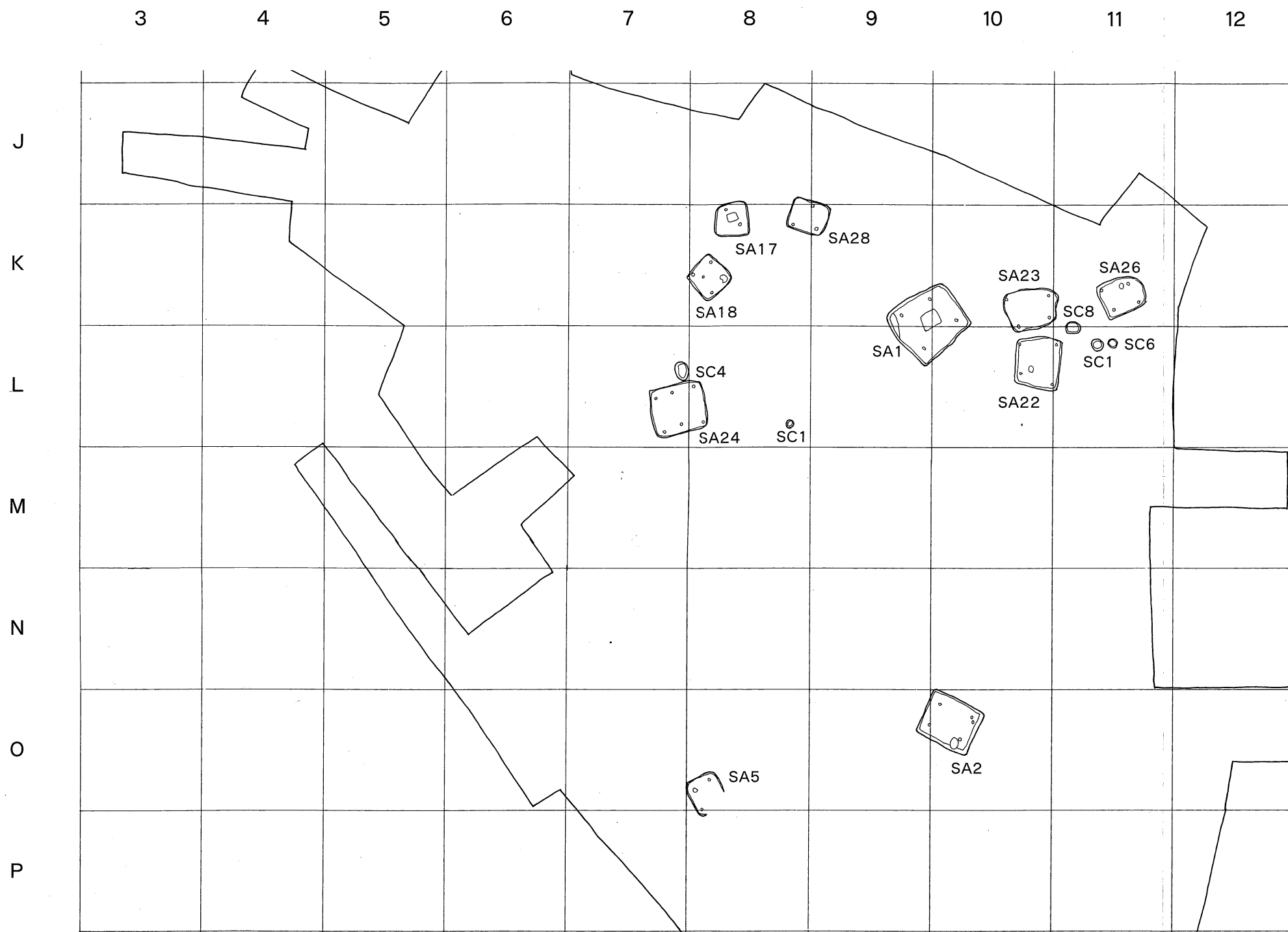
土器(第8図・第9図)

1は胴部最大径が約54cmの大型の壺である。口縁部から胴部中位までの半分近くが残存する。球形の胴部に頸部が締め、長めに立ち上がる口縁部は端部で外反する。胴部最大部よりやや上部に2条、頸部に1条の刻目突帯がそれぞれ施されている。刻目には布目痕が見られる。2・3は頸部の締まる二重口縁壺の頸部から口縁部にあたる部位である。無紋の二重口縁部は直立する。口縁部径は3が約5cm、2が約18cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。4は頸部から大きく外反する口縁部である。口唇部の形状から壺の口縁部と思われる。調整は内面がナデ、外面がハケ目調整が施されている。

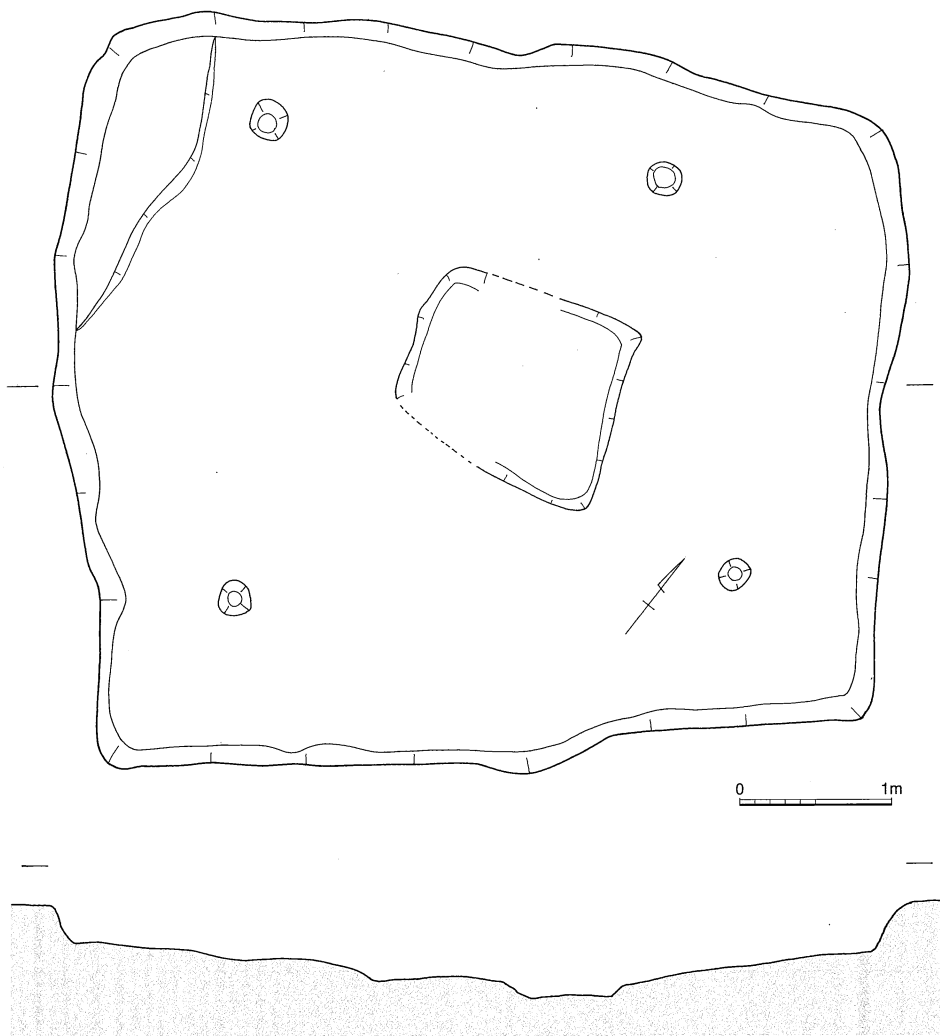
5・6・8は頸部に一条の刻目突帯をもつ甕である。6のみが左上から右下方向への刻みである。刻目には布目痕が見られる。いずれも口縁部に最大径を持ち、張りのない胴部と頸部に大きく外反する口縁部が付く。底部は6に見られるように平底である。6は口縁部の残存が少ないが推定で口縁部径が約31cm、高さ約35cmを測る。5は口縁部から胴部までの1/4程度の残存状況で口縁部径が約33cmを測る。頸部に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が1条巡る。8は口縁部から胴部までの残存で頸部に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が見られる。口縁部径約33.6cmを測る。器面調整はナデと刷毛目による調整が見られる。



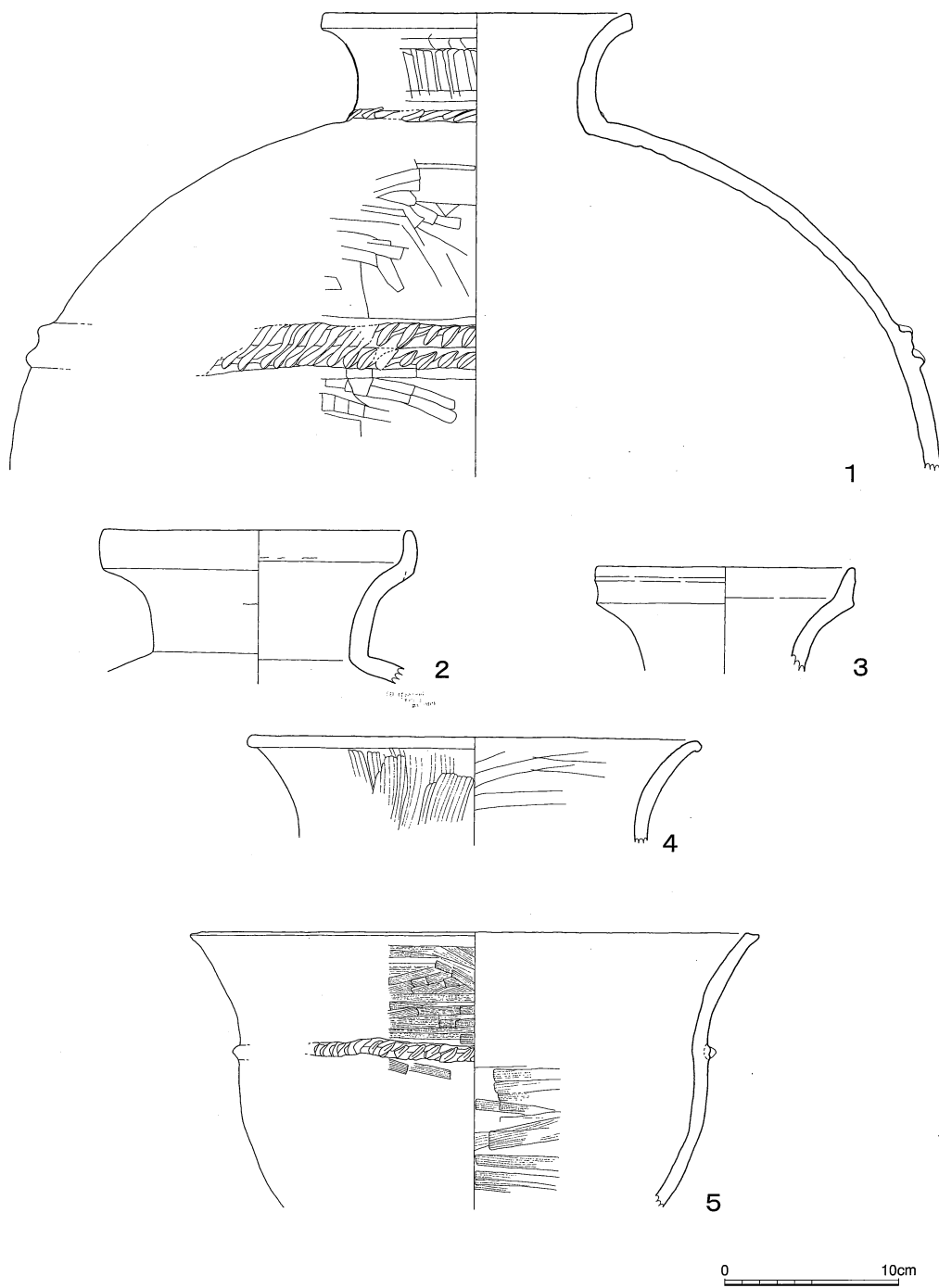
第5図 立山遺跡グリッド配置図



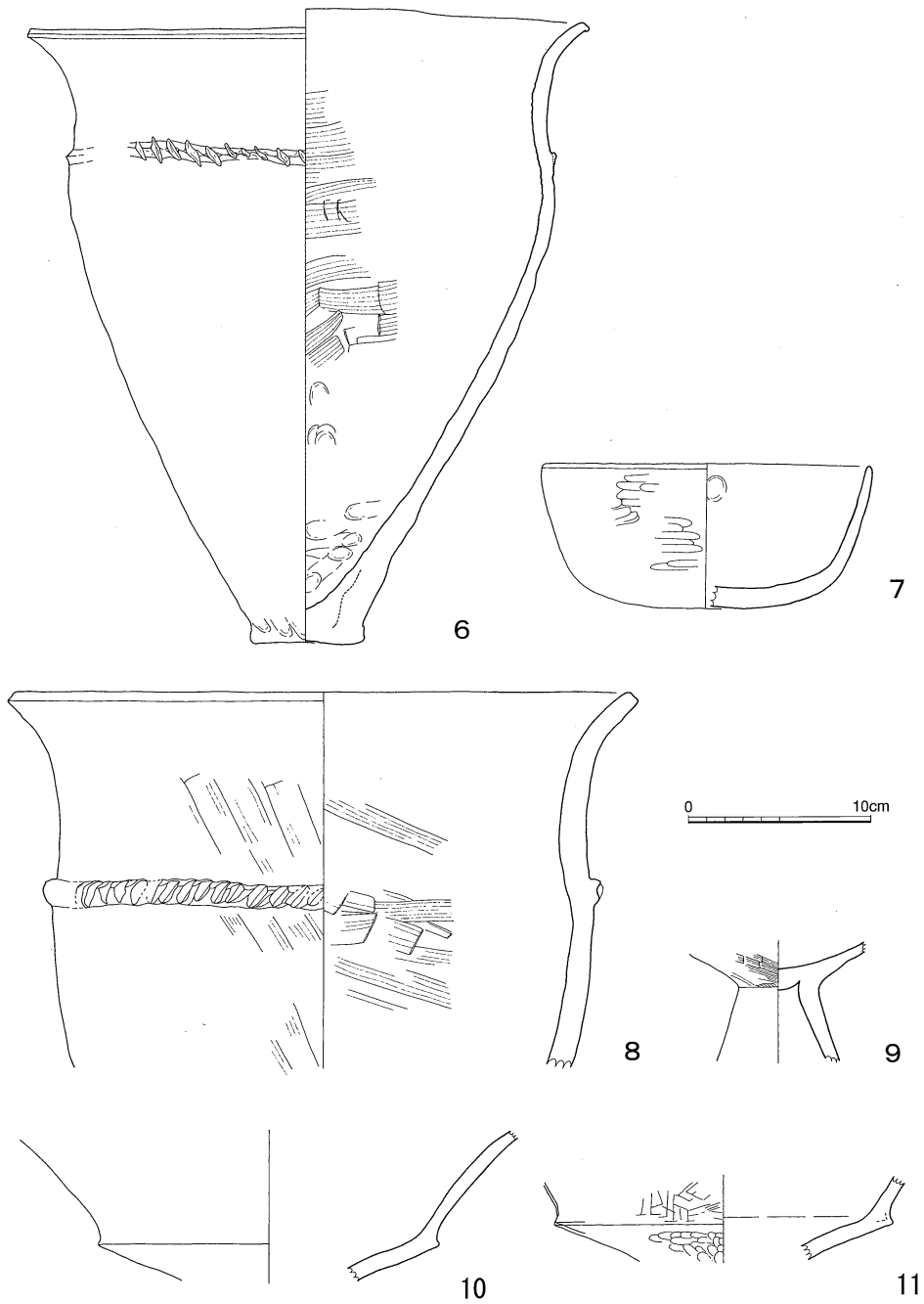
第6图 立山遺跡西区遺構分布图



第7図 立山遺跡SA1遺構実測図



第8図 立山遺跡SA1出土遺物実測図(1)



第9図 立山遺跡SA 1出土遺物実測図(2)

10は高坏の坏部で、坏部下位に稜を有し、大きく口縁部が外反する。口縁部端を欠くが稜部径が約19cmを測る。内外面ともナデ調整が施されている。11は10と同じタイプの坏部で、外面にミガキ調整が見られる。9は高坏の脚部で接合部から「八」の字に広がる。

7は丹塗りの椀で、口縁部から底部にかけて半分近くが残存している。底部をしっかりと持ち、やや外反気味に口縁部へと続く。口縁部径は約8cm、高さ約8cmを測る。内面はナデ調整、外面はミガキ調整が施されている。

他に小型の長頸壺と思われる薄手の口縁部片などが見られる。

石器（第31図）

1は台石である。大きさはおよそ21cm×18cmの方形で厚さ8cmを測る。表面に部分的にススの付着が見られる。2は磨石である。16cm×14cm、厚さ10cm大の拳大の磨石である。

SA2

遺構（第10図）

西区南側のO-10グリッドに単独で検出された竪穴住居。主軸をN26°Eに持つ。長軸約450cm、短軸約390cmの長方形プランを呈する。検出面からの床面までは約15cmと浅い。柱穴は4本で深さは20~40cmと浅い。柱間は190cm~200cm、及び280cmを測る。埋土には炭化物を多く含む土器の絡むものも見られる。御池ボラの密度は低い。南隅には長軸約90cm、短軸約70cm、深さ約20cmの楕円形の掘り込みが見られる。

遺物

SA2では遺物の出土量は少ない。図化できたのは甕のみであった。3点とも頸部あるいは頸部下位に刻目突帯を施す。すべての刻目には布目痕が見られる。

土器（第11図）

12は口縁部から胴部、および底部が1/2程度残る。胴部・頸部ともあまり張らず、口縁部も頸部から外反しながら途中から3cmほど直立する。布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が、若干くびれる頸部の下位に見られる。口縁部が最大径で約32.5cmを測る。14は底部で平底を呈する。器面調整は内外面ともナデ調整が施されている。

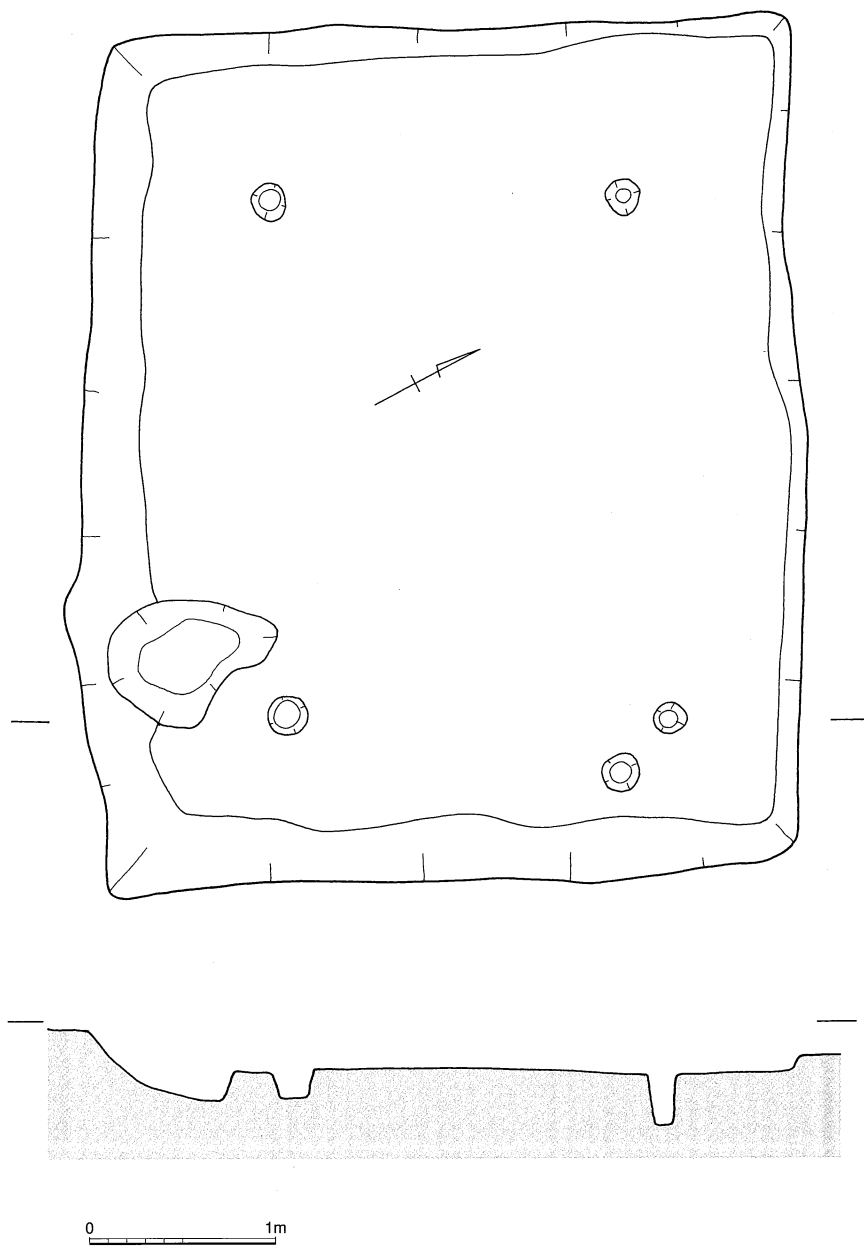
13は頸部がやや締まり口縁部が外傾する甕で、頸部に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が施してある。口縁部から胴部にかけて残る。口縁部径と胴部最大径がほぼ同じで口縁部径で約24cmを測る。内外面ともナデ調整が施されている。

15は口縁部が大きく外反し、頸部に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯を施す甕である。残存は頸部から口縁部の1/8程度である。口縁部径が最大径で推定径約35cmと思われる。内外面ともナデ調整である。

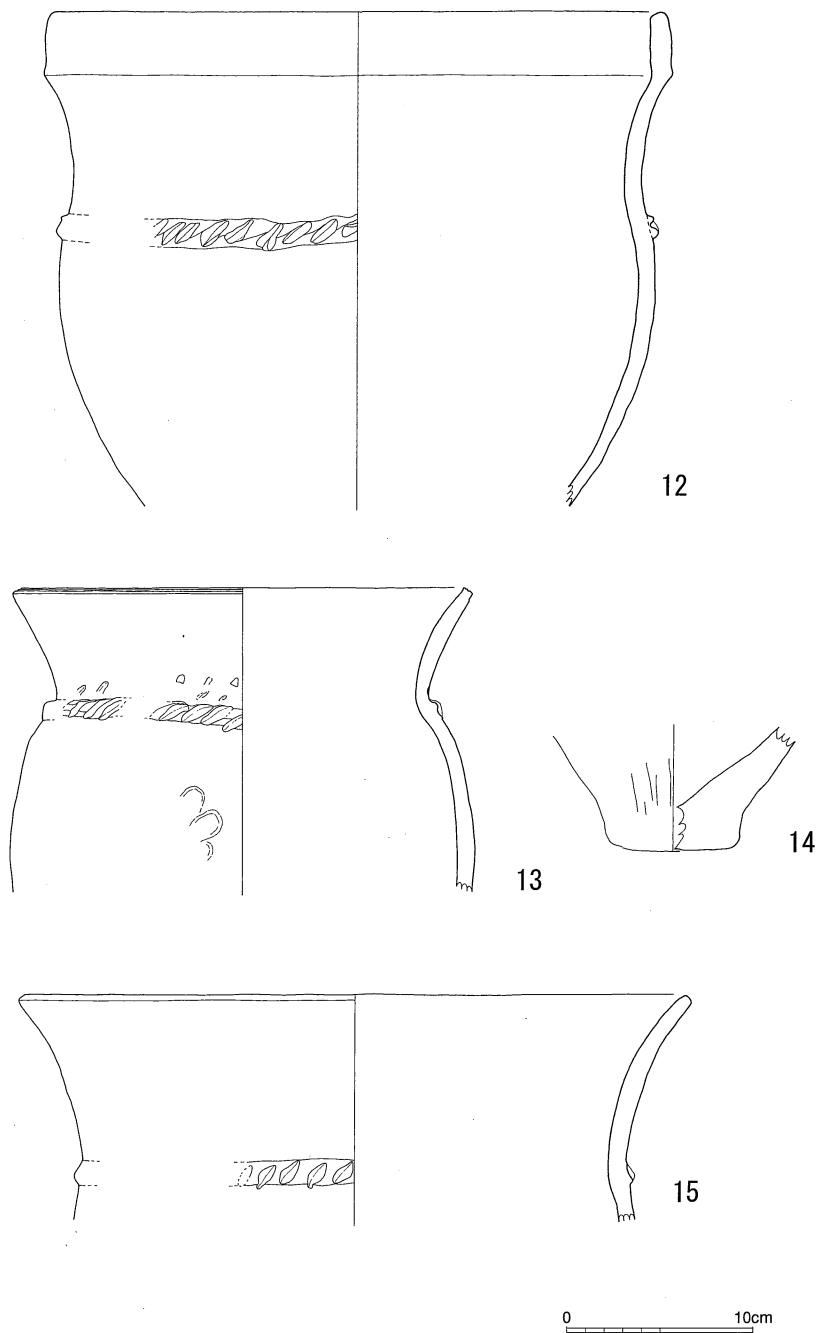
SA17

遺構（第12図）

西区北側住居密集地の北西端のK-8グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN5°W



第10図 立山遺跡SA2遺構実測図



第11図 立山遺跡S A 2 出土遺物実測図

に持つ。南にSA18、東にSA28が隣接する。長軸約280cm、短軸約230cm～300cmの隅丸台形状のプランを呈する。検出面から床面までの深さは約5cm～10cmと浅い。中央に長軸約90cm、短軸約80cm、深さ約10cmの方形の掘り込みがある。掘り込みの南北脇に径20cm、深さ30cm前後の柱穴が対角線上に1本ずつ検出された。柱間は160cmを測る。

遺物

SA17では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA18

遺構 (第13図)

西区北側住居密集地の北西端のK-8グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN42°Wに持つ。北にSA18が隣接する。長軸約300cm、短軸約300cmとほぼ方形プランを呈する。検出面から床面までの深さ10cm前後と浅い。住居東側角に長軸約80cm、短軸約40cm、深さ約20cmの楕円形状の掘り込みが検出された。柱穴は掘り込みが検出された東角を除く三隅で1本ずつと、ほぼ中央部で1本の径4本検出された。支柱は三隅で検出された3本で径約20cm、深さ約30cm、柱間は180cm～210cmを測る。

遺物

SA18では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA23

遺構 (第14図)

西区北側住居密集地の北東端のK-10グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN10°Wに持つ。南にSA22が近接する。また、南東側にはCS8が隣接する。長軸が北壁側で460cm、南壁側で380cm、短軸が西壁側で350cm、東壁側で280cmと歪な台形状のプランを呈する。検出面から床面までの深さは10cm前後である。柱穴はそれぞれの角に4本柱が検出されている。いずれも径約20cm、深さ約15cmをはかる。柱間は180cm～340cmを測る。

遺物

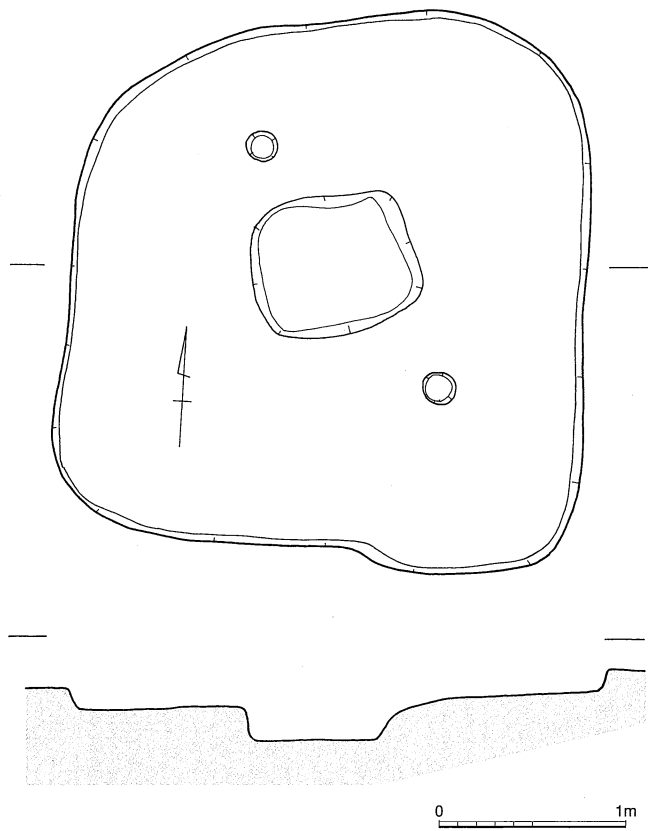
SA23では少量の遺物が出土している。図化したのは壺・碗の2点である。

土器 (第17図)

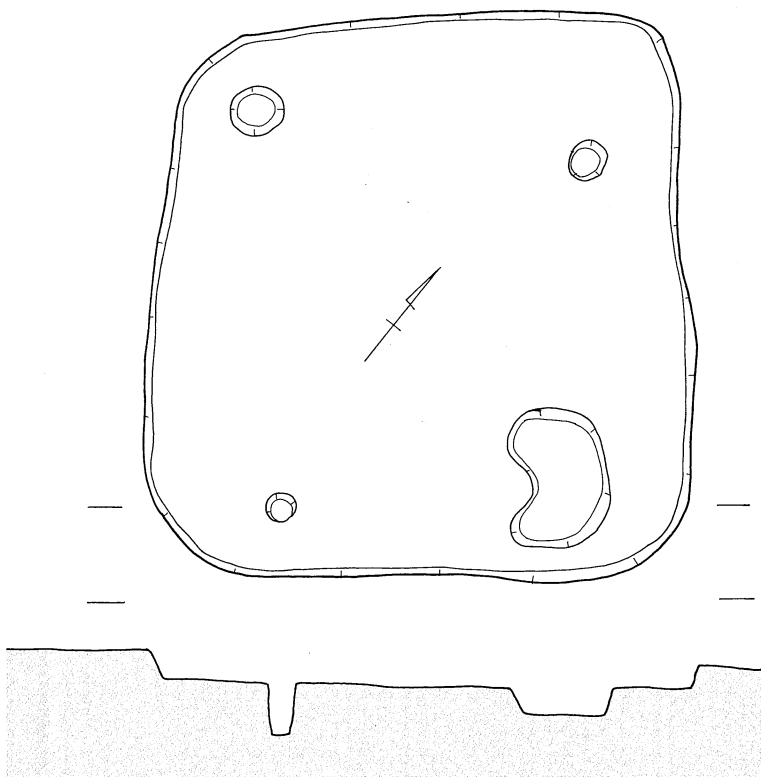
23は小型の壺である。なで肩で、口縁が直立気味に外反する。口縁部から肩部までの1/6程度が残存する。推定口径が約11.5cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。

24は口径約10cmの器壁の薄い小型の碗である。底部を欠くが尖底気味の底部から口縁に向かって内湾気味に開く。1/5程度の残存状況である。内外面ともナデ調整が見られる。

他にも刻目突帯を持つ甕の破片も数点見られる。



第12図 立山遺跡SA 17 遺構実測図



0 1m

第13図 立山遺跡SA18遺構実測図

SA24

遺構（第15図）

西区北側住居密集地の北西端、L-7～8グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN15°Wに持つ。北側にSC4が隣接する。長軸470cm、短軸420cm～400cmの方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは10cm前後である。柱穴は北壁際と南壁際にそれぞれ3本ずつの計6本の柱が検出された。柱穴は径が約15cm～20cm、深さが約10cm～15cmを測る。柱間は南北の柱の間隔が約300cm、東西間が130cm～190cmを測る。

遺物

SA24では甕を中心に若干の遺物の出土が見られる。

土器（第16図）

16、17、18、19はいずれも口縁部に最大径を持ち、頸部のくびれが少なく口縁が外反する甕である。4点とも刻目突帯は有しない。16は推定口径約28cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。17は推定口径約21.5cmを測り、内外面ともナデ調整が見られる。18は推定口径約16.6cmと小型の甕である。胴部最大径が約13cmと胴部に比べ口縁部が大きく開く。内面はナデ調整、外面はヘラ削り後にナデ調整が見られる。外面に部分的にススが付着する。19は推定口径約17cmを測り、内外面ともナデ調整が見られる。

20は胴部の張りがなく、あまりくびれの目立たない頸部から緩やかに口縁部が開く。頸部には布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が巡る。刻目は左上から右下に刻まれている。胴部最大径は約29cmを推測される。内外面ともヘラ状工具によるナデ調整が見られる。外面頸部付近にはススが付着する。21は上底気味の底部。

22は完形の手捏ねのミニチュア土器である。尖底の底部から一気に口縁へ開く。指押さえによる成形がなされている。器高約2.7cm、口径約5cmを測る。

SA25

遺構（第18図）

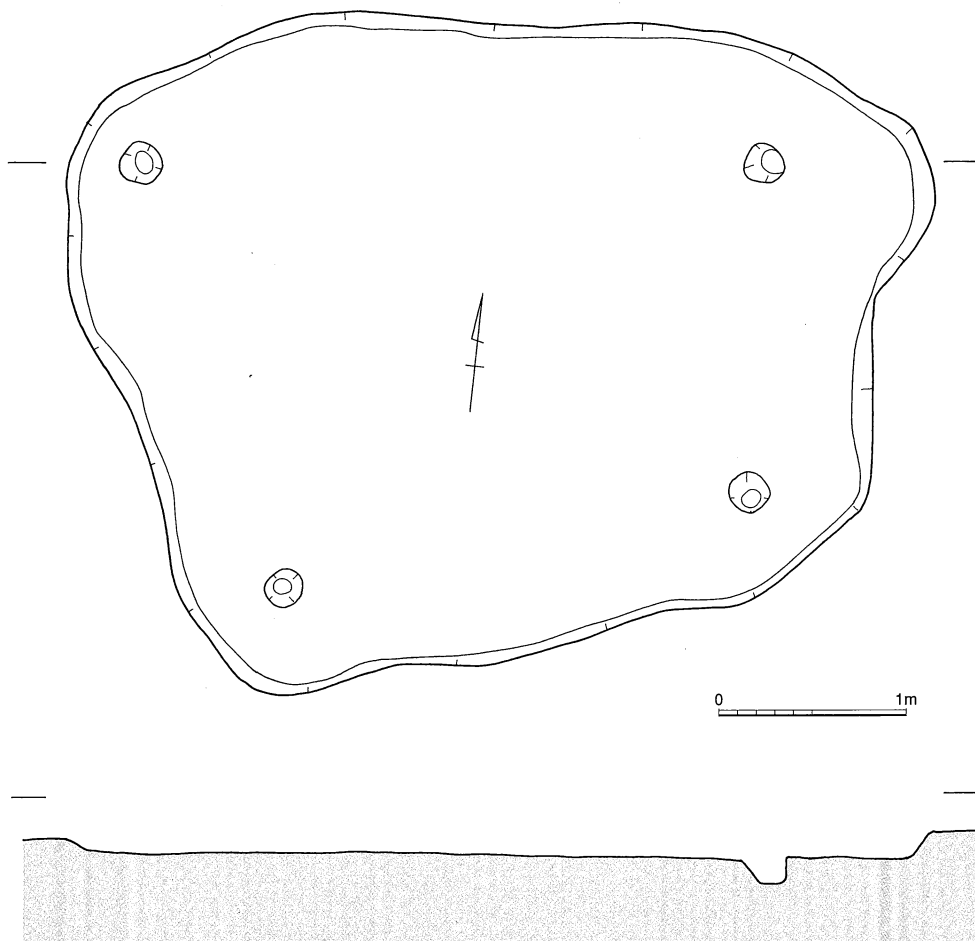
西区の南側のO-8グリッドで単独で検出された竪穴住居。主軸をN25°Wに持つ。東方約30cmのところSA2が分布する。南東角を削平で欠くが、長軸約300cm、短軸約290cmの方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは10cm前後を測る。北西角に約90cm×70cm～40cm、深さ約10cmの掘り込みがある。柱穴は北東角と南西角に1本ずつ検出されている。いずれも径約20cm、深さ約10cmを測る。柱間は対角線上で約250cmを測る。支柱は対角線上の2本しか確認されていないが、北西角は掘り込みで、南東角は削平で柱の検出ができなかったことを考慮に入れると4本柱が推測される。

遺物

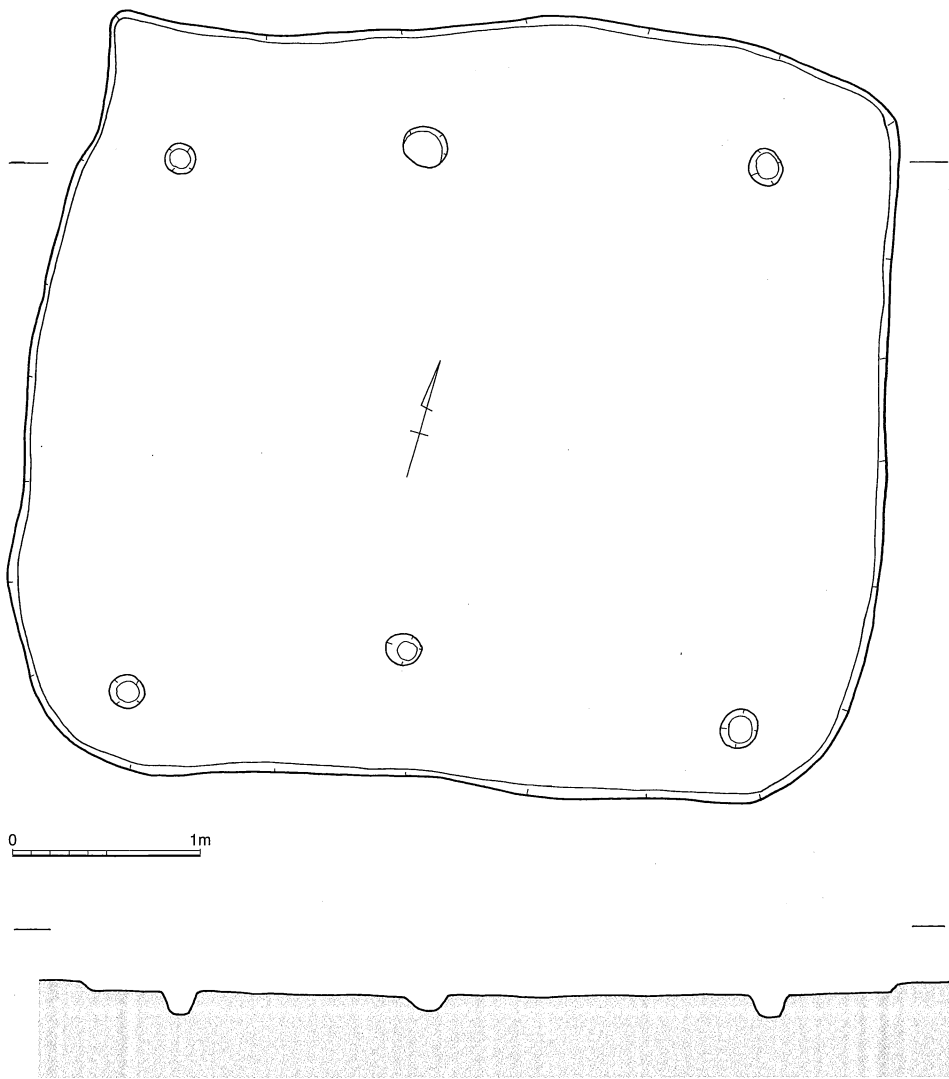
SA25では住居の中央部を中心に若干の遺物が出土している。図化できたのは壺の同一個体の口縁、頸部、底部である。

土器（第19図）

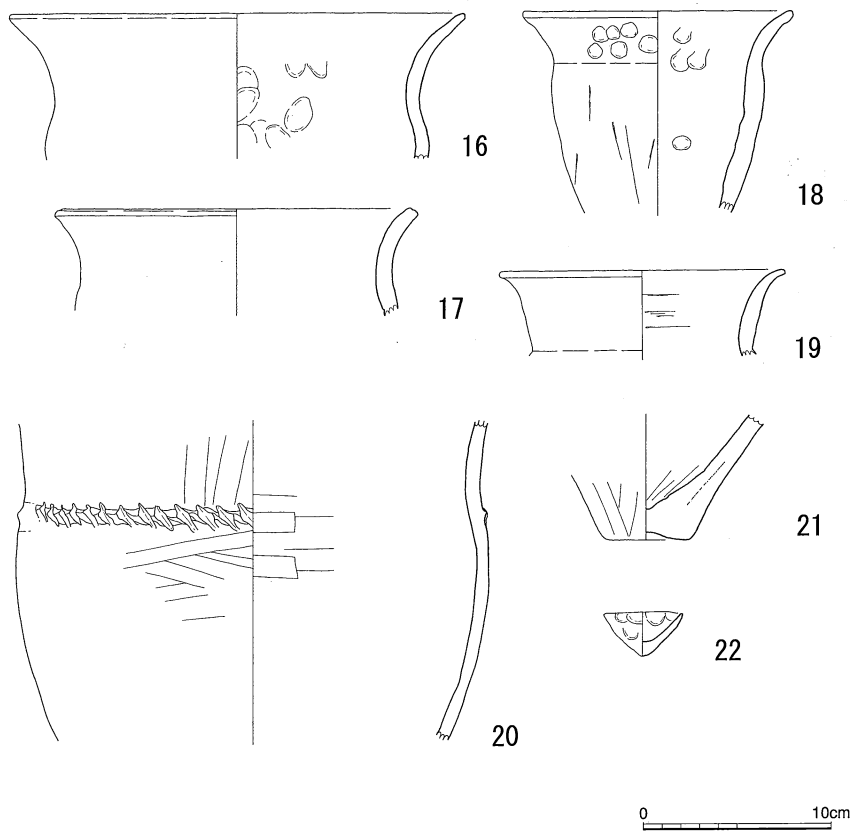
25・26・27は同一個体の大型の二重口縁壺である。頸部から口縁部に向かっての外反



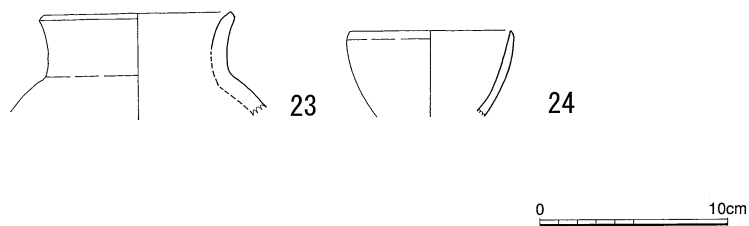
第14図 立山遺跡SA 23遺構実測図



第15図 立山遺跡 S A 2 4 遺構実測図



第16図 立山遺跡SA 24出土遺物実測図



第17図 立山遺跡SA 23出土遺物実測図

度は小さく口縁も直立する。二重口縁部に文様は見られない。推定口径約14cmを測る。頸部から肩部にかけての部分は肩のかなり張る器形で頸部は細く締まる。頸部径は約13.5cmを測る。胴部を欠くが球形でかなり張った胴部と思われる。底部は若干厚みのある平底である。底径は約8cmである。内外面ともハケ目調整が見られる。又、肩部や底部外面にスス付着も見られる。

SA26

遺構 (第20図)

西区北側住居密集地の北東端のK-11グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN25°Wに持つ。西にSA23とSA22が隣接する。長軸約380cm、短軸約300cmの方形プランだが東壁が弧状の丸みを持つ。検出面から床面までの深さは10cm前後である。北東角の柱近くに約50cm×約40cm、深さ約30cmの円形の掘り込みがある。また、柱穴は四隅に検出され、柱穴は径が約20cm、深さ約20cmを測る。柱間は180cm～220cmを測る。

遺物

SA26では住居全体から多量の遺物が出土している。

土器 (第21図・第22図)

28は壺の頸部である。かなり肩が張り頸の締まった器形を呈する。頸部には無紋で「V」字状の突帯が巡る。内面はハケ目、外面はナデ調整が見られる。

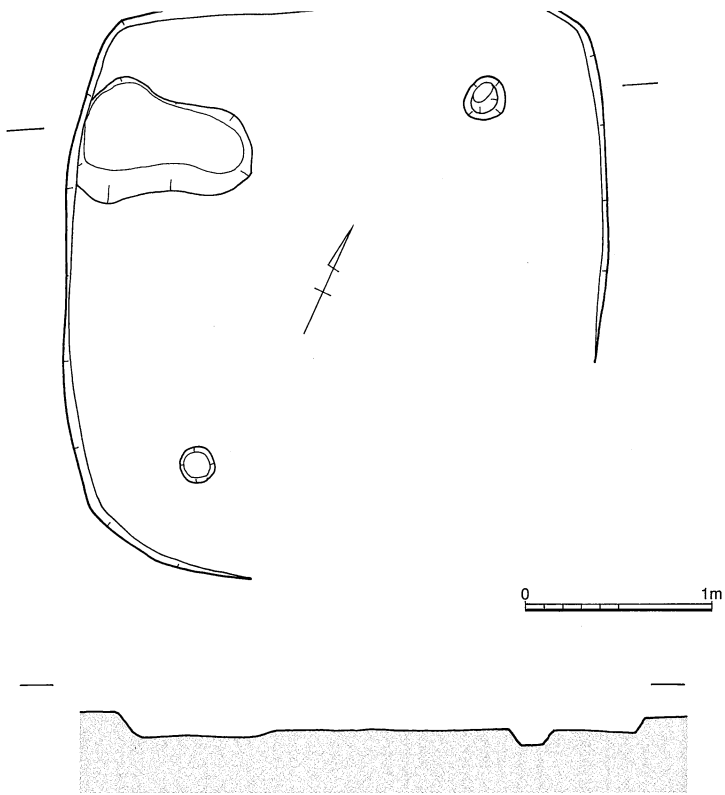
29は刻目に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯を胴部上位に巡らした、球形胴部の壺の胴部である。1/4程度の残存部位だが突帯部での径は推定で50cmを越す大型の壺である。外面はハケ目調整である。

30、31、32は頸部に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯を有する甕である。いずれも張りのない胴部に締まりのない頸部から口縁部が外反する器形である。口縁部径が最大径である。推定口径は30が約34cm、31が約30cm、調整は30が内外面ともハケ目調整、31が内外面ともナデ調整で内面に黒色物が付着する。32は布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が巡る頸部片である。頸部にくびれはなく、胴部から突帯を境に口縁部が大きく外反する。刻みは左上から右下へと刻まれている。調整は内外面ともハケ目調整である。突帯部の径は約28.6cmを測る。

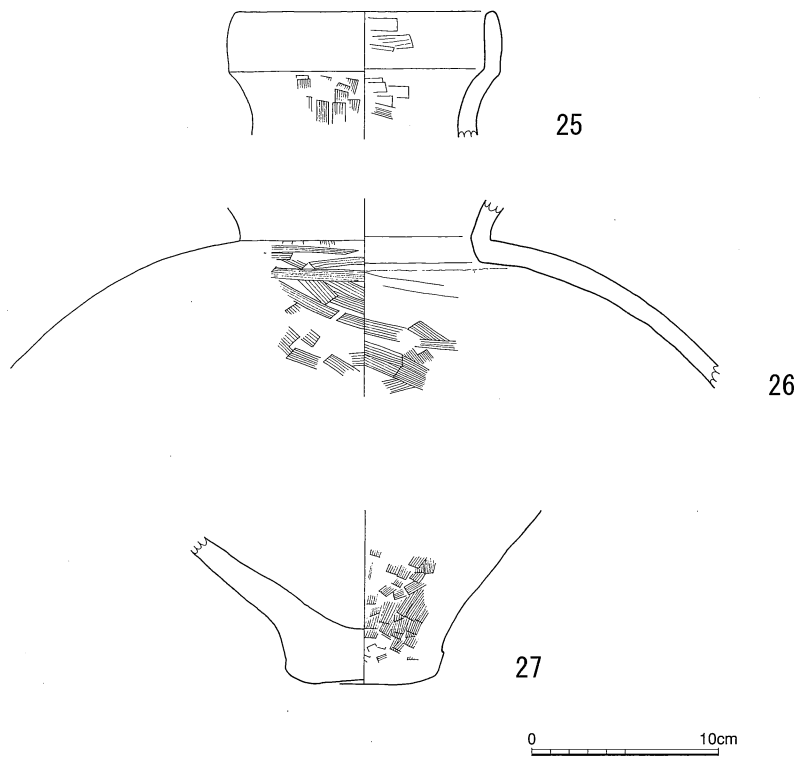
38、40は布目痕の残る刻目付きの貼付突帯を有しない甕で頸部の締まりもなく、肩部、胴部とも張りのない長胴で、口縁もさほど外反しない器形を呈する。39は底部から口縁部まで残存しているが、胴部中位での接合箇所が見つからず、個々の図化を行った。推定口径は約20cm、胴部上位での推定径が約23cmと胴部にわずかな最大径を持つ。内外面ともナデ調整が見られる。40は底部を欠くが推定口径が約22.5cm、胴部の推定最大径が約23cmと差違はない。内外面ともハケ目調整が施されており、内面ではナデ消しも見られる。口縁部付近でスス付着も見られる。

36は壺の口縁部。肩のかなり張った器形で頸部から5.5cmほど口縁が直立気味に外反する。推定口径が約10cm、推定頸部径も約10cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。

37は壺の口縁部で二重口縁を呈する。肩部はあまり張らず、締まりのある頸部は口縁に



第18図 立山遺跡SA 25遺構実測図



第19図 立山遺跡SA25出土遺物実測図

向かって大きく外反し口縁部はわずかに外に傾く。口縁部に文様は見られない。推定口径約17.5cm、頸部径約12cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

33は小型壺の口縁部にあたる。薄手の器厚で頸部から直立気味に外傾しながら開く。推定口径約7.8cmである。内外面ともナデ調整が見られる。

34は甕の平底の底部。底径6.7cmを測る。内外面ともナデ調整が認められる。

35は平底の底部である。底部に厚みを持ち底部から胴部への立ち上がりも球形に近い事から、壺の底部と思われる。底径は6cm、胴部推定径は14cm前後と思われる。内外面ともナデ調整が見られる。底部は34のような平底が主流であるが、丸みを持つ平底の破片も数点見られる。大型の壺の底部の可能性もある。

石器 (第31図)

3はSA26出土の磨石である。6.4cm×6.2cm、厚みは5.4cmと小振りの磨石である。上面と左右の面に使用の痕跡が見られる。

SA28

遺構（第24図）

西区北側住居密集地の北西側のK-8～9グリッドにまたがって検出された竪穴住居。主軸をN20°Eに持つ。西側にSA17、SA18が隣接する。長軸約325cm、短軸約270cm～290cmの方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは5cm～10cm前後と浅く、北壁面では壁面は削平を受けており、床面しか確認されない箇所も見られる。柱穴は南西角と南東角に1本ずつと北壁中央部に1本が正三角形形状に検出された。柱穴は径約15cm、深さ約10cmを測る。柱間は190cm～230cmである。

遺物

SA28では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA22周辺出土の遺物

SA22では住居北寄りに少量の古墳時代の遺物が出土している。図化したのは甕・壺の土師器4点と砥石1点である。

土器（第23図）

41は口縁部から胴部にかけておよそ1/2が残存する甕。張りのない胴部から頸部付近でややくびれ口縁部にかけて外反する。口縁部径が最大径で約23cmを測る。内外面とのナデ調整が見られる。外面にはススが付着する。42は甕の頸部付近の破片である。胴部は殆ど張らず、頸部から口縁部に向かって外反する器形と思われる。頸部には布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が巡る。刻目は左上から右下に向かって施している。突帯部の推定径が約20cmを測る。43は口縁部から胴部にかけておよそ1/5が残存する小型の甕である。胴部が張り頸部のくびれも鋭く、口縁部が短く外反する。最大径は胴部に持つが欠損している。口縁部最大径は約10cmを測る。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が見られる。

石器（第31図）

4は砥石で、7.5cm×2.2cm、厚み1.0cmと小振りの砥石である。

【土坑】

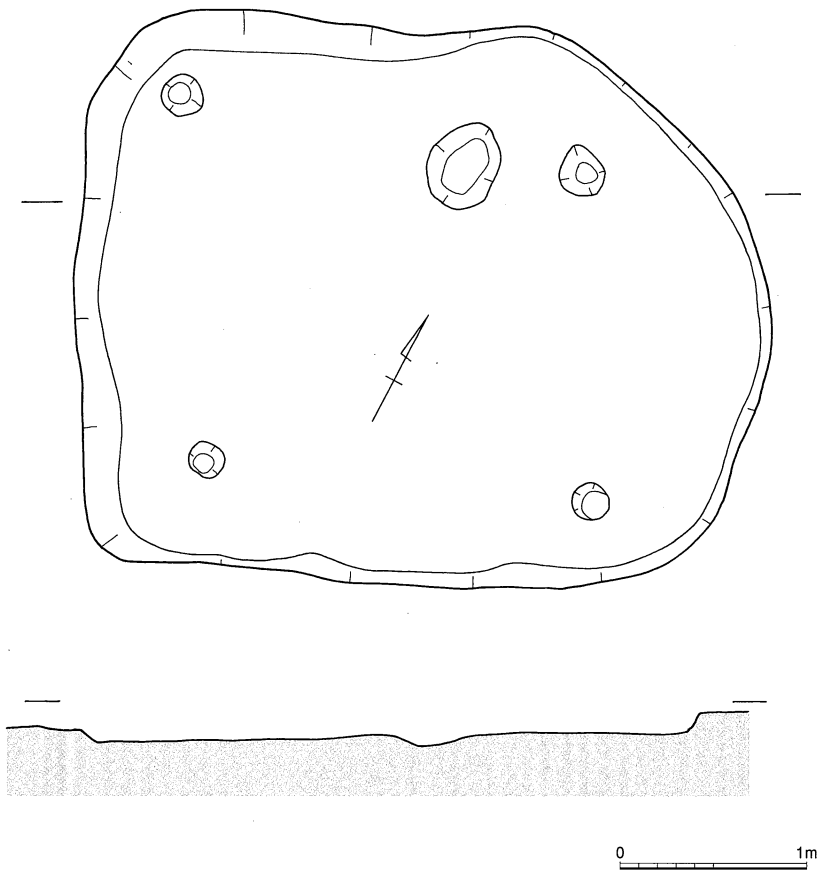
SC1

遺構（第25図）

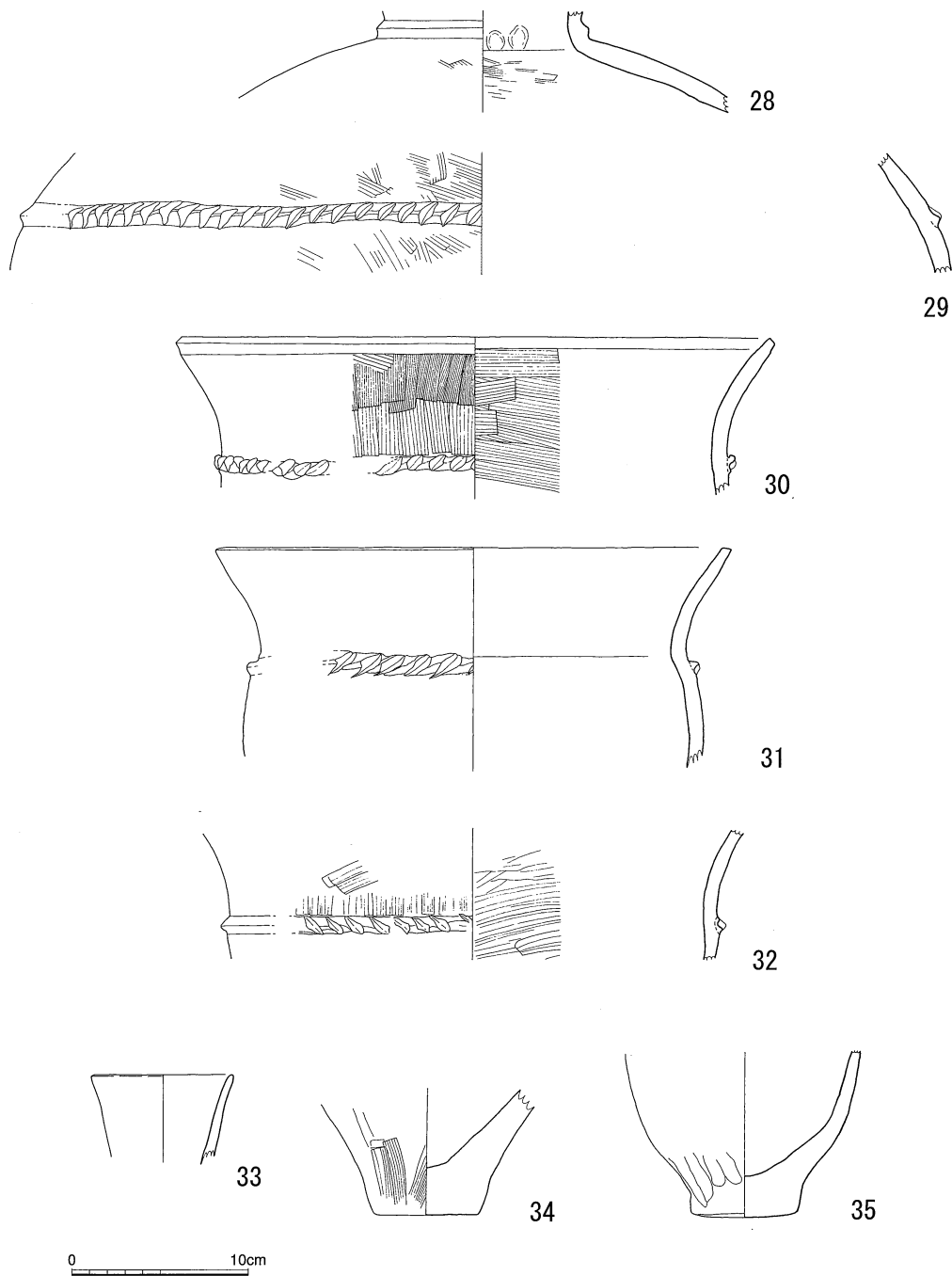
西区北側住居密集地の中央部L-9グリッドで検出された土坑でSA24の東にある。規模は確認上面で約75cm×約70cmの円形プランを呈し、確認面から床面までの深さが約50cmを測る。床面はほぼ平坦な土坑である。上位で土器を少量含む。

遺物（第26図44・45）

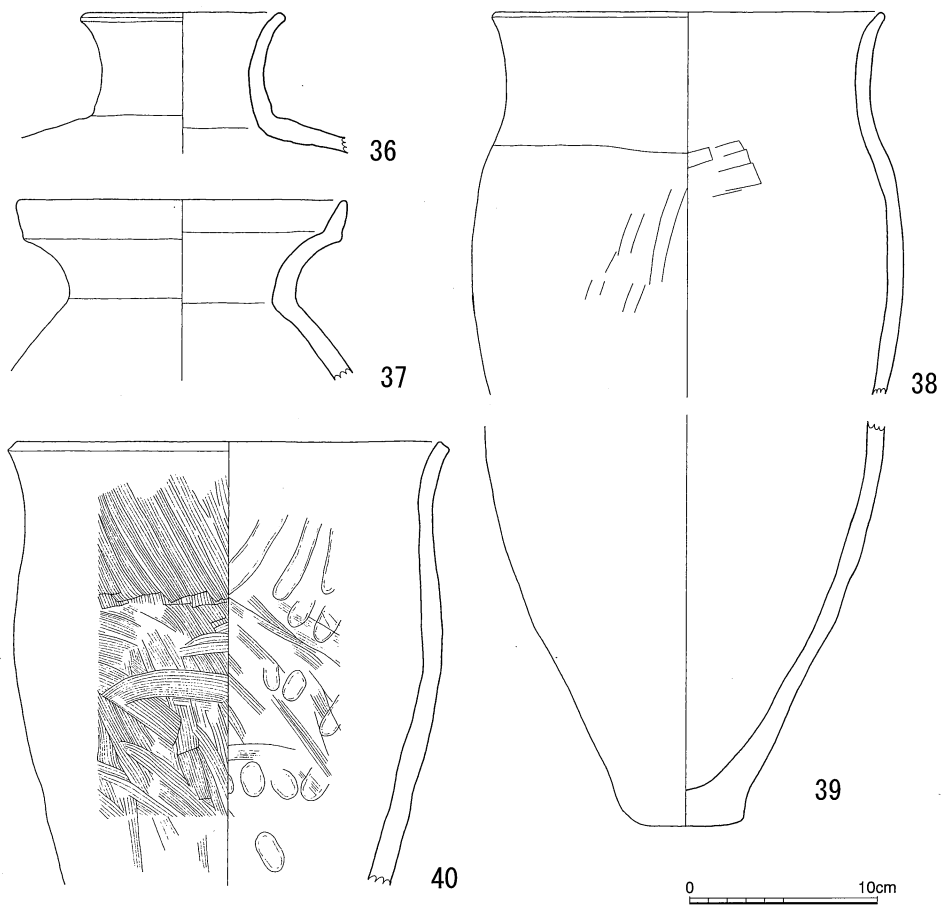
遺物としては甕が出土している。44は刻目突帯を有しない甕である。胴部の殆どなく、張りのない頸部から口縁部へ外傾する。口縁部が最大径にあたり推定口径約25cmを測る。内外面ともハケ目調整が施されている。外面胴部下位にスス付着が見られる。45は壺の底部で丸底を呈する。



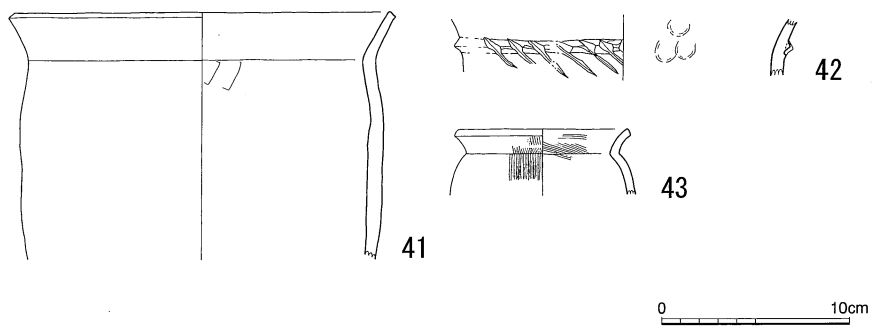
第20図 立山遺跡SA 26遺構実測図



第21图 立山遺跡SA26出土遺物実測図(1)



第22図 立山遺跡SA26出土遺物実測図(2)



第23図 立山遺跡SA22周辺出土遺物実測図

SC4

遺構（第25図）

西区北側住居密集地の北西端のL-7グリッドで検出された土坑。SA24のすぐ北に隣接する。規模は確認上面で約150cm×約100cmと南北に長い楕円形プラン呈し、確認面から床面までの深さが約30cmを測り、床面はほぼ平坦である。

遺物（第26図47・48）

遺物としては甕、小型の椀が出土している。

47は胴部の張らない甕で、頸部に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が巡る。刻目を左上から右下に向かって施している。突帯部の推定径が約20cmを測る。頸部からおよそ8cmと比較的長い口縁部が外反する。内外面ともナデ調整が施されており外面口縁部にはススが付着する。

48は底部が尖底を呈する小型の椀。底部から「V」字状に口縁部へと開く。口径約7.7cm、器高約7cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。

SC6

遺構（第25図）

西区北側住居密集地の北西端のK～L-10グリッドで検出された土坑。SA22とSA23のすぐ東に隣接する。規模は確認上面で約135cm×約120cmとほぼ円形プランを呈し、確認面から床面までの深さが約30cmを測り、床面は掘り鉢状に弧を描く。埋土中に土師器の甕が出土する。埋土はSA22の柱穴の埋土と類似する。

遺物（第26図49）

49は刻目付突帯を有しない甕である。頸部のくびれも胴部の張りも殆どない。口縁部は頸部付近から大きく外反する。口縁部径が最大径にあたり、推定径約30cmを測る。内外面ともナデ調整で外面全体にスス付着が見られる。

SC8

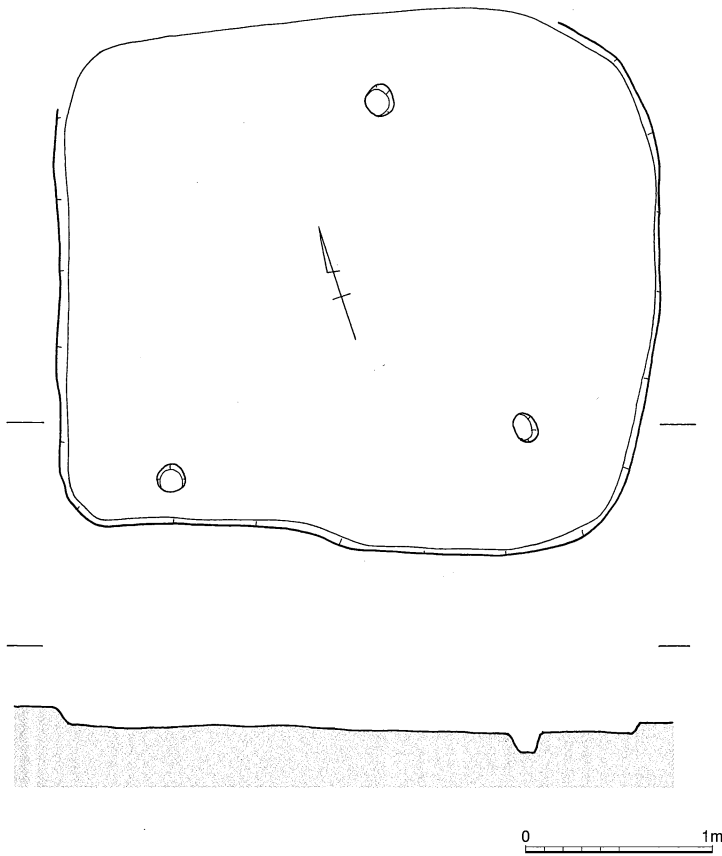
遺構（第25図）

西区北側住居密集地の北東端のL-11グリッドで検出された土坑。SA26の南に隣接する。規模は確認上面で約130cm×約115cmのほぼ円形プランを呈し、確認面から床面までの深さが約30cmを測る床面の平坦な土坑である。遺物の出土はなかった。

【遺構外出土の遺物】

土器（第27図～第30図）

竪穴住居10軒を検出した西区ではSA1やSA2等の住居以外からも、周辺で多くの土師器等の遺物が出土している。特に、調査区の北側で多く見られる。なお、25・131・266はL-8グリッド、SC1の北側で見られた土器集中箇所出土の遺物である。又、東側へ拡張したO-16グリッドでも遺物の出土があった。遺物は住居跡出土の遺物と同様に甕・壺・高坏・ミニチュア土器等である。



第24図 立山遺跡SA 28遺構実測図

甕 (50～58・63・65・67・69)

出土した甕には刻目突帯を有しないものも見られるが、ここでは刻目突帯をもつ甕を掲載した。

50～55・57・58はS A 2 4が検出されたK-7と西隣のK-6グリッドからの出土である。いずれも頸部に刻目付きの貼付突帯を持ち、口縁部が頸部から大きく外反する甕である。最大径を口縁部に持つ。50は口縁部から胴部までの部位で口縁部径は約36cmを測る。51は丸みを持つ平底の底部で52とは同一個体と思われる。53・54・55も口縁部径が30cmを越える大型の甕である。56はN-6、57はL-6、58はO-11から出土した胴部に刻目付きの貼付突帯をもつ甕である。56は胴部に若干の膨らみを持つ。突帯部径が約30cmを測る。63は突帯部径が約14cmと小型の甕である。いずれも筒状の胴部と思われる。69は胴部から底部近くまでが残る。胴部中に最大径を持ち刻目付きの貼付突帯が付く。径は約25cmを測る。突帯の刻みは1cm～1.5cmの間隔を保ちながら幅約1cm程幅広のものである。刻目は左上から右下に向かって刻まれている。

65はL-8グリッドの土器集中箇所出土の遺物である。頸部に刻目突帯はなく、頸部から直立気味に外反し端部で外に大きく開く。口縁部径約27.6cmを測る。口縁端部の反り具合から壺の口縁部とも考えられる。67は上げ底の甕の底部である。

壺 (59・66)

59はM-8グリッドから出土した二重口縁壺の口縁部片である。くびれた頸部から口縁に向かって大きく外反し、口縁部で2cm程直立する。口縁部径は17.2cmである。

66はL-8グリッドの土器集中箇所から出土した頸部から底部近くまでの甕である。ほぼ球形に近い胴部で、中央部よりやや下に最大径を持つ。最大径は28.2cmを測る。

高坏 (61)

61はO-8グリッドから出土した高坏の坏部である坏部の下位に稜を持ち口縁部に向かって大きく外反する。稜部から口縁部までの長い坏部である。

ミニチュア土器 (60・62・64)

60と64は手捏ね土器である。60はN-8、64はL-11グリッドからの出土である。いずれも指押さえ痕が残り、口唇部は指で摘んである。口縁部径は60が約4cm、64が約8cmを測る。62はカップ型の小型の土器である。器壁は薄手で内外面とも工具によるナデ調整が見られる。推定値で口径約7.3cm、器高約6.6cmを測る。

O-16グリッドの遺物 (68・70・71)

西区の東側に拡張したO-16グリッドから古墳時代の遺物が出土している。特徴的な3点を紹介する。場所的には東区との中間地点にあたり東区との関連も考えられる。

68は壺の口縁部片である。頸部からわずかに内湾気味に短く外傾する口縁部で、球形の胴部が付く比較的小型の壺が想定される。

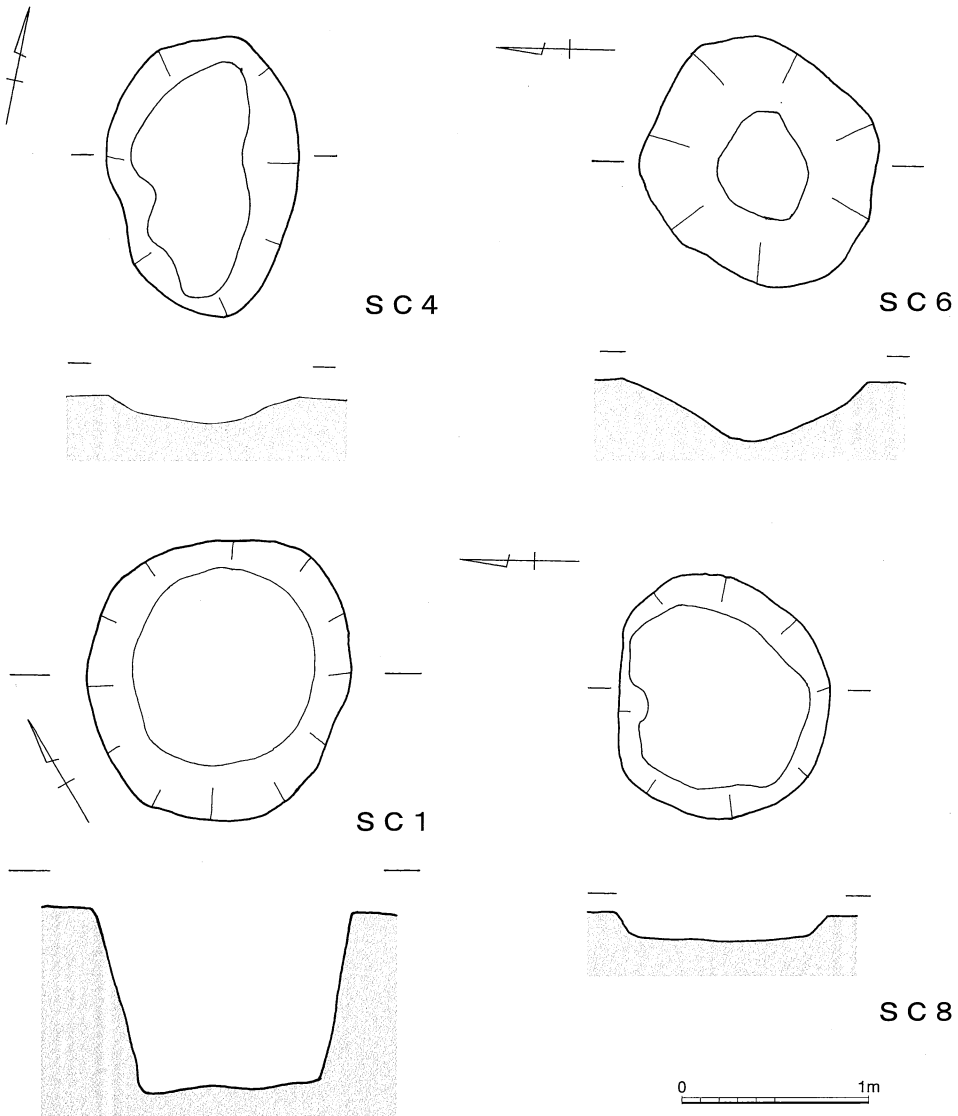
70は高坏の坏部。坏部下位に稜を持ち口縁部へと外傾しながら広がり口唇部でわずか

に外反する。推定の口径約20cmを測る。内外面ともナデ調整で内面上部のみミガキによる調整が見られる。71は高坏の脚部。坏部から「八」の字に裾部まで一気に広がる。裾部径で約15.5cmを測る。調整は内外面ともナデ調整である。

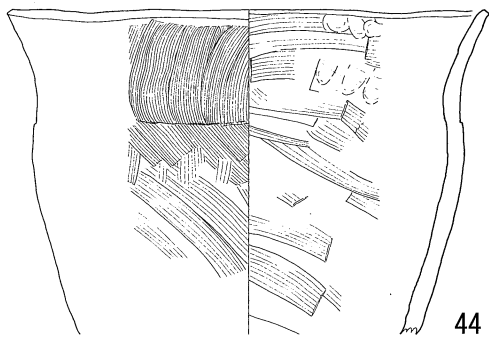
石器（第31図）

西区からは砥石や磨石が数点出土している。

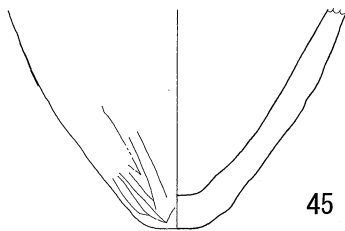
5はL-8グリッドから出土した砥石で、15cm×8cm×7cmの立方体を呈する。



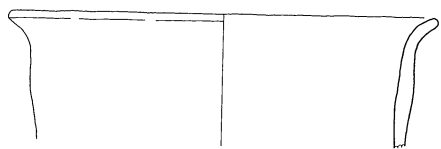
第25図 立山遺跡SC 1・4・6・8遺構実測図



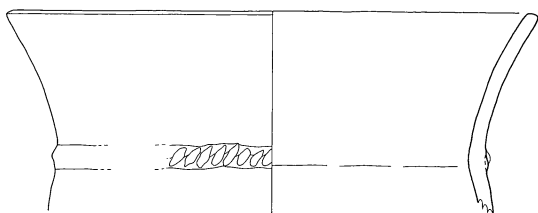
44



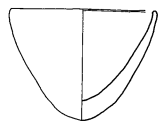
45



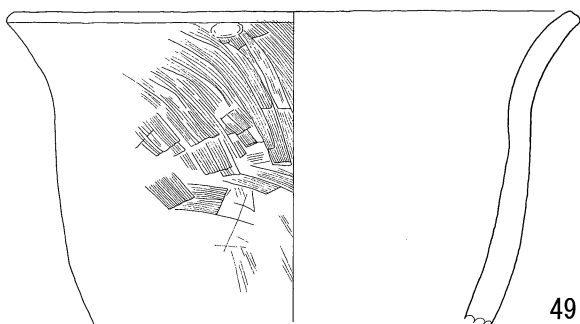
46



47



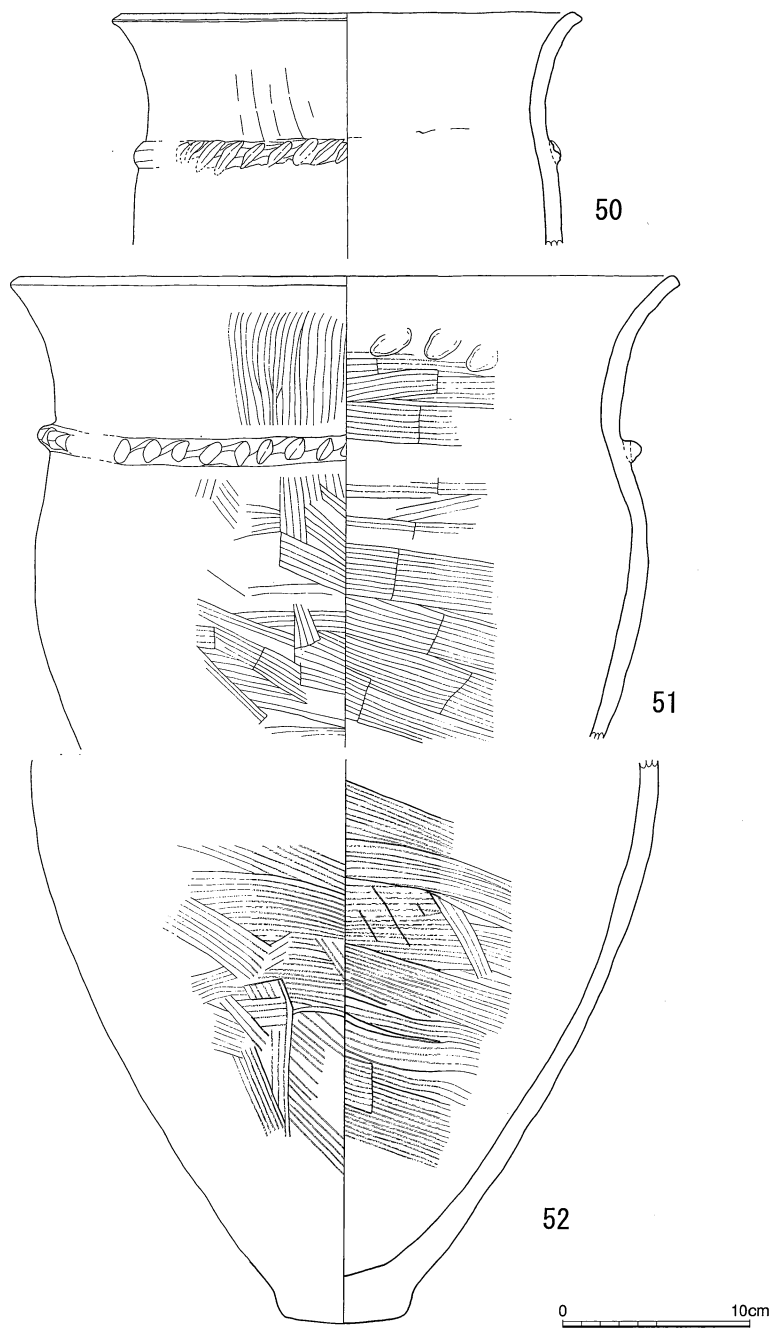
48



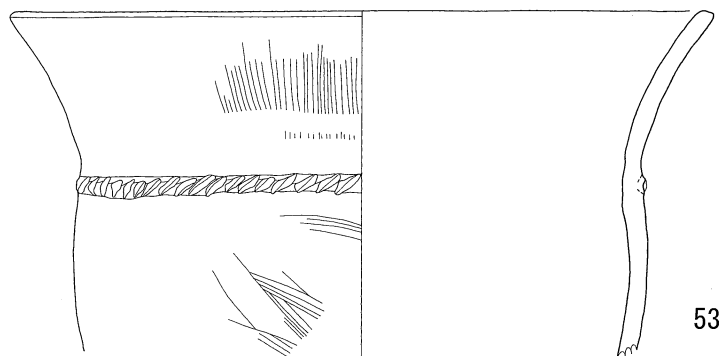
49



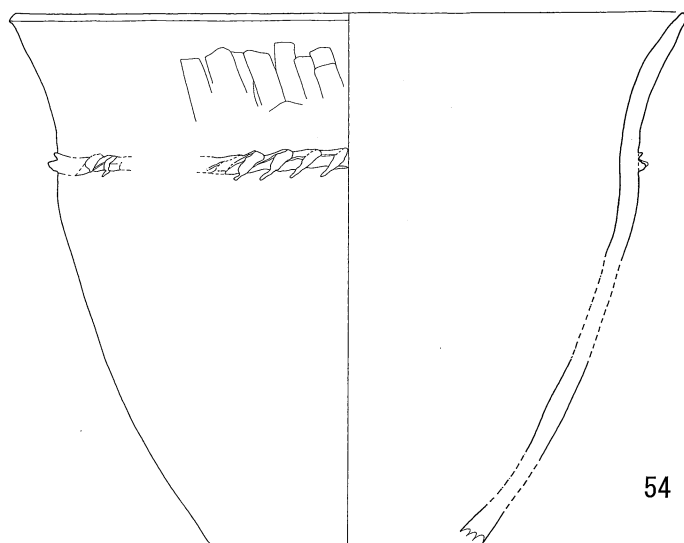
第26図 立山遺跡SC1・3・4・8出土遺物実測図



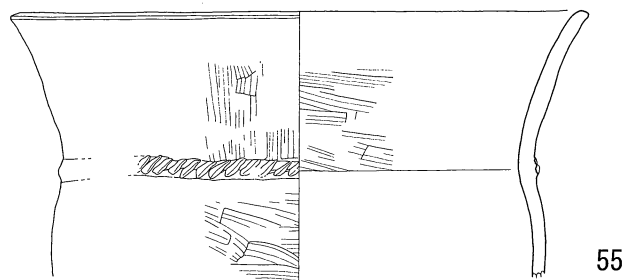
第27图 立山遺跡西区出土遺物実測図(1)



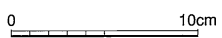
53



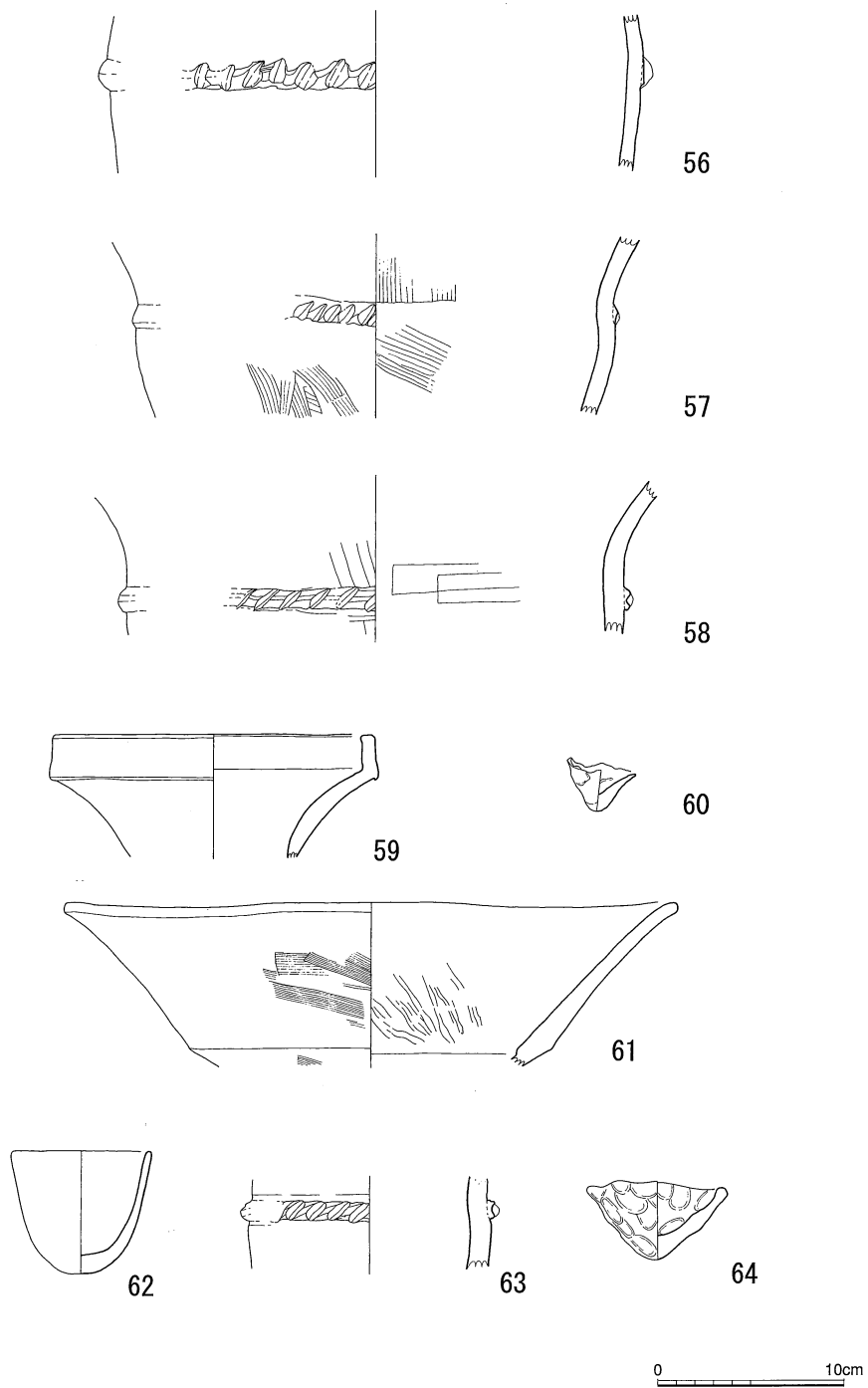
54



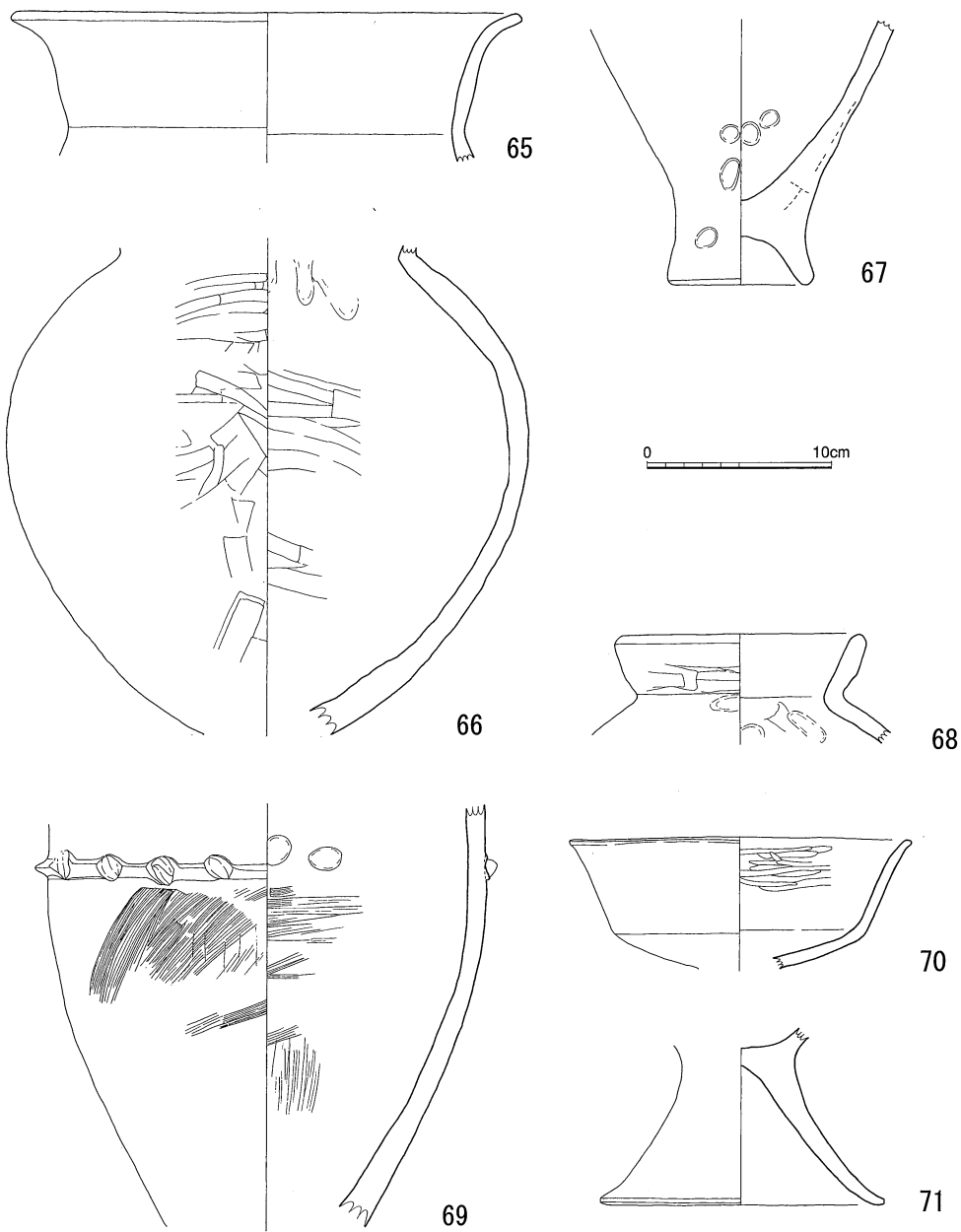
55



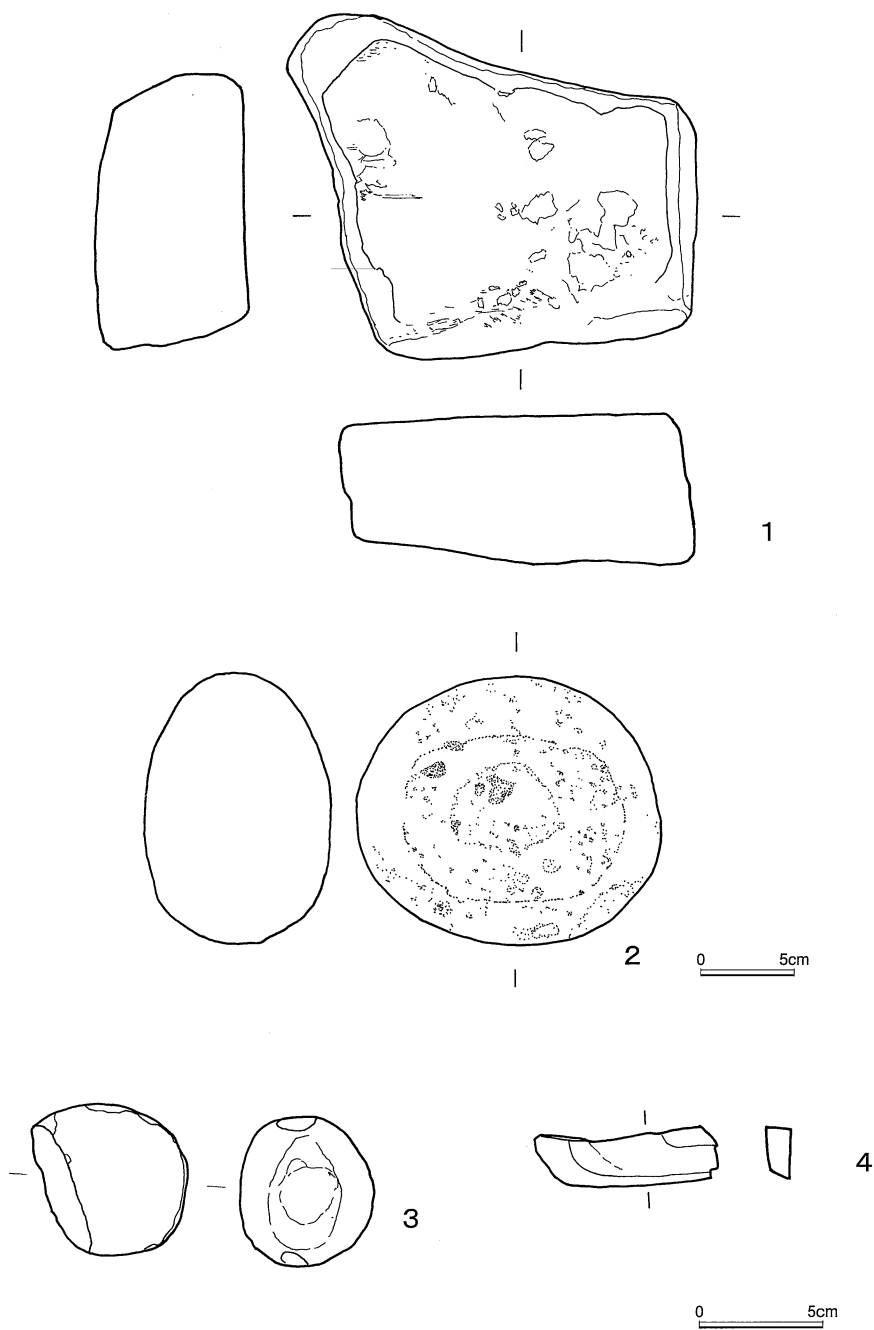
第28図 立山遺跡西区出土遺物実測図(2)



第29图 立山遺跡西区出土遺物実測図（3）



第30图 立山遺跡西区出土遺物実測図(4)



第31图 立山遺跡西区出土石器実測図



第32図 立山遺跡南区遺構分布図

2. 南区の遺構と遺物

南区では調査区の南側で竪穴住居15軒と土坑2基を検出した。古墳時代の住居とした中には遺物を伴わないものも多く、周辺では古代の住居と思われる平地式住居や多くの古代の遺物が散布しており、時期決定に苦慮するところである。しかし、竪穴住居では古代の遺物を伴うものが殆ど見られない事から、竪穴住居は古墳時代とした。但し、竪穴住居の中で、長い煙道を持つカマドを有する竪穴住居のSA12については、遺物が検出されておらず、周辺には古墳時代や古代の土師器が分布するが、特に周辺で古代の土師器の出土する割合が他よりも高い事から古代の住居跡とした。なお、平地式住居と掘立柱建物については、カマドと埋め甕を持つ古代の平地式住居(SA5)が検出されている事や遺物の分布状況等から古代の遺構とした。(第32図)

【竪穴住居】

SA3

遺構(第33図)

南区南側の遺構密集地の西端のW-15グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN35°Eに持つ。BS1の南に当たる。北側の半分近くを試掘トレンチで失っている。又、耕作用のトレンチャーにより相当の攪乱を受けている。残存する部分は一辺が約300cm、検出面から床面までの深さは約35cmを測る。柱穴は2本検出された。柱間は約100cmである。検出された柱穴の位置からすると4本柱が推測される。住居跡の埋土中には炭化物を多く含み、御池ボラの密度も高い。また、粒状のベンガラが含まれる点も注目される。

遺物

SA3では甕と思われる平底の底部片など、わずかな遺物の出土しか見られなかった。

SA7

遺構(第34図)

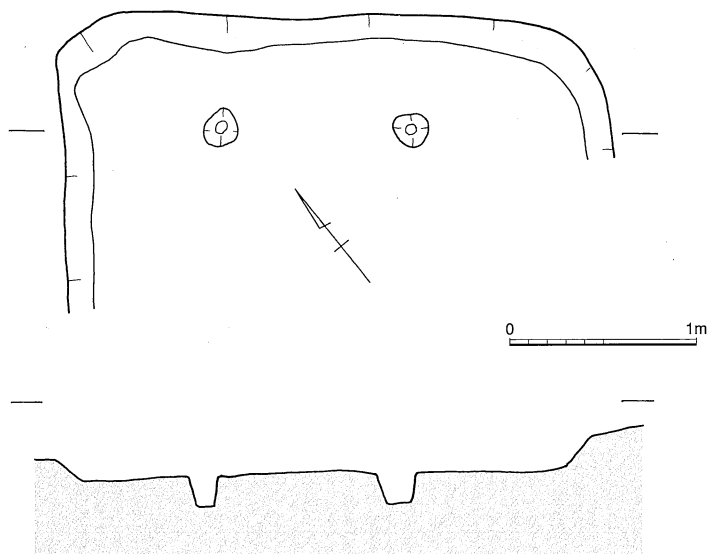
南区南側の遺構密集地の北側のW-16グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN10°Wに持つ。南にはSA8が隣接する。3層面での検出が困難で土器の集中と雨後の土の乾燥の度合い、霜柱の立ち方などを考慮し4層での検出ができた。長軸350cm、短軸320cmと方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約15cmを測る。主柱穴は深さ30cm前後の柱が3本検出されたが北西側は攪乱で確定できない。柱間は約210cmである。

遺物

SA7では住居中央を中心に少量の遺物の出土があった。図化したのは刻目突帯を有する甕と有しない甕の2点である。

土器(第35図)

72・73とも緩やかにくびれる頸部から外反する口縁部を持つ甕で、口縁部に最大径を持つ。72は底部を欠くだけで3/4程度の残存状況である。胴部が若干張りを見せるが



第33図 立山遺跡SA3遺構実測図

口縁部径が約6cmを測る内外面ともナデ調整が施されている。

73は口縁部から胴部にかけて1/4程度が残存する。あまりくびれを見せない頸部に、布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が施してある。口縁部径は約27cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。

SA8

遺構（第36図）

南区南側遺構密集地の北側のW-16グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN22°Wに持つ。SA7が北に接する。長軸430cm、短軸380cmの長方形プランを呈する。検出面から床面までの深さは約30cmを測る。主柱穴は全体的に西側に偏った形で深さ40cm前後の柱が3本検出された。南角の柱は不明である。柱間は約220cm～270cmを測る。西側床面に長軸100cm～200cmの浅い落ち込みが2箇所検出されたが、詳細は不明である。

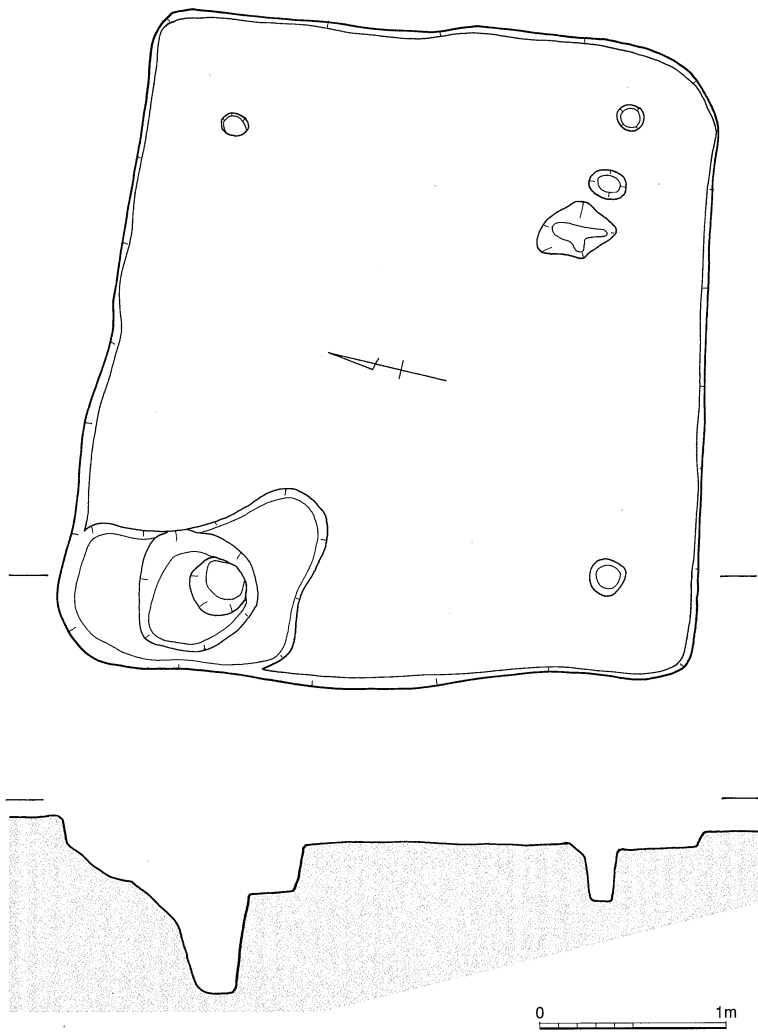
遺物

SA8では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

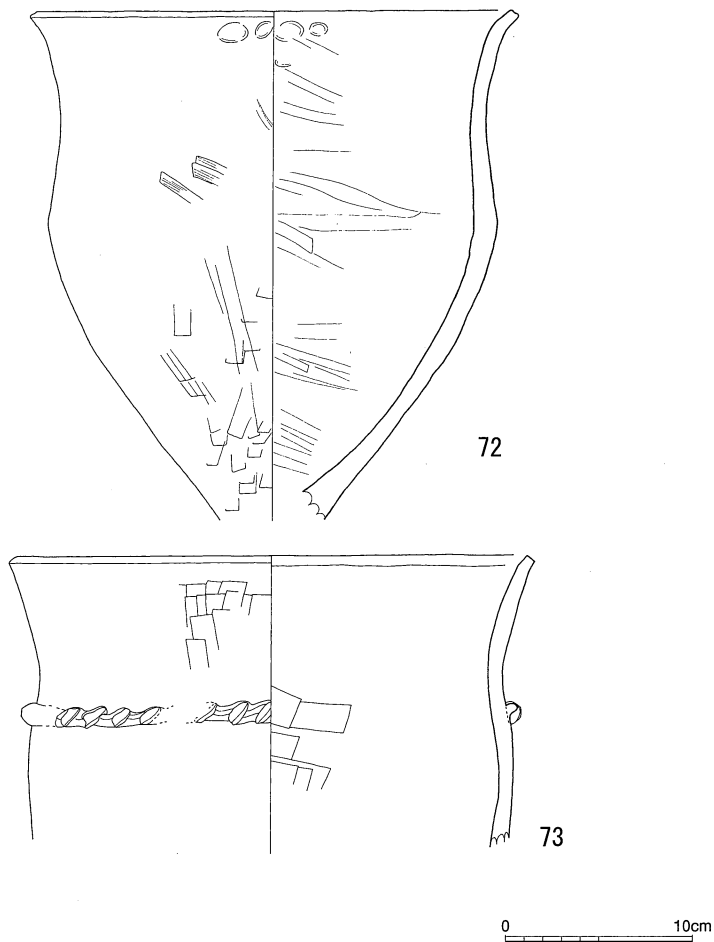
SA9

遺構（第37図）

南区南側遺構密集地の北東側、X-16グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN30°Wに持つ。長軸360cm、短軸330cmの長方形プランを呈する。検出面から床面までの深さ



第34図 立山遺跡SA7遺構実測図



第35図 立山遺跡S A 7 出土遺物実測図

は約15cmと浅い。支柱穴は深さ25cm前後の柱が4本検出された。南角の柱は不明である。柱間は約160cm～250cmを測る。床面中央からやや東側に40cm×50cm、深さ20cm程の楕円形の落ち込みが検出された。

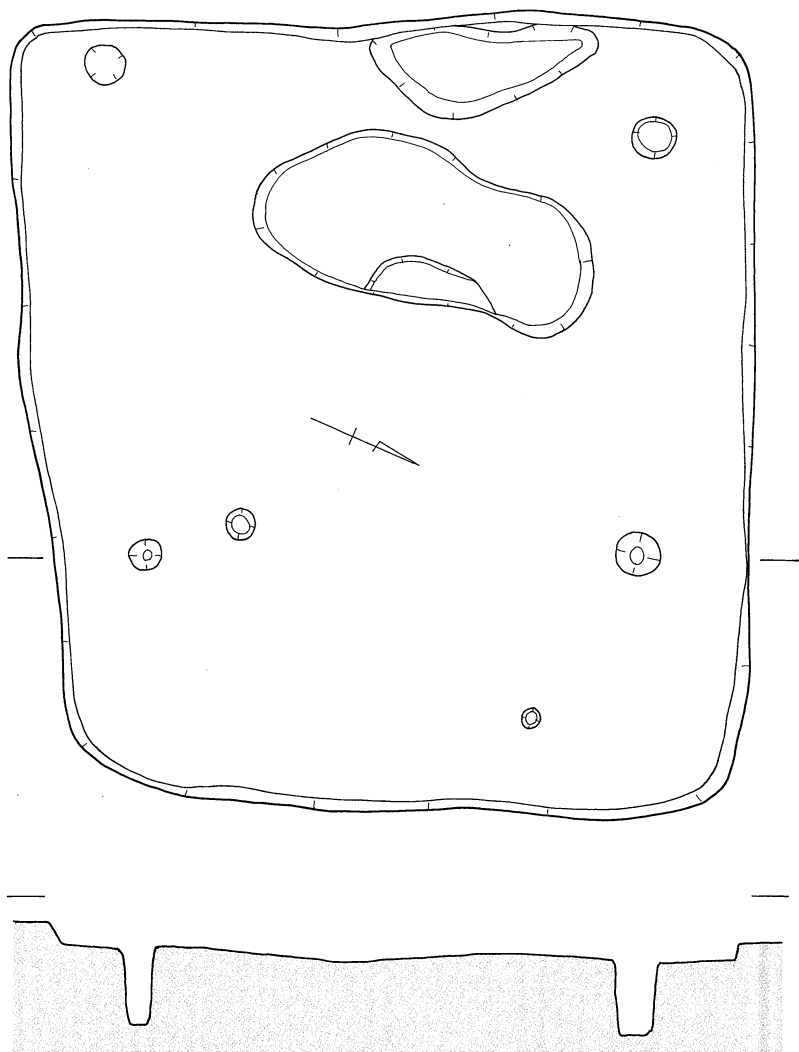
遺物

S A 9での遺物の出土量は多くはなかった。図下したのは壺・甕・碗の3点である。

土器（第38図）

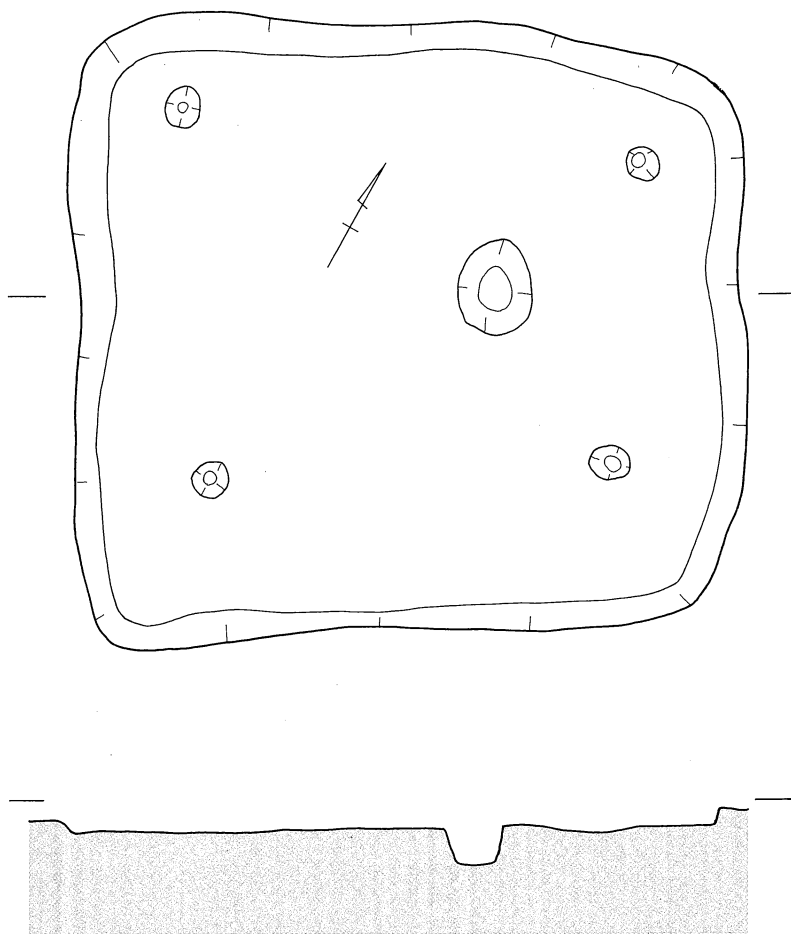
76は頸部から胴部上部にかけて1/4程度が残る壺である。胴部最大径が50cmを越すと思われる肩の張った球形の胴部に、推定径約14cmの頸部が付く大型の壺である。頸部に刻目突帯は見られない。内外面ともナデ調整である。

74は頸部に刻み目突帯を1条施した甕である。底部から口縁部に向かって内湾気味に一気に広がり、頸部付近で口縁部にかけて外反する。口縁部径が最大径で29cm前後あり、



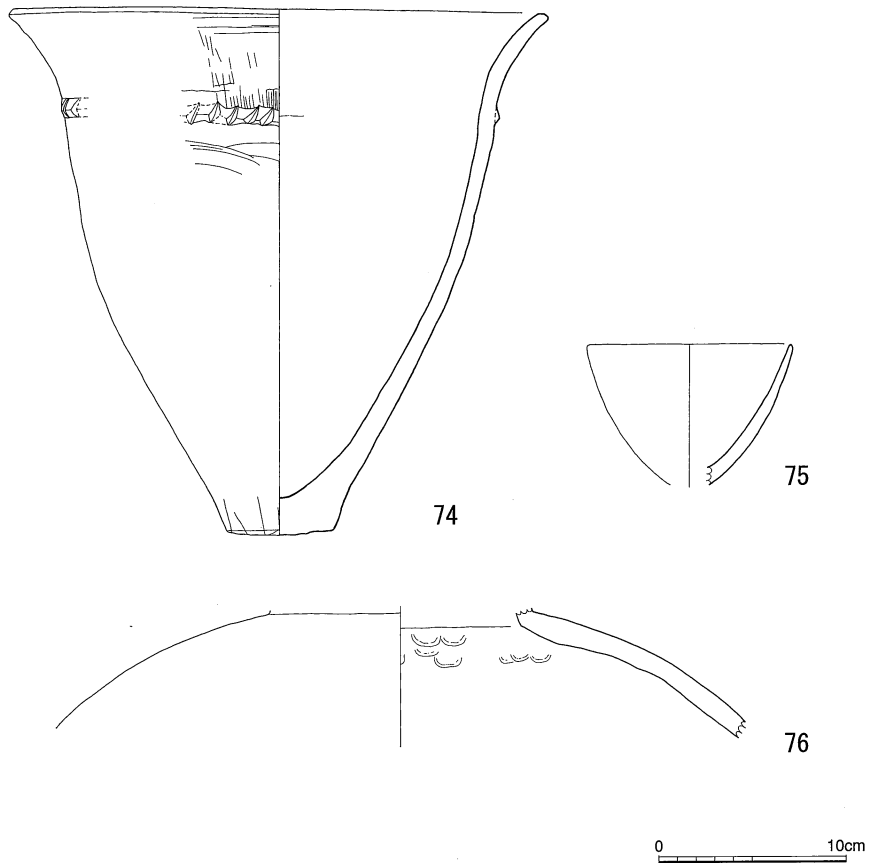
0 1m

第36図 立山遺跡SA8遺構実測図



0 1m

第37図 立山遺跡SA9遺構実測図



第38図 立山遺跡SA9出土遺物実測図

器高は約28cmを測る。内外面ともナデ調整が見られる。

75は口縁部から底部付近までの1/7程度残る小型の碗である。尖底気味の底部から一気に口縁部に広がる器形を呈する。推定口縁部径11cm、推定器高8cm前後と思われる。内外面ともナデ調整が見られる。

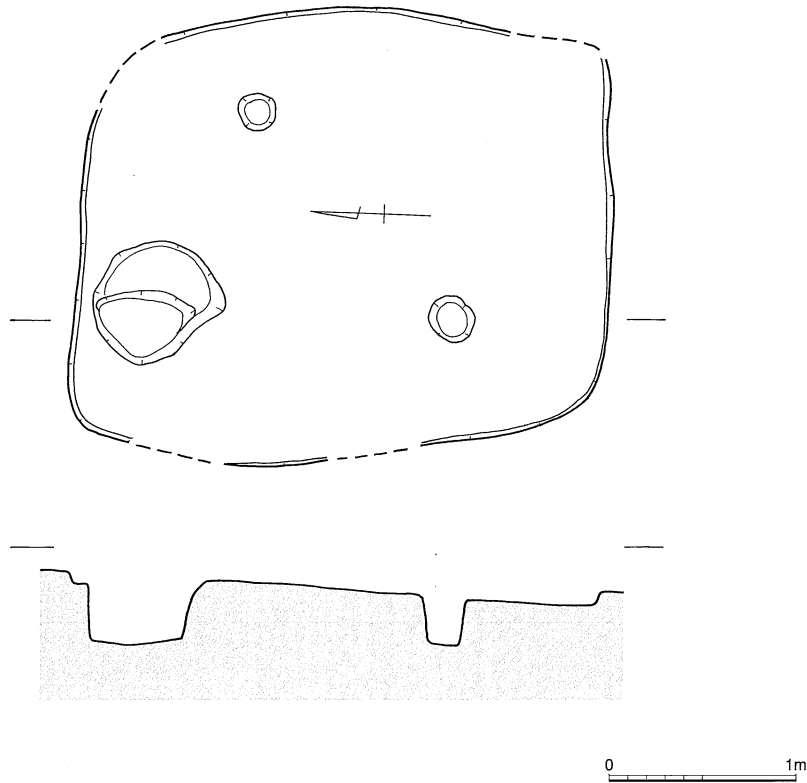
石器（第56図）

6は磨石である。12cm×8cm、厚み4cmの角礫で片面のみに使用の痕跡が見られる。

SA10

遺構（第39図）

南区南側遺構密集地の北側のW-17~18グリッドに跨って検出された竪穴住居。主軸をN3°Wに持つ。北にはSA14が隣接する。長軸290cm、短軸240cmの小型の長方形



第39図 立山遺跡SA10遺構実測図

プランを呈する。検出面から床面までの深さが5cm～10cmとかなり薄く、壁面を検出できなかった部分もある。主柱穴は対角線上で深さ20cm前後の柱が2本検出された。柱間は約150cmである。北側の壁際に径60cm、深さ30cmほどの掘り込みが検出された。北西にはSA14が隣接している。

遺物

SA10からは少量の土師器片が出土しているが、時期を明確にできる遺物は確認できなかった。そのうち台石を1点掲載した。

石器（第56図）

7は20cm×17cm、厚み6.8cm。台石で、部分的に砥石として使用した痕跡も見られる。

SA11

遺構（第40図）

南区南側の遺構密集地の北側のX-18グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN25°Wに持つ。SA13と接する。長軸460cm、短軸430cmの方形プランを呈する。検出面から床面までの深さが約10cmと浅い。北東角や南東角では壁面が検出されなかった。主柱

穴は深さ20cm～30cm前後の柱が4本四隅で検出された。柱間は300cm～330cmを測る。又、中央部北東寄りに90cm×60cm・深さ約20cmの炭化物を多く含む掘り込みが検出された。なお、住居跡中央部のやや中寄りに2本のピットが検出されているが、これを柱穴とすれば6本柱の可能性もあり、1本が炭化物を多く含む掘り込み内にある事から、6本柱→4本柱の変遷も考えられる。住居内の埋土には一様に炭化物を含むが、御池ボラは稀薄である。

遺物

SA11では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA13

遺構 (第41図)

南区南側にある遺構密集地の北側、X-18グリッドで検出された堅穴住居。主軸をN5°Eに持つ。SA11と接する。長軸420cm、短軸380cmの方形プランを呈する。検出面から床面までの深さが約10cmと浅い。柱穴は径20cm～40cm、深さ30cm前後のものが南側壁際と北東角に3本検出された。柱間は250cm～270cmを測る。又、中央部南西寄りに径約60cm、深さ約20cmの炭化物を含む掘り込みが検出された。

遺物

SA13では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA14

遺構 (第42図)

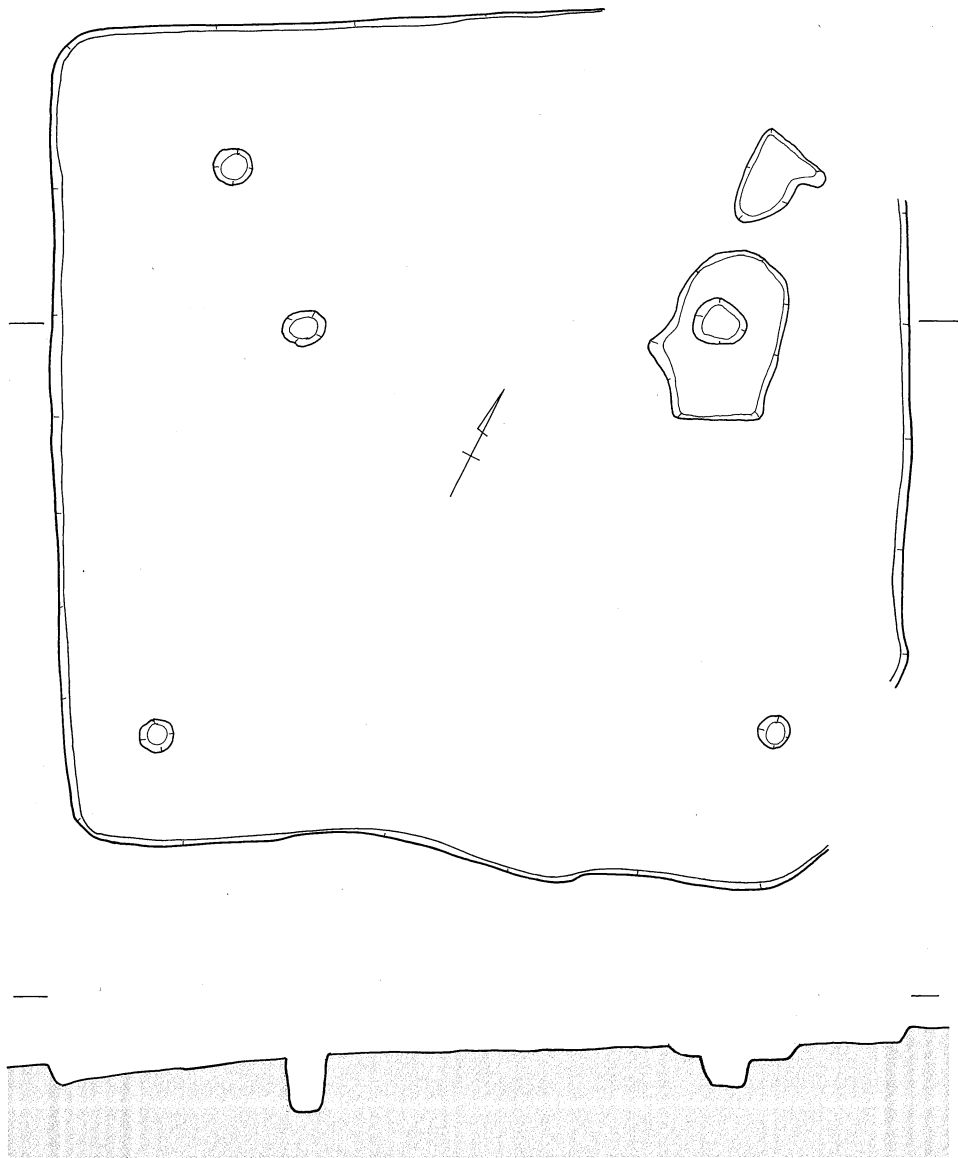
南区南側の遺構密集地の北側のV～W-17グリッドで検出された堅穴住居。主軸をN4°Wに持つ。南にSA10、西にSA6が隣接する。長軸420cm～360cm、短軸400cmの台形プランを呈している。検出面から床面までの深さが5cm～10cmと浅い。柱穴は径20cm、深さ20cm前後のものが中央部に2本、北東角を除く3箇所に3本の柱が検出された。2本柱、4本柱、6本柱の可能性がある。柱間は長間隔のもので200cm～270cm、短間隔のもので120cm～150cmを測る。東側壁際の中央に50cm×80cmの不定形の浅い掘り込みが検出された他、西側壁際には径100cmを越す深さ5cm程度の円形から楕円形を呈する掘り込みが2箇所に見られる。

遺物

SA14からは僅かに出土したのみであった。図化したのは甕とミニチュア土器の2点である。

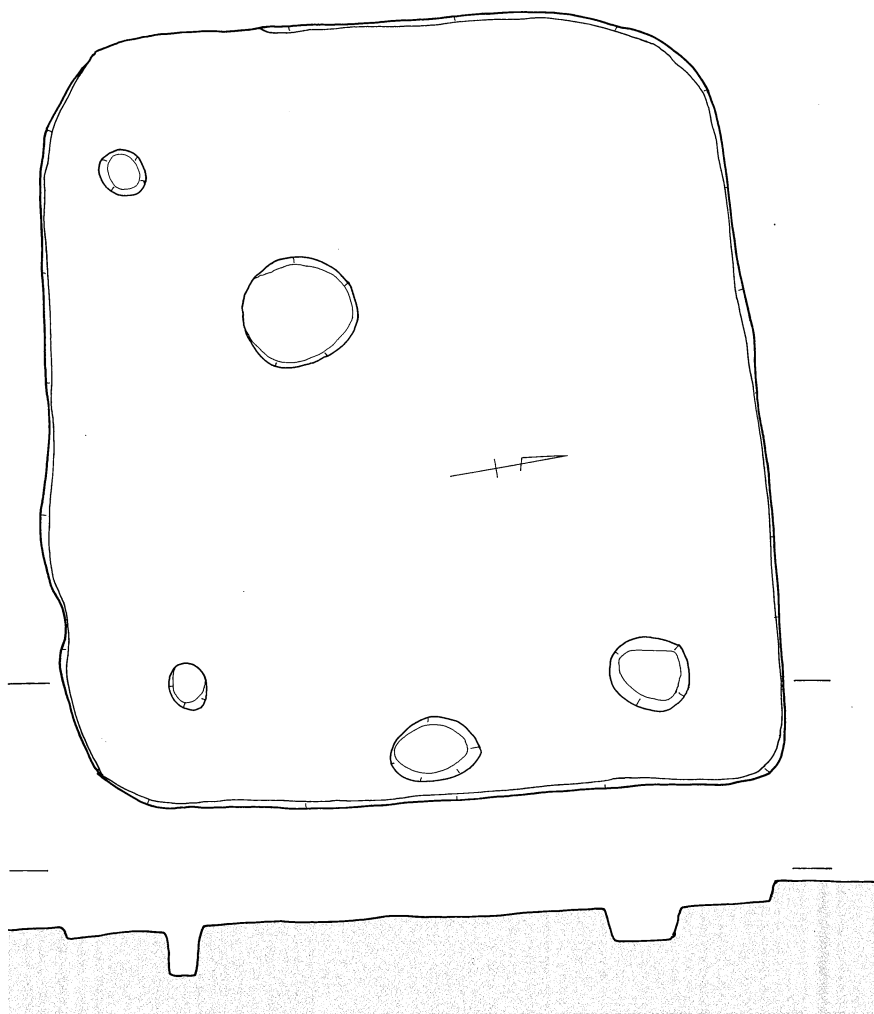
土器 (第44図)

77は底部から口縁部に向かって一気に開く器形を呈しており、頸部は見られない。口縁部端から8cm程下の部分に布目痕の残る刻目付きの貼付突帯が1条巡る。底部から口縁部までの1/2程度が残存しており、推定口縁部径が約32cm、器高が約33.5cm、底径



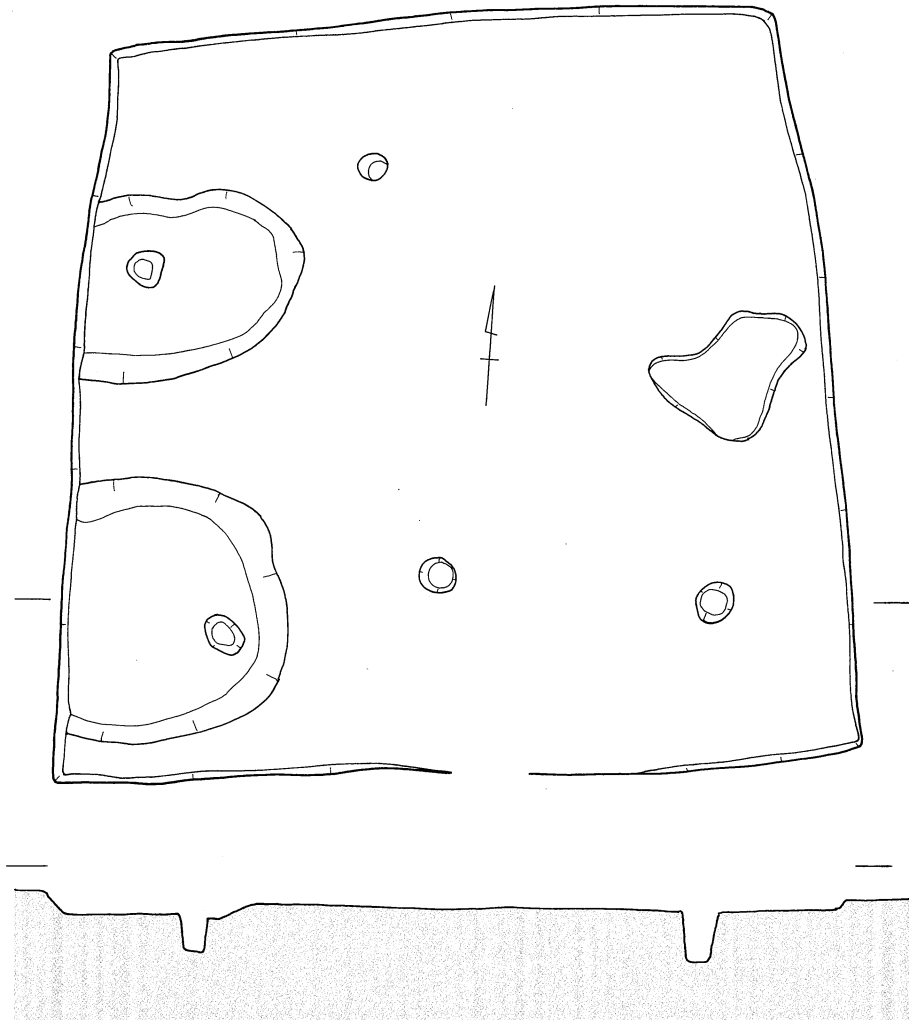
0 1m

第40図 立山遺跡SA 11 遺構実測図

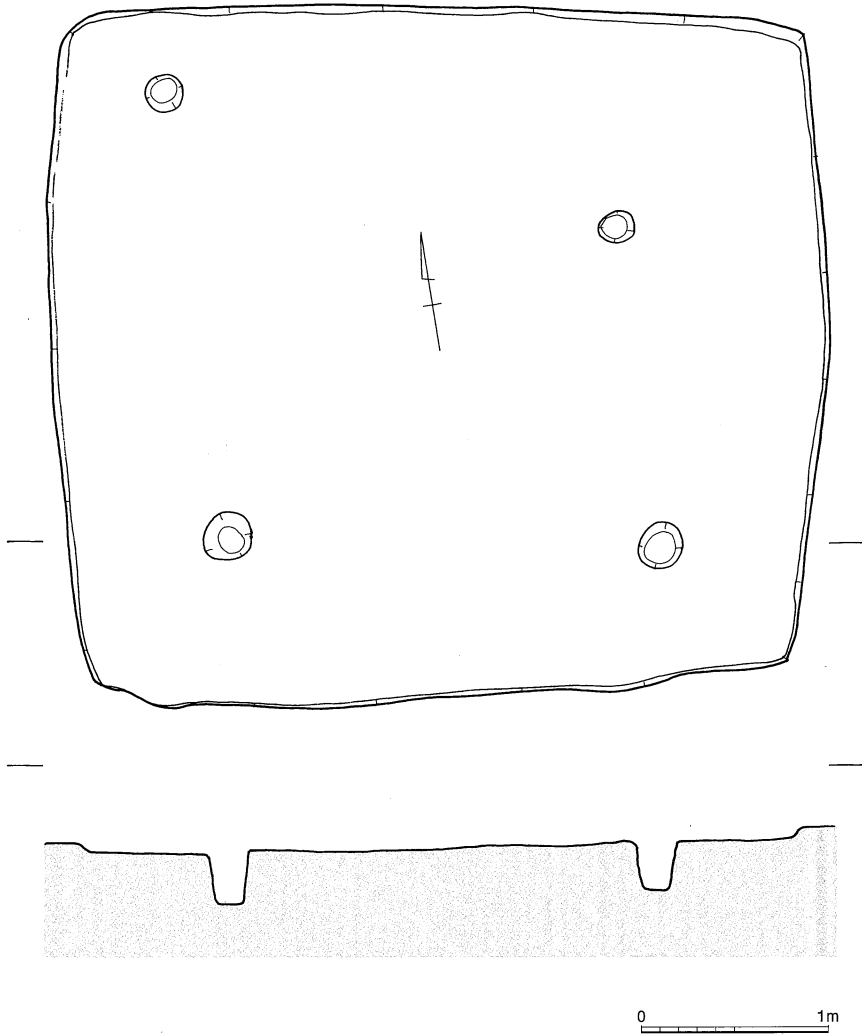


0 1m

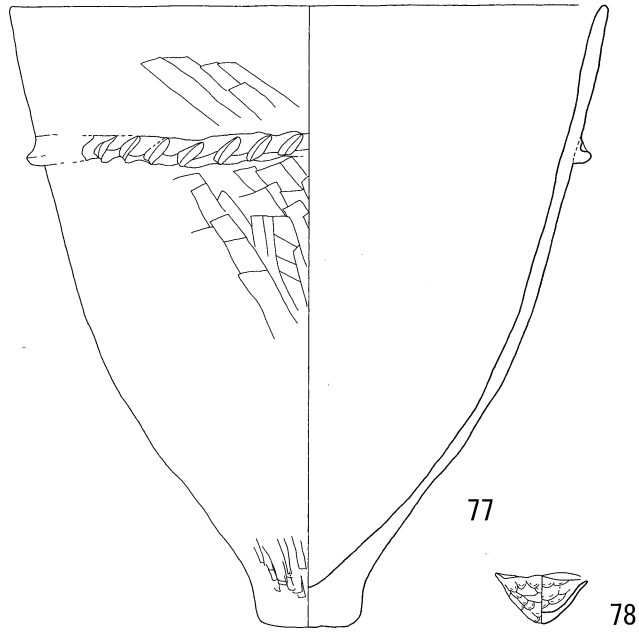
第41図 立山遺跡S A 1 3遺構実測図



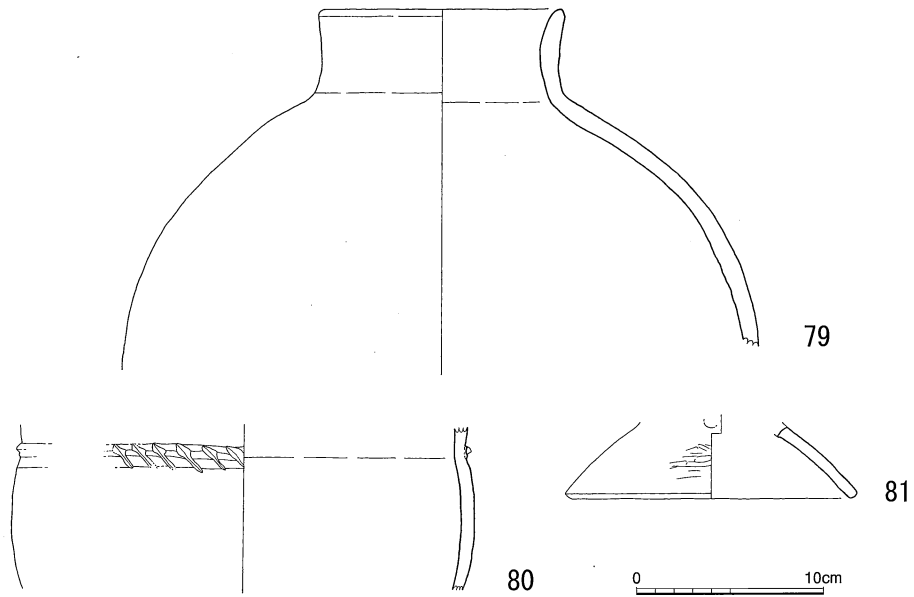
第42図 立山遺跡SA 14 遺構実測図



第43図 立山遺跡SA15遺構実測図



第44图 立山遺跡SA14出土遺物実測図



第45图 立山遺跡SA15出土遺物実測図

が約5cmを測る。内面はナデ調整、外面はナデ調整と口縁部付近でハケ目調整が見られる。78は手捏ねのミニチュア土器で内外面とも指押さえによる成形がなされている。口径約5cm、器高約2.5cmを測る。

SA15

遺構 (第43図)

南区南側遺構密集地の北東側、W-18グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN7°Eに持つ。北東側にはSA9、南にSA11・SA13が隣接する。長軸420cm、短軸380cmの方形プランを呈する。検出面から床面までの深さが約10cmと浅い。柱穴は住居の四隅にそれぞれ1本ずつと北東寄りに1本の計5本が検出された。いずれも径20cm~30cm、深さ30cm前後のもので、支柱は四隅の4本と思われる。柱間は180cm~290cmを測る。

遺物

SA15では少量の遺物の出土が見られた。図化したのは壺、甕、高坏の3点である。

土器 (第45図)

79は球形状の胴部を持つ壺で底部を欠く。球形状の胴部から肩は張らずに口縁部がほぼ垂直に4cm程立ち上がる。外面はナデ調整が見られるが、内面は風化が著しく不明である。胴部最大径は約33.8cm、口縁部径約12.5cmを測る。

80は布目痕の残る刻目付きの貼付突帯を持つ甕である。突帯付近の胴部のみが1/7程度残存する。やや胴部が張り、若干くびれる頸部に突帯が巡る。推定の突帯部径が約24cmである。内外面ともナデ調整である。

81は高坏の脚裾部にあたる。裾部径が約16cmで椀を伏せた器形を呈し、透かしがある。内面はナデ、外面はヘラミガキが施されている。

SA16

遺構 (第46図)

南区南側の遺構密集地の中央のX-17グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN12°Wに持つ。東側にはSA11が隣接する。長軸440cm、短軸420cmの方形プランを呈している。検出面から床面までの深さが5cm~10cmと浅い。柱穴は住居跡内で径20cm、深さ20cm前後のものが9本検出されたが、支柱は若干南西側に偏るが四隅近くにある4本と思われる。柱間は220cm~260cmを測る。床面に灰の密度が高い。

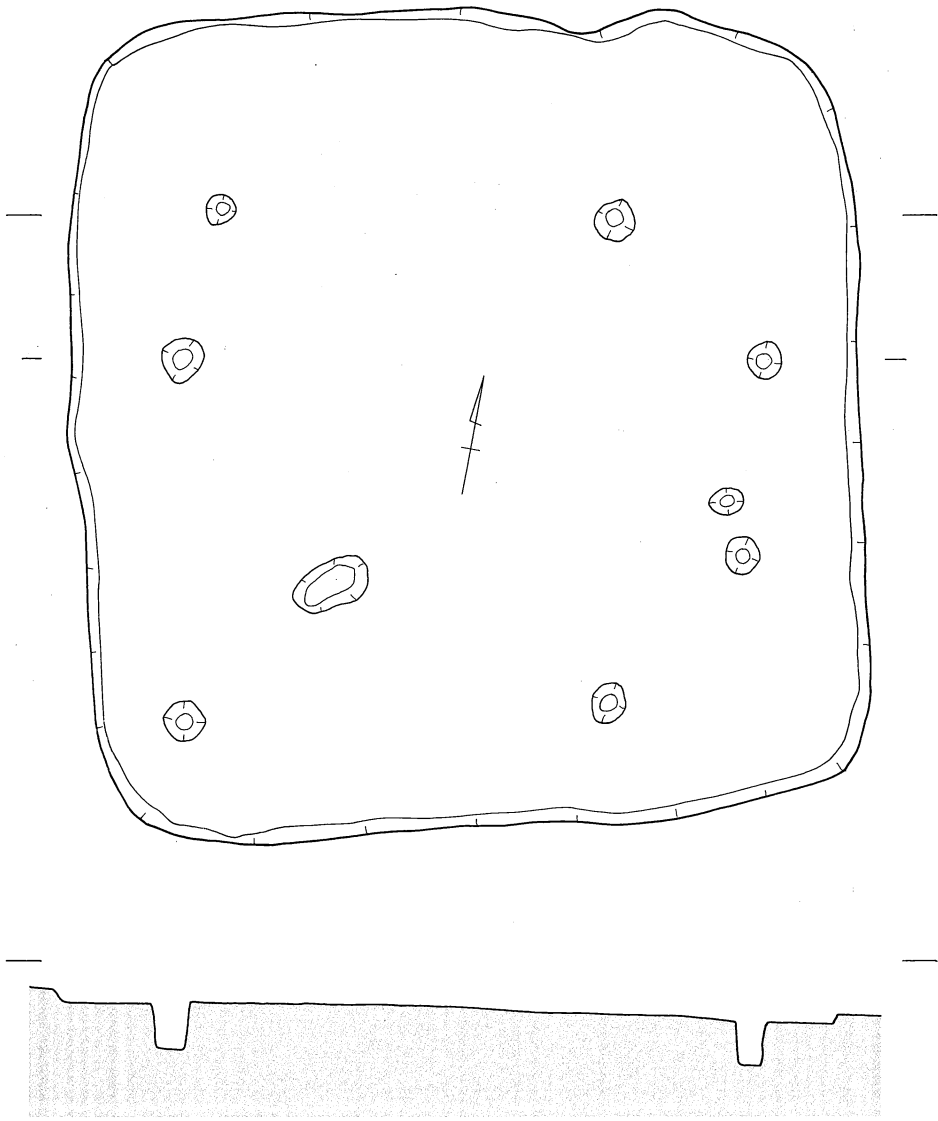
遺物

SA16では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

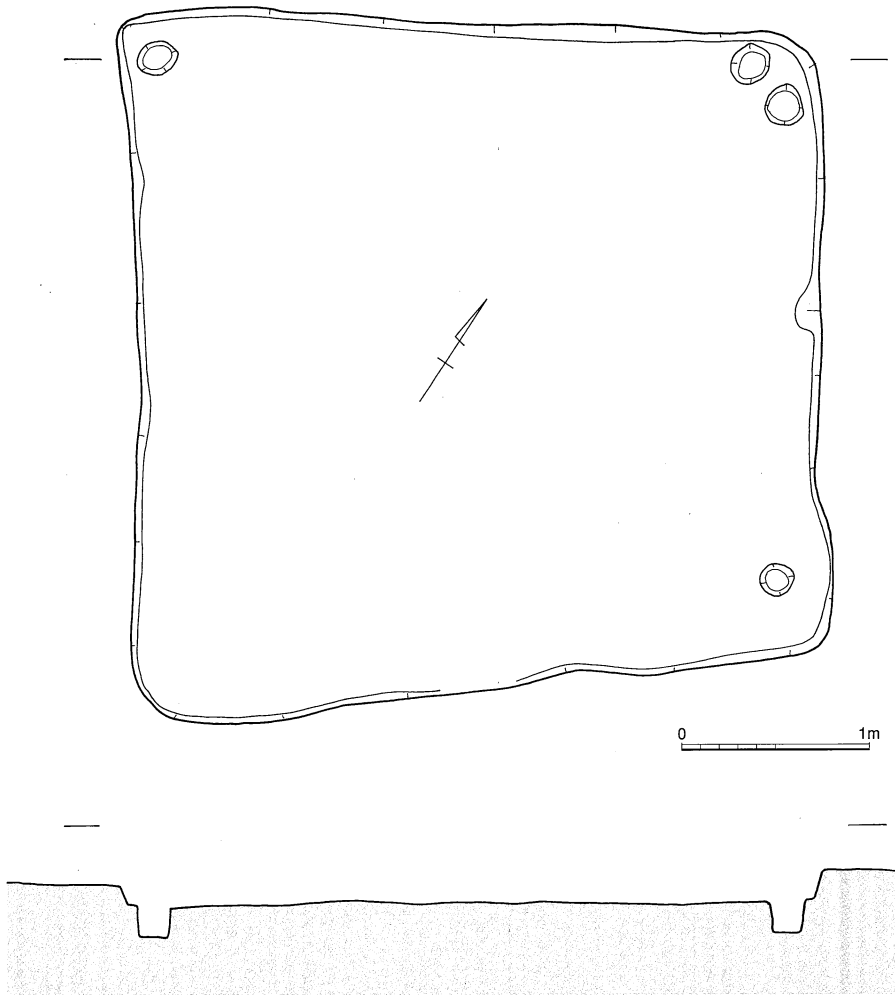
SA19

遺構 (第47図)

南区南側遺構密集地の南側のX~Y-15~16グリッドに跨る形で検出された竪穴住居。主軸をN33°Wに持つ。北にSA5とSA29、南にSA20に近い。長軸370cm、短軸



第46図 立山遺跡SA 16遺構実測図



第47図 立山遺跡S A 1 9 遺構実測図

330cm～380cmの台形プランを呈している。検出面から床面までの深さは約15cmと浅い。柱穴は径20cm、深さ15cm前後のものが南隅を除く3隅でかなり壁近くから検出されている。又、南西側の壁際には幅210cm～280cm、長さ約330cm、深さ10cm程度の掘り込みが確認されている。

遺物

SA19では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA20

遺構（第48図）

南区南側遺構密集地の南端のY-15グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN15°Wに持つ。西のSA21と東のSA30に挟まれる。南側が削平を受けているが、長軸約600cm、短軸約470cmの長方形プランを呈している。検出面から床面までの深さは5cm～15cmと浅い。柱穴は北西角、北東角、南東角の3箇所と中央部やや内側で2本の柱穴が検出された。南西角を削平で欠くが支柱は6本柱と思われる。柱穴は径20cm、深さ20cm前後のものである。

遺物

SA20では輪郭が不明瞭な南壁周辺で少量の土師器小片が出土しているが住居跡に伴うかは不明である。

SA21

遺構（第49図）

南区南側遺構密集地の南端のY-14～15グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN10°Wに持つ。東にSA20が近接する。西壁から南壁にかけて約1/2が削平を受けている。長軸（北壁）が約480cm、短軸（東壁）が約300cm残存しており、大型の長方形プランを呈すると思われる。検出面から床面までの深さは10cm前後と浅い。柱穴は北東角と南東角、東壁際中央の3箇所に柱穴が検出された。北東角と南西角を削平で欠くが、支柱は4本柱と思われる。柱穴は径15cm、深さ20cm前後のものである。

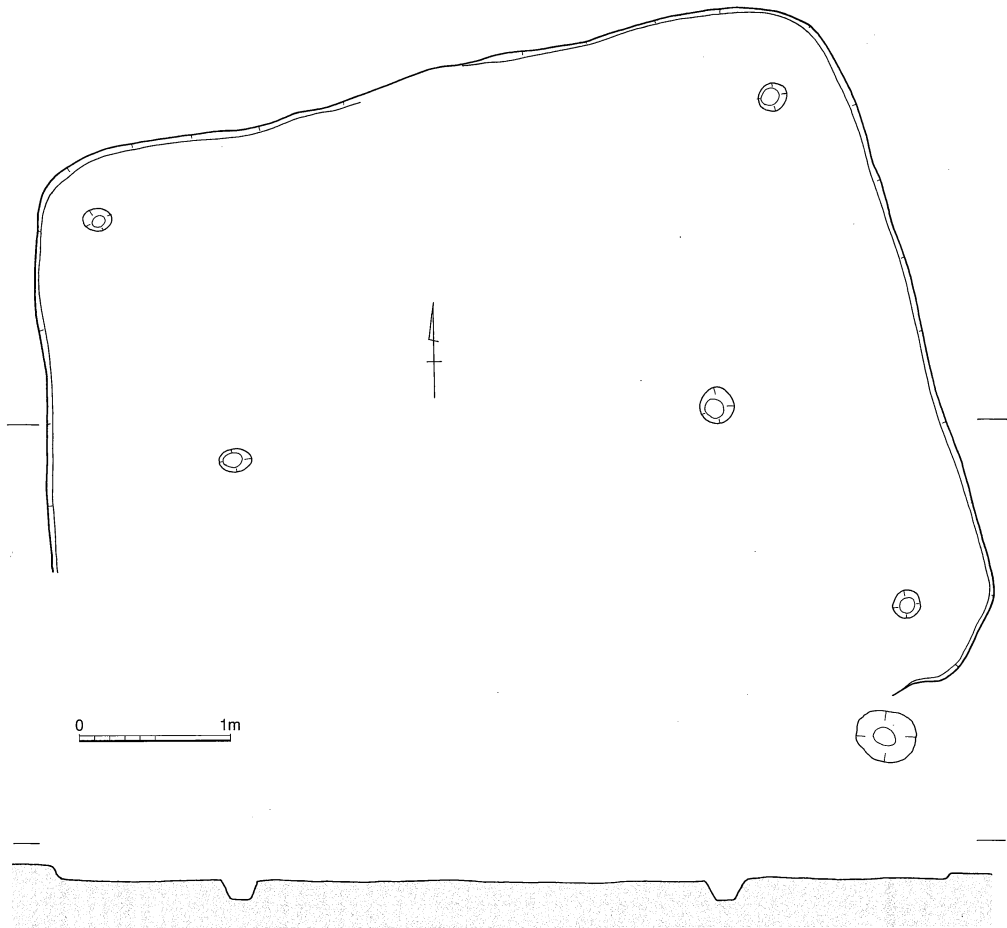
遺物

SA21では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

SA27

遺構（第50図）

南区中央の東端のT～U-20グリッドで単独で検出された。主軸をN15°Wに持つ。南側遺構密集地より北東に10mほど離れている。1辺が約250cmの丸みを帯びた方形気味のプランに、南東側に100cm程突出したような不定形を呈する。検出面から床面までの深さは10cm前後と浅く柱穴も検出されていない事から竪穴住居とは判定し難いが、かなり



第48図 立山遺跡 S A 2 O 遺構実測図

の土器が出土している事から住居として扱った。

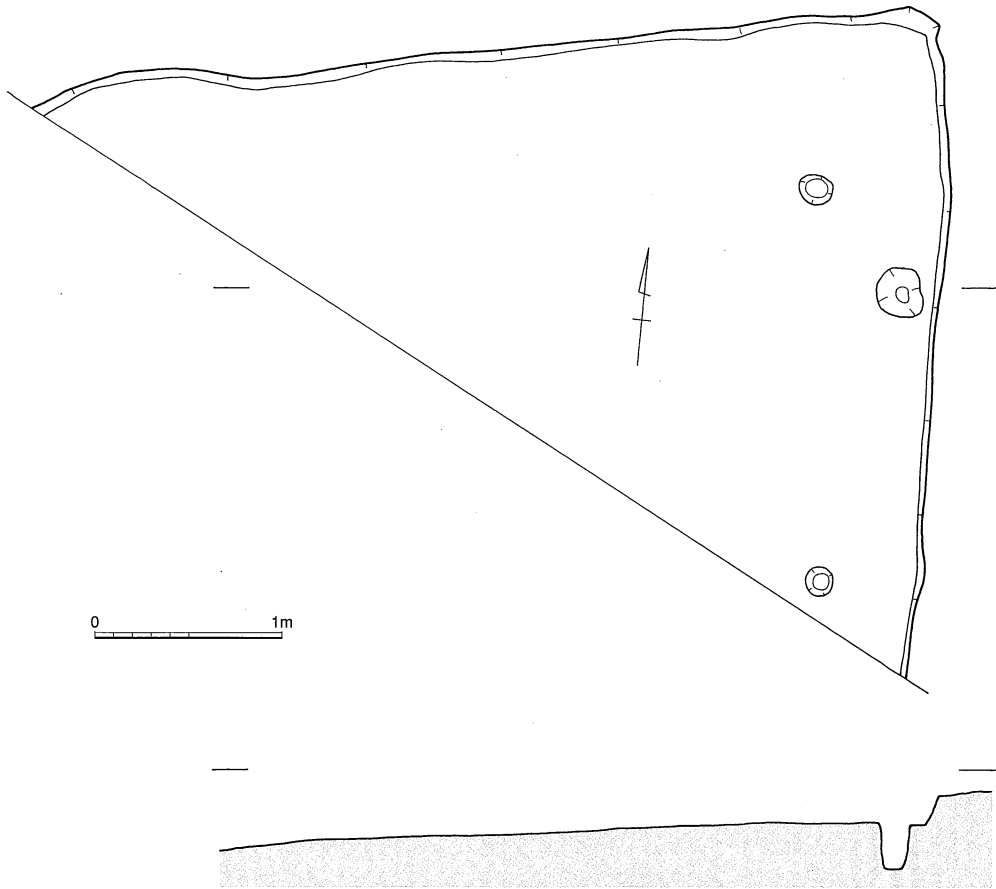
遺物

S A 2 7 では住居全体から多くの遺物が出土している。

土器 (第51図・第52図)

82は長胴の壺である。やや丸みを持つ平底の底部に卵倒形の長胴が付き、肩はあまり張らず、頸部から3.5cm程の口縁が外湾気味に開く。最大径は胴部中央に持つ。胴部付近での接合が困難で口縁部から胴部、胴部から底部の二部位に分けて図化した。1/2程度の残存状況で推定底径約4.8cm、推定胴部最大径約21cm、推定頸部径約9.5cm、推定口径約11cmを測る。剥離が著しく胴部外面でハケ目調整、その他の外面でナデ調整が確認できた。又、胴部内面下位でスス付着が見られる。

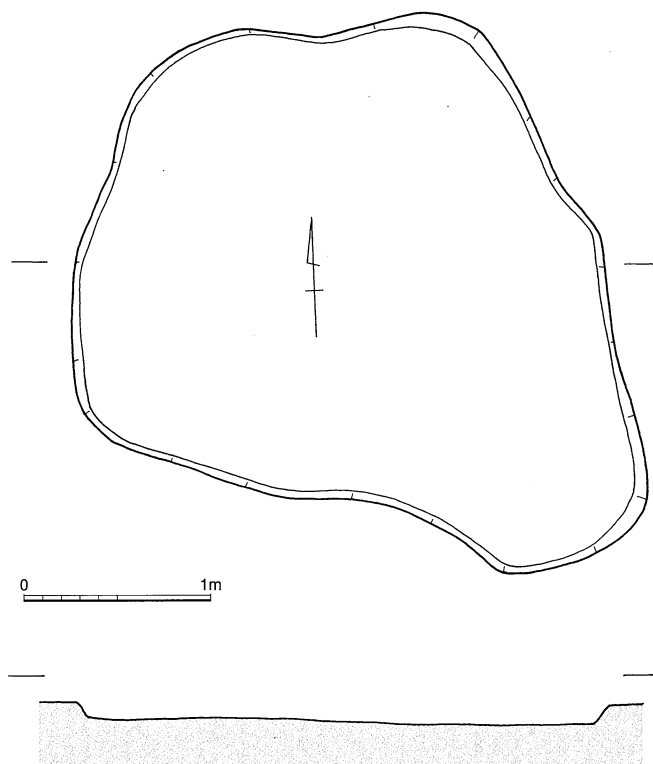
83、84、85、86、87、88は頸部に刻目付きの貼付突帯を持つ甕である。83は頸部でややくびれを見せ、口縁部へと外傾する。口縁部に最大径を持ち推定口径30cm弱である。



第49図 立山遺跡SA 21 遺構実測図

内外面ともナデ調整で刻目には板目痕が見られる。84は胴部上部に丸みを持つが、頸部のくびれは殆ど見られない。口縁部はおよそ8cmと比較的長く外反する。口縁部に最大径を持ち推定口径30cm弱である。刻目には布目痕が見られる。内外面ともナデ調整で外面胴部にスス付着が見られる。85は胴の張りは見られず、突帯部から口縁部が大きく外反する。口縁部に最大径を持ち推定口径約26cmである。内外面ともナデ調整で外面胴部にハケ目調整が見られる。刻目には布目痕が残る。86は張りのない胴部片である。刻目は左上から右下に向かって施されており、刻目には布目痕が見られる。胴部の最大径が推定で21.5cmである。内外面ともナデ調整である。87・88は同一個体で底部から口縁部までが縦に1/2の状態出土している。口縁部径に最大径を持つ。平底の底部から胴部にかけて膨らみながら立ち上がる。胴部最大径を胴部上位の頸部近くに持ち、頸部で若干くびれを見せながら口縁部が大きく外反する。口縁部径約29cm、胴部最大径約26cmを測る。調整は内外面ともハケ目調整が見られる。

89は高坏の坏部と思われる。推定口径約20cm、深さ7.5cm程度の椀状を呈する。底部を欠くが破損部に脚部につながる屈曲部がわずかに確認できる。内外面ともナデ調整が見られる。



第50図 立山遺跡SA 27 遺構実測図

SA 29

遺構（第53図）

南区南側遺構密集地の中央のX-16グリッド検出された竪穴住居。主軸をN12° Eに持つ。南西側にSA 5とSA 19が隣接する。東西軸が北寄りで約360cm、南寄りで約340cm、南北軸が西寄りで約370cm、東寄りで330cmと南西角が丸みを持つが、ほぼ方形プランを呈している。検出面から床面までの深さは10cm前後と浅い。柱穴はそれぞれ四隅に掘られている。柱穴は径約20cm、深さ約30cm前後のものである。

遺物

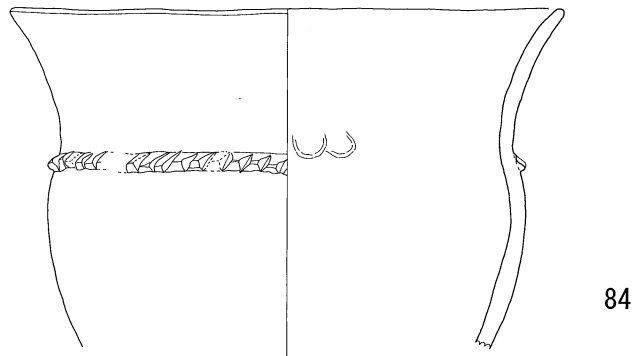
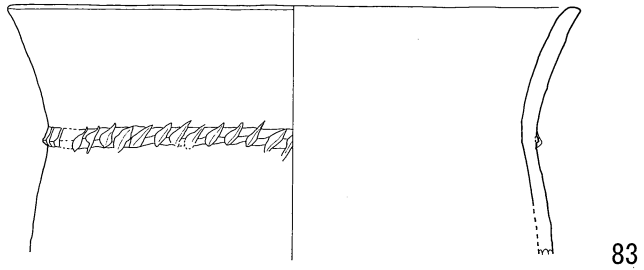
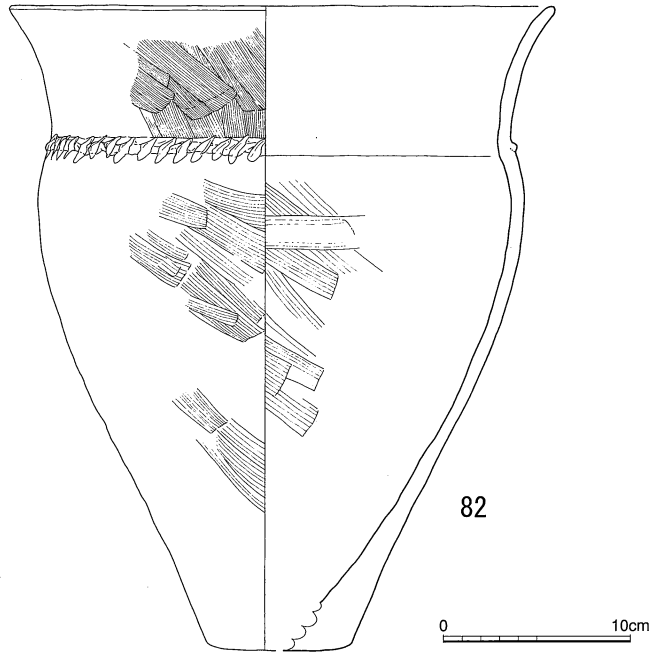
SA 29では明確な形での遺物の出土は確認できなかった。

【土坑】

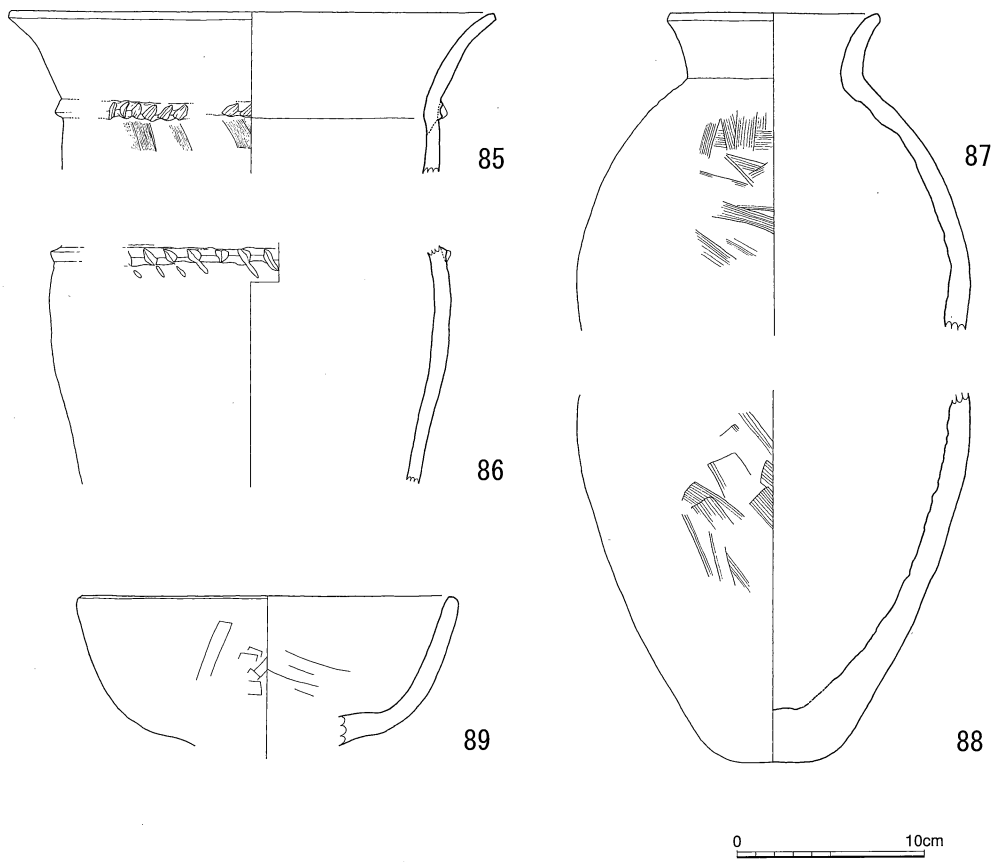
SC 3

遺構（第54図）

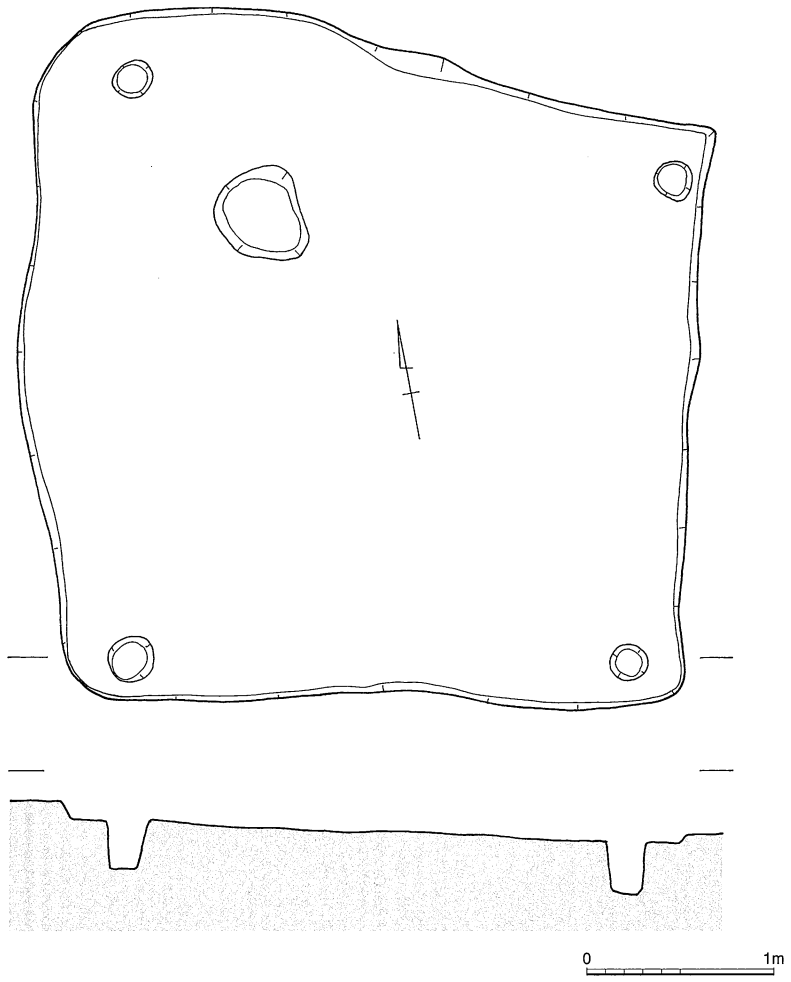
南区遺構密集地の中央北側のV-17グリッドで検出された土坑でSA 4に接する。規模は確認上面で約100cm×約80cmの方形プラン呈し、確認面から床面までの深さが約20cmと浅い。床面はほぼ平坦な土坑である。



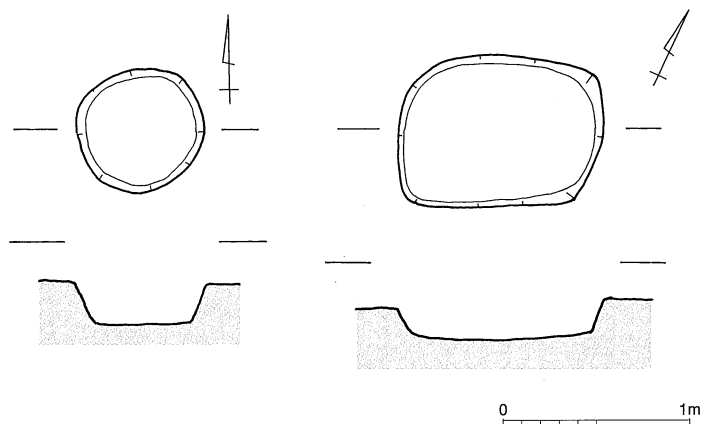
第51図 立山遺跡SA27出土遺物実測図(1)



第52図 立山遺跡SA27出土遺物実測図(2)



第53図 立山遺跡SA 29遺構実測図



第54図 立山遺跡SC3・SC5遺構実測図

遺物（第26図46）

遺物としては甕が出土している。46は口縁部から胴部上位までの甕である。およそ1/8が残存する。短く外反する口縁部から一気に底部へと繋がる「V」字状の器形を呈すると思われる。口縁部径が最大径にあたり、口径約23cmを測る。内外面ともナデ調整、外面の頸部下位から胴部にかけてスス付着が見られる。

SC5

遺構（第54図）

南区遺構密集地の中央北側のV-16グリッドで検出された土坑でSA7に隣接する。規模は確認上面で約70cm×約65cmの円形プラン呈し、確認面から床面までの深さが約25cmを測る。床面はほぼ平坦な土坑である。遺物の出土はなかった。

【遺構外出土の遺物】

土器（第55図）

南区では、古墳時代や古代の時期の竪穴住居や平地式住居、掘立柱建物等の遺構が20基を越している。遺物も竪穴住居を中心に遺構から出土しているが、遺構以外からの出土も多い。出土数としては古代の遺物が多量に出土しているが、古墳時代の遺物も見られる。遺物の分布は、遺構分布の集中する南区の南側に多く見られる。遺物は遺構出土の遺物と同様に甕・壺・高坏等である。

壺 (90・91・92・93)

90・91はX-14、92はV-16、93はV-20グリッドから出土した。

90・91は同一個体で、くびれた頸部から逆「八」の字状に大きく開き、口唇部付近で短く外反する。推定口径は約21.5cmで、頸部から垂直距離で7cm程の口縁部になる。胴部は頸部から肩部までの破片であるが、肩部はかなり張っている。おそらく胴部最大径で50cmを越える大型の球形の胴部を持つ壺になると思われる。口縁部、肩部とも内外面にハケ目調整が見られる。

92は壺の口縁部片である。口縁部は直立気味に立ち上がりながら、口縁部中位から緩やかに外反する口縁で、90と比べると口縁部の外反度も緩く、肩部の張り具合もなで肩気味である。推定口縁部径は約14cmで内外面ともナデ調整である。

93は二重口縁壺の口縁部片である。二重口縁部のみが残存しており、頸部の立ち上がりは不明である。二重口縁部は垂直に短く立ち上がり、口唇部は肥厚になる。外面には波状の櫛描き文を描き、上下に1条ずつの横方向の櫛描き文を施している。

甕 (94・95・96)

94はW-15、95はW-17、96はW-16グリッドから出土した。

94は頸部に刻目付きの貼付突帯を持つ甕である。頸部のくびれも少なく、胴部の張りもない。口縁部は頸部から緩やかに開く。最大径は口縁部に持ち、口縁部径は約29.5cmを測る。95は頸部に刻目付きの貼付突帯を持つ甕である。胴部の張りも頸部のくびれもなく、口縁は突帯部から大きく外反する。口縁部径は約26cmである。

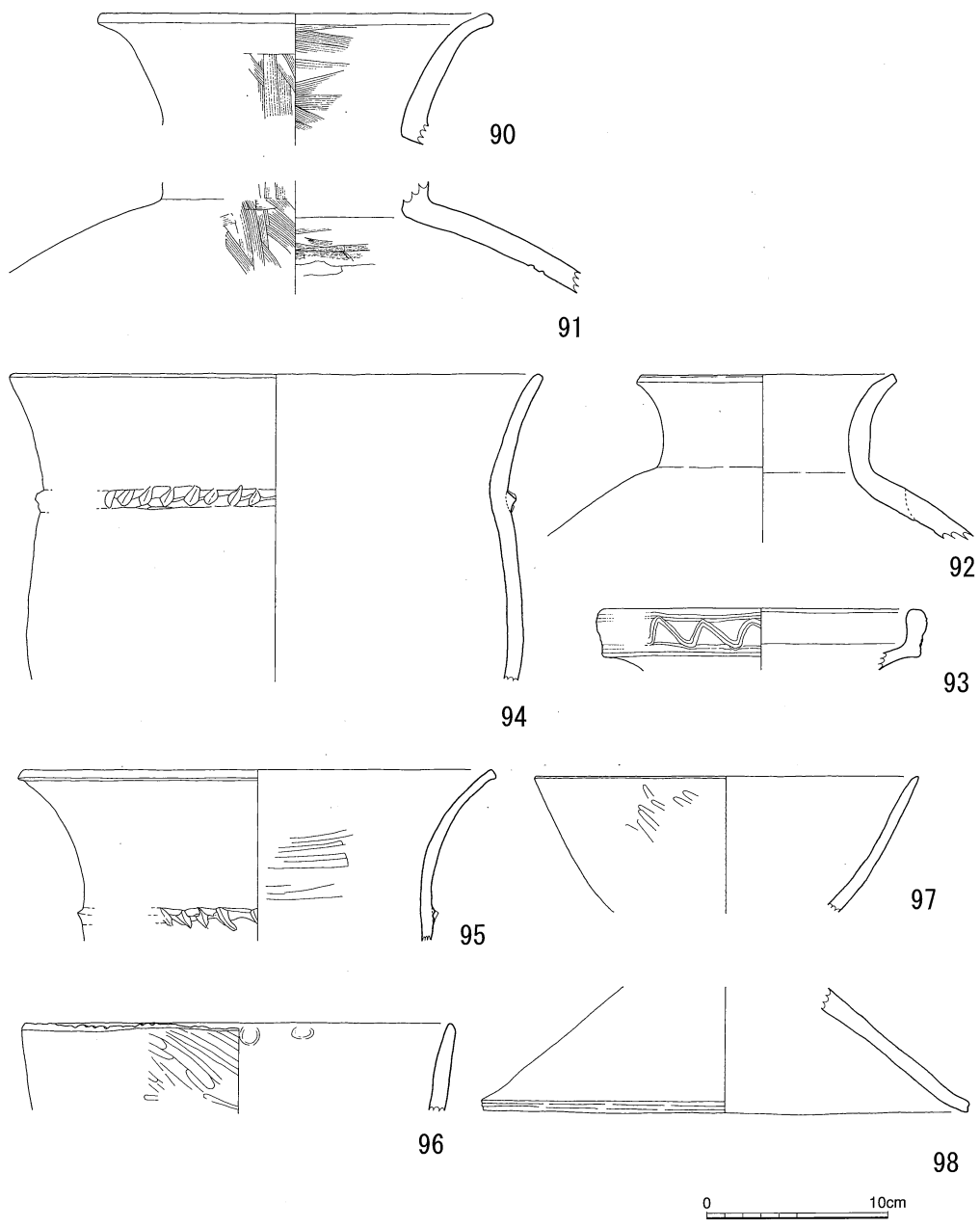
96は口唇部端部に4～5mm間隔で浅い刻みを施す甕の口縁部である。口縁部径約23.5cmを測る。おそらく胴部上位に刻目付きの貼付突帯を持ち、底部から口縁部へ一気に広がるタイプの甕と思われる。

高坏 (97・98)

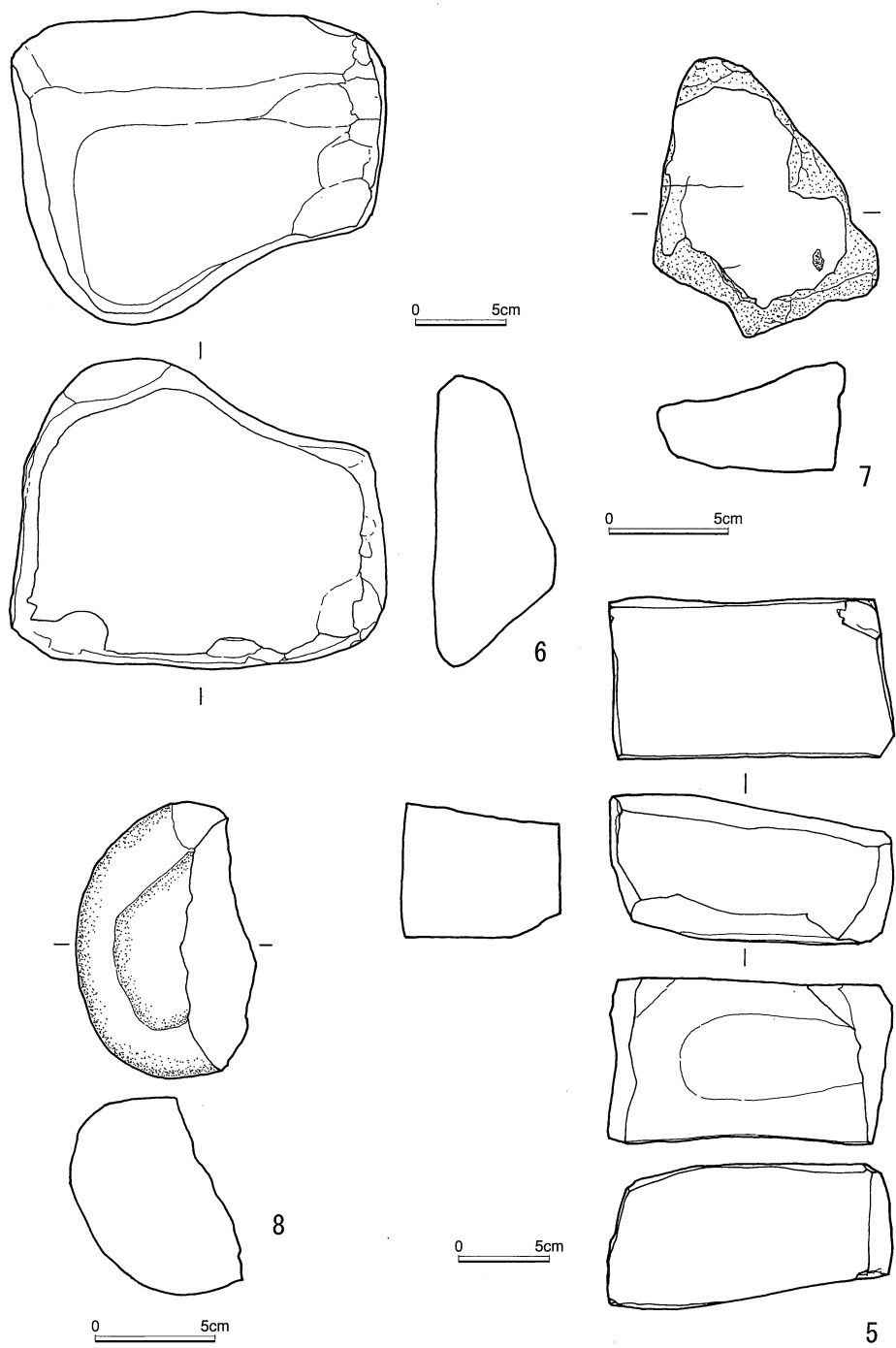
97はX-17、98はW-17からの出土である。97は高坏の坏部と思われる。坏部下位に稜を持つタイプの坏で、稜部から内湾気味に口縁部が広がる。推定口縁部径は約21cmを測る。内外面ともミガキによる調整が施されている。内外面の色調はともに赤褐 (Hue2.5YR4/6) を呈しており朱が全面に施されている。98は脚部片である。坏部接合点から「八」の字に一気に裾部端部まで大きく開く。裾部端部はナデで丁寧に調整されている。裾部径は推定約27cmを測る。

石器 (第56図)

南区からは砥石や磨石が数点出土している。このうち7は、W-17グリッドから出土した磨石で、1/2を欠くが15cm×10cmの拳大の磨石である。



第55图 立山遺跡南区出土遺物実測図



第56图 立山遺跡南区出土石器実測図

3. 東区の遺構と遺物

遺構

立山遺跡では全体的に遺構の埋土と自然の層との区別が付きにくい状況であった。東区から調査を開始したため、開始当初は土層の状況がつかめずに調査を進めていった。そのためか東区では遺物は調査区全域から出土するにも関わらず遺構の検出がなかなかできなかった。結果的には調査区の南西端にあたるM-23グリッド周辺で柱穴と思われるピットを数基検出したが、建物跡としては確認できなかった。

遺物

土器（第57図～第65図）

東区では遺構等の検出はできなかったが、調査区からは多くの遺物が出土した。古代の遺物は調査区の西側半分に集中するが、古墳時代の遺物は全域から出土している。遺物は壺、甕、椀、高坏など多彩である。石器も砥石や磨石等が出土している。

【土器】

壺（99～112）

103・110・111・112はいずれも壺の口縁部片である。103はJ-28グリッド出土の壺の単口縁である。肩部はあまり張らず、口縁は頸部から開き気味にやや外傾する。口縁部径が約14cmである。110はG-32グリッド、111はI-27グリッドから出土した二重口縁である。いずれも数条の櫛描き波状文が施されている。口縁部径はおよそ10.5cmと小型の壺である。110は稜部に丸みを持ち、二重口縁が短く内湾して立ち上がる。111は明瞭な稜部を持ち二重口縁部が短く内傾気味に立ち上がる。稜部断面に繋ぎ目が見られる。112はI-20グリッド出土の二重口縁壺である。頸部は比較的長く張りのない肩部から反り上がる。二重口縁は垂直に短く立ち上がる。口唇部が薄くなる。口縁部径はおよそ15cmを測る。

99・102はH-19グリッドから出土した。いずれも口縁部と底部を欠く。99は最大径を胴部中位に持つ球形胴部の大型の壺である。最大径はおよそ41cmを測る。外面上位にはミガキ調整が施されている。102は胴部中位よりやや上に最大径を持つ倒卵形胴部の壺である。底部に向かってやや絞り気味である。内外面ともハケ目調整のあとナデ調整が施されており、外面中位から下位にかけてススが付着する。また、丹塗りの痕跡も見られる。内面上位には粘土のつなぎ目が残る。

100はH-22グリッドから出土している。口縁部から胴部下位までが残存する。胴部は肩部があまり張らない球形状を呈する。口縁部は頸部から大きく外反する。最大径を胴部中位に持ち、およそ25cmを測る。胴部外面にはミガキ調整が施されている。

104・105・106はI-31グリッドからの出土した単口縁の壺である。口縁部（104）・肩部（105）・底部（106）を個々に図化した。接合の段階では1個体として復元できなかったが同一個体である。肩部はあまり張らず、底部は尖り気味の丸底を呈する倒卵形の壺である。口縁部は頸部から反り気味に開く。内外面ともナデ調整で底部付近の外面

にケズリ調整が見られる。口縁部径は約11cm、胴部最大径は推定で28.4cmである。

107はH-32グリッドから出土した壺の胴部片である。胴部上位に最大径を持ち、やや尖り気味の丸底と思われる底部を持つ球形状の小振りの壺である。胴部最大径は約19.5cmである。胴部中位より上の外面はミガキによる調整が施されている。

108はL-23グリッドから出土した底部を欠く壺である。肩部の張りがあまりない球形の胴部に、頸部のくびれ部に稜を持たずに口縁部に向かって大きく外反する。口唇部は稜を有し、端部をナデ調整で平らに仕上げている。口縁部径は約14cm、胴部最大径は約24cmを測る。

109はE-35グリッドから出土した、単口縁の完形品として出土した壺である。胴部最大径を胴部中位よりやや下位に持つ倒卵形の胴部に、若干の平坦部の見られる平底の底部が付く。肩部はなで肩を呈し、稜を有する頸部から立ち気味に開く口縁部は、口唇部付近でわずかに外反する。内外面ともナデ調整が施されている。口縁部径11.8cm、胴部最大径24.5cm、器高33.5cmを測る。出土地点を中心に遺構の確認を行ったが、遺構の検出できなかった。

112はI-23グリッドから出土した壺の口縁部で、頸部に刻み目付きの貼付突帯を持つ。肩部の張りはなく、頸部のくびれ部も明確ではなく、突帯から口縁部に向かって直立気味に長目の口縁が外反する。

甕 (113~145)

113~115は「く」の字口縁で、頸部に刻目付きの貼付突帯を持つ甕である。

114はK-17グリッドからの出土で、口縁部径と胴部最大径がほぼ同じの甕である。胴部上位に丸みを持ち、突帯部で若干締まり、口縁部に向かって頸部が少し立ち上がりを見せながら大きく外反する。口縁部径約30cm、頸部径25.6cm、胴部最大径約30.2cmを測る。

115はK-19グリッドから出土した。胴部中位以下を欠くが、口縁部径と胴部最大径がほぼ同じで、胴部が比較的張るタイプの甕と思われる。口縁部は頸部から外湾気味に大きく開く。調整はナデ調整で口縁部内部に指によるナデ調整が見られる。口縁部径は約30cmを測る。

116・117はJ-22グリッド出土の甕である。口縁部径に最大径を持つ。口縁部はくびれのある頸部から大きく外反する。胴部に張りはない。口縁部径は116が約33.5cm、117が約28cmを測る。116・117は同じタイプである。117はH-22グリッドから出土した甕で、口縁部から底部までの復元が出来た。平底の底部から口縁部に向かって若干の膨らみを持ちながら胴部が広がり、頸部を境に口縁部へ大きく外反する。刻目付きの貼付突帯は頸部よりわずかに下位に付く。内外面ともハケ目調整が見られる。最大径を口縁部径に持ち、口縁部径は約31cmを測る。頸部径約26cm、胴部最大径約26.5cm、底部径約4.6cm、器高約37cmを測る。

118はJ-35グリッド出土で突帯のある頸部から下を欠く。

119~123は、頸部を持たずに口唇端部の下6~8cmの所に刻目付きの貼付突帯を持つ甕である。119はJ-25グリッドから出土している。胴部から一気に直立する口縁部は、

口唇端部がやや内側に傾く。刻目突帯を口唇端部の約6cm下部に持つ。口縁部径約2.5cmを測る。

120はK-30グリッドから出土している。胴部からはやや外傾気味に口縁部へ一気に立ち上がる。口唇端部も真直ぐに伸びる。刻目突帯は口唇端部下約7cmに持つ。口縁部径は約31cmを測る。

121はL-29グリッドから出土している。胴部から一気に立ち上がる口縁部は、口唇端部で若干内湾する。口唇端部には細かな刻みが巡っており、一部粘土の突起も見られる。刻目突帯は口唇端部下約5.6cmにある。口縁部径は約24cmを測る。

122はJ-31グリッドから出土している。胴部から一気に立ち上がる口縁部で、口唇端部が内湾する。刻目突帯は口唇端部下約7cmに付く。さらに口唇端部に1~2cm間隔で刻みが巡らしてある。

123はJ-22グリッド出土。口縁部径約12.8cmと小型の甕で、口唇端部下約2.2cmに刻目突帯が巡る。小型の甕ではあるが、刻目突帯は口縁部径が30cmを越える大きめ目の甕とさほど変わらない。

124はO-29グリッド、125はM-30グリッドから出土している。いずれも口縁部を欠くが、刻目突帯部の状況から見ると胴部から一気に直立する口縁部は口唇端部がやや内側に傾くタイプと思われる。突帯部径は124が約27cm、125が約7.4cmを測る。

126は口縁部径が約11cmの小型の甕である。底部を欠く。胴部は張らず頸部もくびれが僅かである。口縁部は頸部から直立気味に僅かに外傾しつつ立ち上がる。頸部には細味の突帯が巡り細かな刺突文が連続して狭い間隔で施されている。

127~141は刻目突帯を持たない甕である。

127はH-33グリッドからの出土である。若干上げ底気味の底部に、胴部最大径を胴部中位に持つ張りのある胴部が付く。頸部でややくびれ、弧を描きながら口縁部へ向かって大きく外反する。口縁部径は約23cm、くびれ部の径約21cm、胴部最大径約24.4cm、底径約6.8cm、器高約30cmを測る。外面はハケ目調整、内面はナゲ調整で、頸部から口縁部にかけて指によるナゲ調整も見られる。

128はE-35グリッドから出土している。胴部最大径を肩部に持つ脚台付きの甕である。底部は4cm程の上げ底になっており「八」の字に開く。胴部は底部から頸部に向かって緩やかに広がり、胴部上位で最大径を持つと頸部の部分が僅かにくびれ、口縁部が僅かに外反する。口縁部径約21cm、頸部径約19.6cm、胴部最大径21cm、器高約30cmを測る。口縁部径と胴部最大径はほぼ同じである。内外面とのハケ目調整が施されており、外面上位にヘラケズリの痕跡も見られる。

129もH-33グリッド出土の甕である。細長の胴部に肩部の張りもなく、くびれた頸部から短く外傾する口縁部が付く。全体的にやや器形が歪む。底部は欠損しているが、脚台付きの甕と思われる。内外面とも風化が著しく調整は不明である。口縁部径約15.6cm・胴部最大径約17.9cmと胴部に最大径を持つ。器高は上げ底の底部を欠いた状態で26.8cmである。

130はC-33グリッドから出土している。脚台付きの甕で128に器形的には似ている。しかし、胴部に丸みを持ち器形も歪で、しかも器高が約26cmと若干低い事から、見た目

押し潰された感じのする甕である。頸部のくびれもはっきりしており、口縁部も真直ぐに外傾する。調整は風化が著しく不明である。口縁部径は約22.5cm、頸部径19.6cm、胴部最大径約20cmと最大径を口縁部径に持つ。

131・132は胴部の張りもなく底部から一気に広がりながら立ち上がり、頸部のくびれもなく頸部から口縁部が軽く外反する。131はH-22グリッド出土で、内外面ともハケ目調整が見られる。口縁部径が最大径で約24.5cmを測る。132はJ-22グリッド出土で、内外面ともハケ目調整が施されている。口縁部径が最大径で28.5cmを測る。

133は胴部に膨らみや頸部のくびれが若干見られ、頸部から口縁部がわずかに外反する。内外面ともハケ目調整が見られる。口縁部径が20.5cm、胴部最大径が21.5cmを測る。

134～139は頸部のくびれが顕著で口縁部が「く」の字に外反する甕である。

134はG-32グリッド出土で、胴部の張りがなく頸部から口縁部が「く」の字に外傾する。口縁部径が最大径で約18cmとやや小型の甕である。内面にハケ目調整の痕跡が見られる。

135はE-32グリッド出土で、肩の張らない頸部から口縁部が大きく「く」の字に大きく外反する。口縁部径が最大で約20cmを測る。調整は内外面ともナデ調整か。136はH-29グリッド出土で、胴部に膨らみを持ち頸部で頸部がくびれ、口縁部が「く」の字に大きく外傾する。口縁部に最大径を持ち24.5cmを測る。胴部の最大径は中位よりやや上にあり約23cmを測る。内外面ともハケ目調整が見られる。

137はE-34グリッド出土で胴部に張りのない長胴の甕である。僅かにくびれる頸部から口縁部が「く」の字に外反する。口縁部径に最大径を持ち約21.5cmを測る。胴部最大径は頸部近くの胴部上位にあり、胴部最大径約20.5cmを測る。内外面ともハケ目調整が見られるが、外面口縁部から頸部にかけてミガキ調整が施されている。

138はG-32グリッド出土で肩の張りがなく、頸部から口縁部が外反する甕である。口縁部径約25cm、胴部最大径約26cmと、口縁部径と胴部最大径がほぼ同じを測る。頸部外面にハケ目の痕跡が残る。

139は胴部に丸みを持つ甕でE-33グリッドからの出土である。頸部にくびれを持ち、口縁部が短く外傾する。口縁部径約18cm、胴部最大径17.5cmとほぼ同じ径で小型である。内外面ともハケ目調整が施されており、胴部内面と頸部外面に指頭痕が見られる。

140はL-28グリッドから出土している。胴部下位から底部を欠く。口縁部に最大径を持つ。頸部の張りはなく口縁部が外反する。内外面にハケ目調整が見られる。口縁部径約32cm、胴部最大径約28.8cmを測る。

141はC-33グリッドから出土している。口縁部径15cm、器高13.6cmと小型の甕である。底部は浅めの上げ底で、口縁部に向かって椀状の丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部で短く外反する。最大径を口縁部に持ち、刻み目突帯はない。底径約5cm、胴部最大径約9.8cmを測る

142～145は底部である。底部は東区でも多数出土しているが、今回は代表的な底部数点を掲載した。142はJ-28グリッド、145はN-28グリッドからの出土で、いずれも上げ底タイプの甕の底部と思われる。

143はL-28グリッドからの出土で、平底の底部である。胎土等から140の甕と同一個

体と思われる。

144はH-22グリッドからの出土。底部に厚みを持たせた平底で、壺の底部と思われる。

椀 (146・148・149・150)

146はI-31グリッドから出土した。底部を欠くが椀状に立ち上がる胴部に、頸部付近で僅かなくびれを持ち口縁部が外反する。口縁部径約17cmを測る。内外面にハケ目調整の痕跡が残る。又、内面頸部付近には指による圧痕が見られる。148はH-31グリッドから出土した。口縁部径約19cm、器高8.8cmのヘラミガキで調整されている。底部には幅2cmほどのナデ調整されたつまみ状の平坦部があり、胴部は半球状に立ち上がりを見せ、口縁部は若干内湾する。口唇端部の外面には1条の凹線が見られる。149はM-26グリッドから出土している。口縁部径約11cm、器高約5cmと小振りである。底部から一気に半球状に口縁部まで立ち上がり、口唇端部が僅かに外反する。内外面ともナデによる調整だが、底部外面は工具によるナデ調整、口縁部内面には指圧痕が見られる。又、底部外面にはスス付着の痕跡も確認できる。150はH-19グリッドから出土した。尖底の底部から内湾気味に口縁部まで開いたカップ状である。口縁部径約10cm、器高約8cmを測る。内面はナデ調整、外面はハケ目調整を施している。

ミニチュア土器 (147)

147はM-19グリッドから出土している。底径約2.8cmの平底の底部から短く口縁部へ開くコップ状の手捏ね土器である。内外面とも指押さえによる丁寧なナデ調整が見られる。特に、口縁部は指で抓み上げてあり、底部もナデ調整が施してある。口縁部は平坦ではないが器高は5.5～6cmを呈する。

高坏 (151～158)

このうち151～153は高坏の坏部にあたる。

151はH-19グリッドからの出土で、坏部下位で稜を有し、稜線を境に口縁部に向かって大きく長く外反する。口縁部径約34cmを測り、坏部内部の深さも12～13cmと深めである。内外面ともハケ目調整が施してある。

152はM-26グリッドからの出土で、坏部下位に稜を持ち稜線から口縁部に向かって大きく外反する。口縁部径約38.5cmを測り、深さは9cm程の浅めである。調整は内外面ともナデ調整である。

153はD-33グリッドから出土している。坏部中位に稜を持ち、稜線から口縁部に向かって外傾するタイプの坏部である。口縁部径約29cm、深さ約8.6cmを測る。稜線より上の口縁部外面にはヘラミガキが見られる。

154と155はD-33グリッド出土の高坏の坏部片である。椀状の坏部下位から坏部上位で稜を有し、口縁部が大きく外反し、口唇部は水平に開く。弥生終末期の高坏の様相を持つ。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が見られる。154の外面には指によるナデ調整の痕跡も見られる。

156～158は高坏の脚部である。

156はH-19グリッドから出土した。坏部接合面から「八」の字に裾部まで開く。外面にヘラミガキによる調整が見られる。裾部径約8.5cm、脚部高約7.4cmを測る。157はH-19グリッドからの出土である。坏部接合面から径3cm、長さ1cmほどの短めの筒状の脚部から「八」の字に裾端まで大きく開く。裾部径約10cm、脚部高約4.8cmを測る。158はM-26グリッドから出土している。脚部を欠き裾部のみの残存である。脚部との稜部から内湾気味に裾端部へと開く。裾部上位には穿孔が見られる。調整は外面がハケ目調整、内面は摩耗が著しく不明である。裾部径約19.5cmを測る。

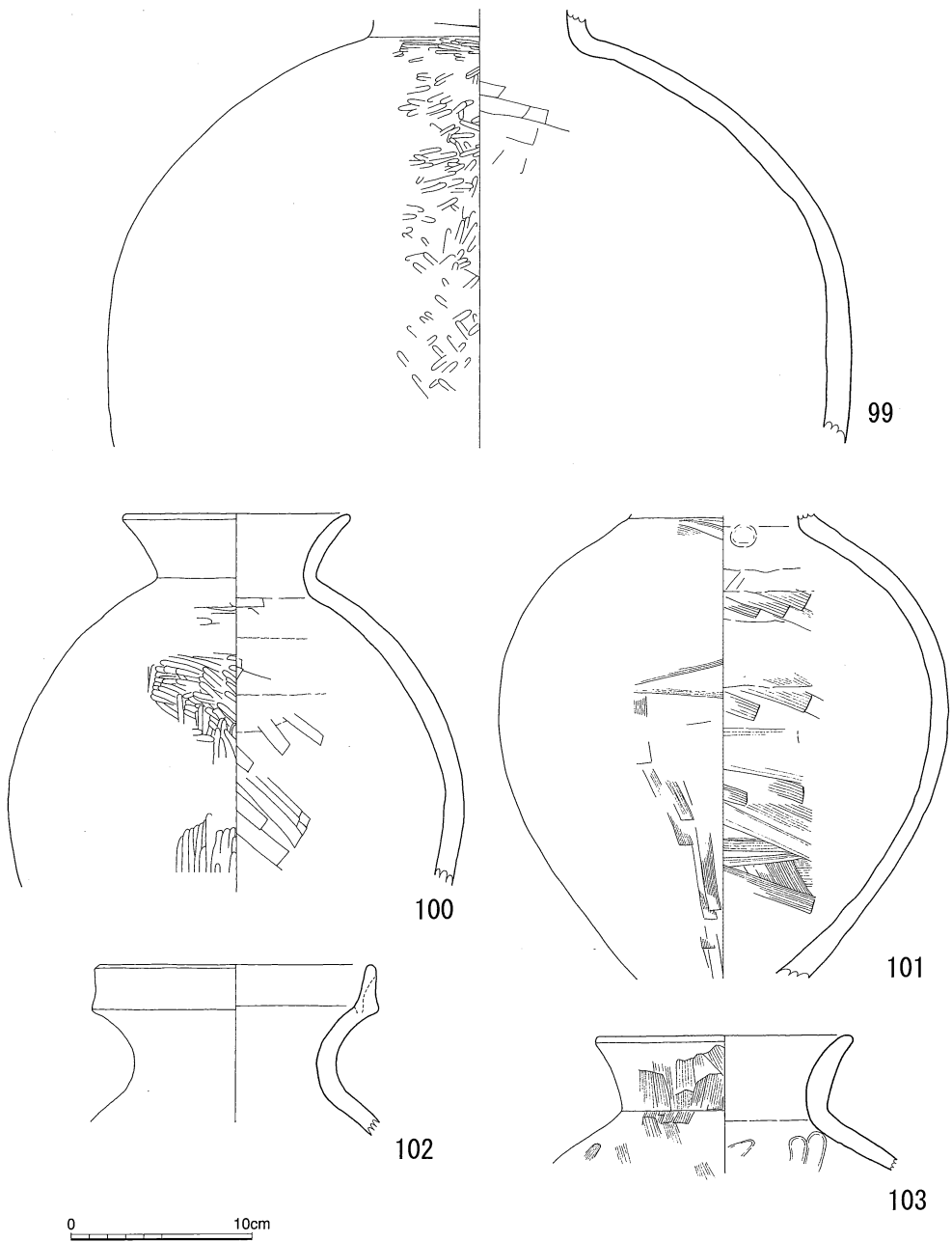
石器（第66図・第67図・第68図）

東区から出土した石器類は石包丁をはじめ砥石、磨石、敲き石など十数点出土している。

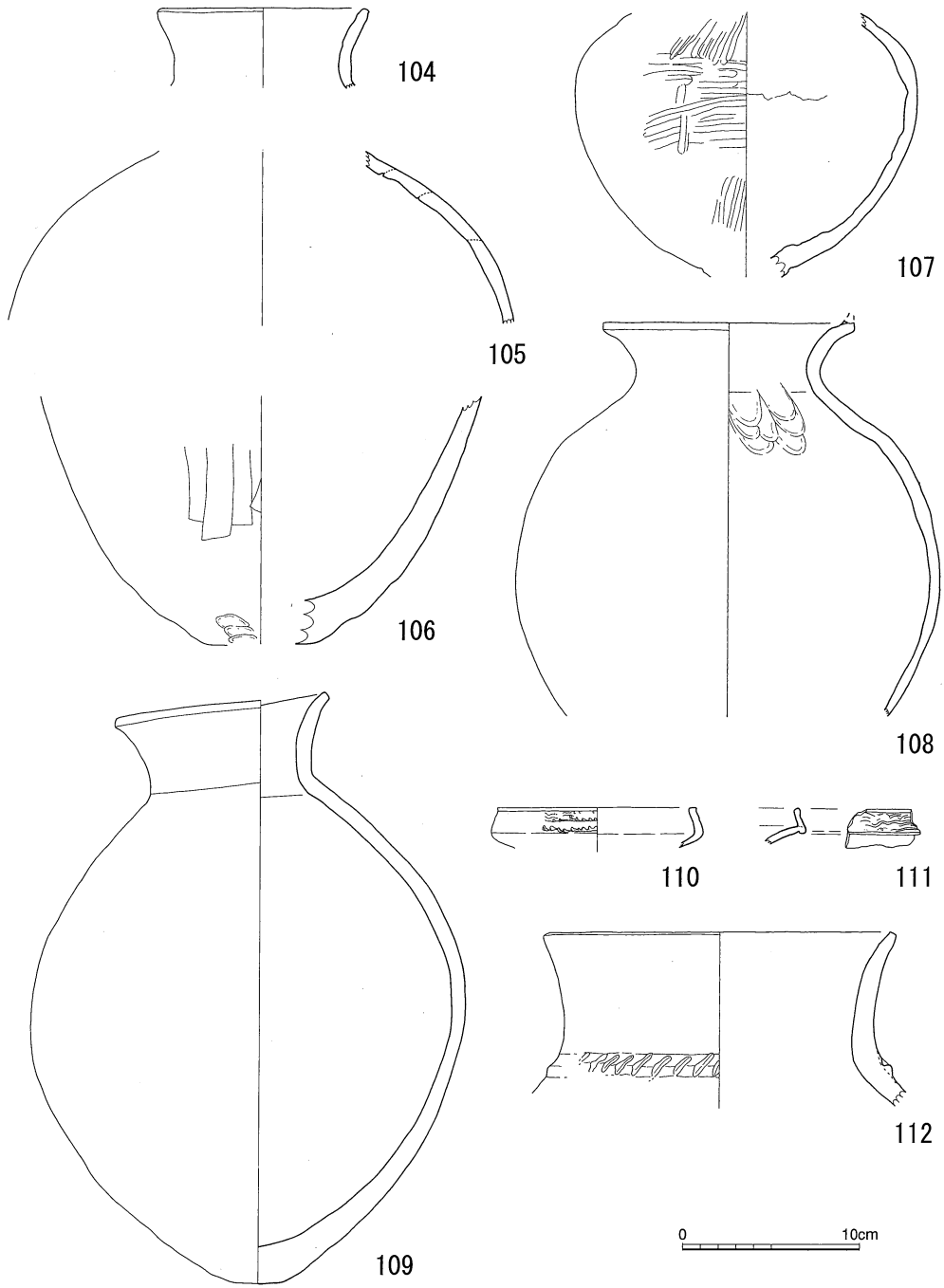
9はL-26グリッド出土の砥石。54cm×15cm×9cmと大型で、側面四面とも使用の痕跡が見られる。10はL-27グリッド出土の砥石。欠損しているが18cm×12cm×7cmを測る。11はM-26グリッド出土の敲き石。11.8cm×5.3cm×2.8cmと薄手の製品である。12はL-23グリッド出土の砥石で、10cm×8cm×6cmと小型である。中央部の窪み具合が著しく使用頻度が推測される。13はI-31グリッド出土の敲き石。8.6cm×4.6cm×1cmと薄手の敲き石である。上下面に使用の痕跡が見られる。

14～16は東区出土の石器である。14は9cm×7cm×7cm大の拳大の磨石である。六面に磨り面が見られる。15は13cm×13cmの方形の石で、厚みは4.5cmを測る台石である。16は6cm×3cmの小型の砥石で、厚さも1cmと薄手である。

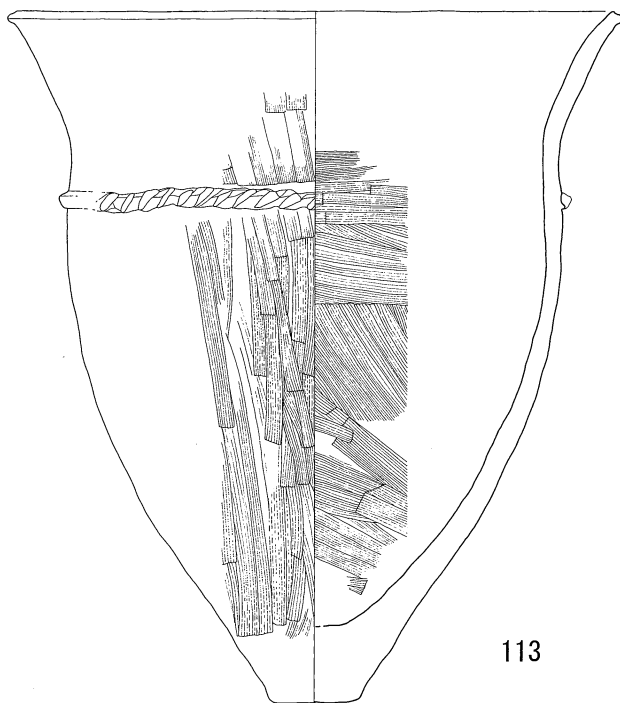
17・18は石包丁である。17はD-33から出土した磨製石包丁。半月形を呈し、2個の穿孔が見られる。長さ11.4cm、幅4.4cm、厚み0.4cmを測る。18はJ-30グリッドから出土した石包丁の素材剥片である。長さ6.3cm、幅5.3cm、幅1.0cmを測る。



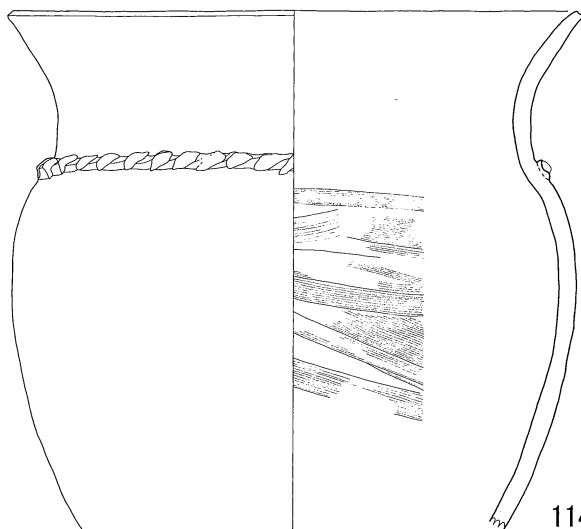
第57图 立山遺跡東区出土遺物実測図(1)



第58图 立山遺跡東区出土遺物実測図(2)



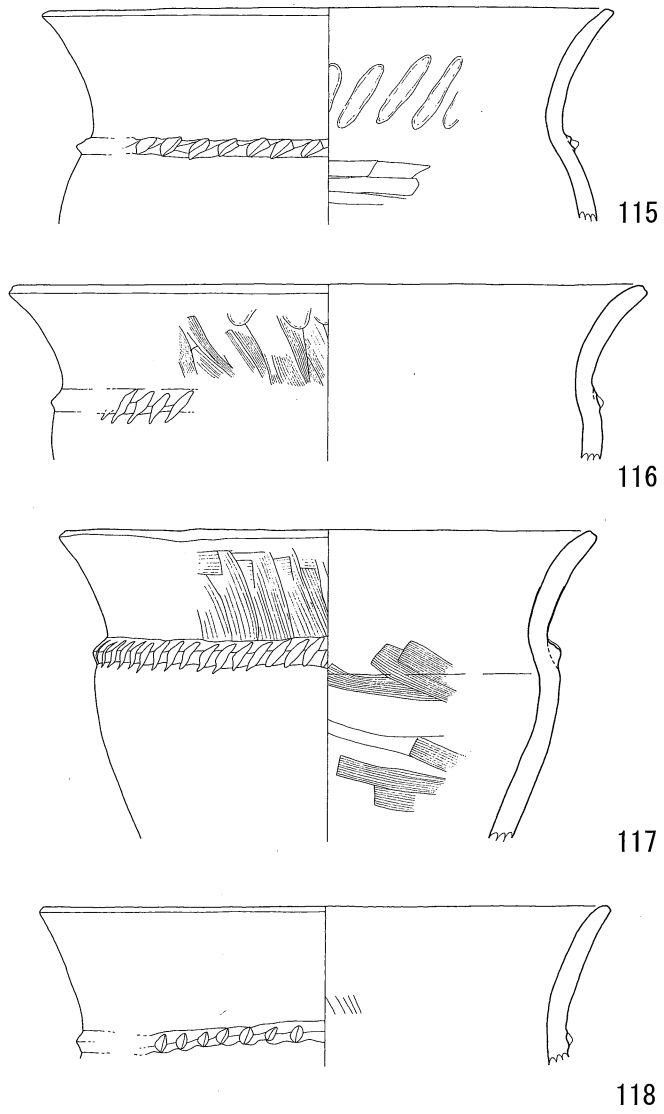
113



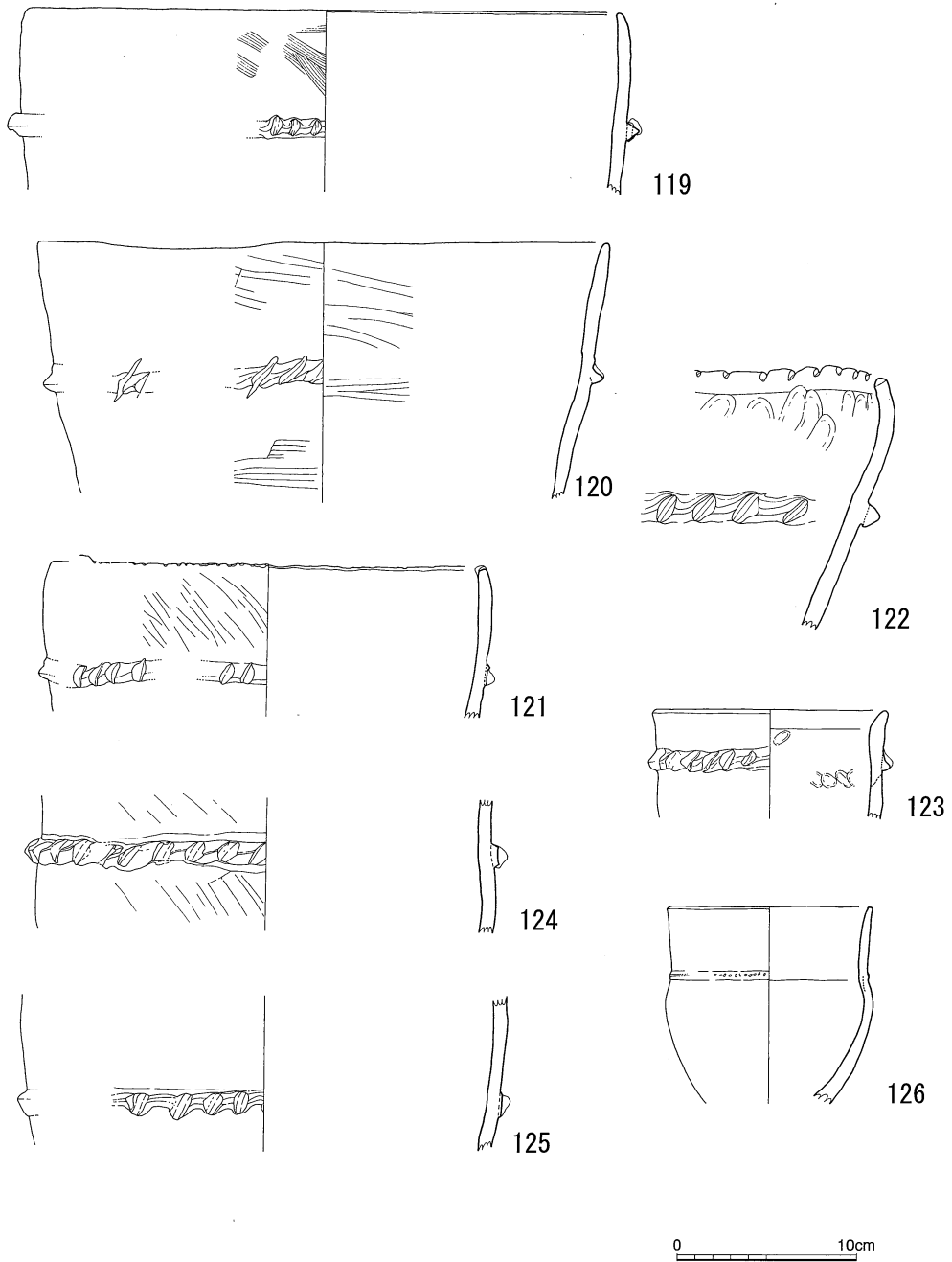
114

0 10cm

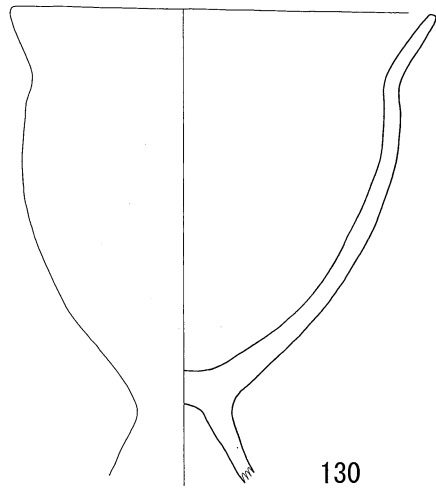
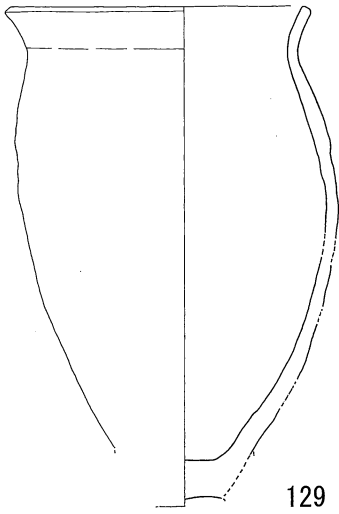
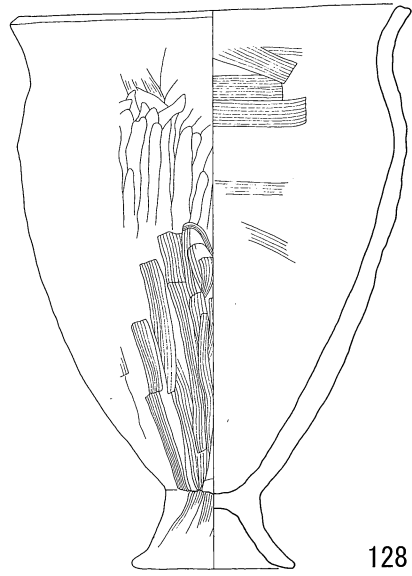
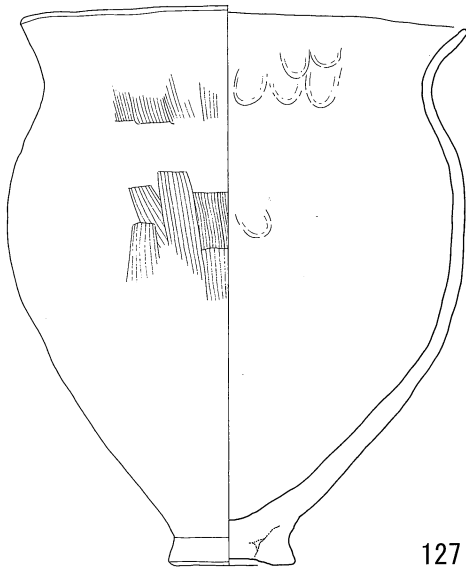
第59图 立山遺跡東区出土遺物実測图(3)



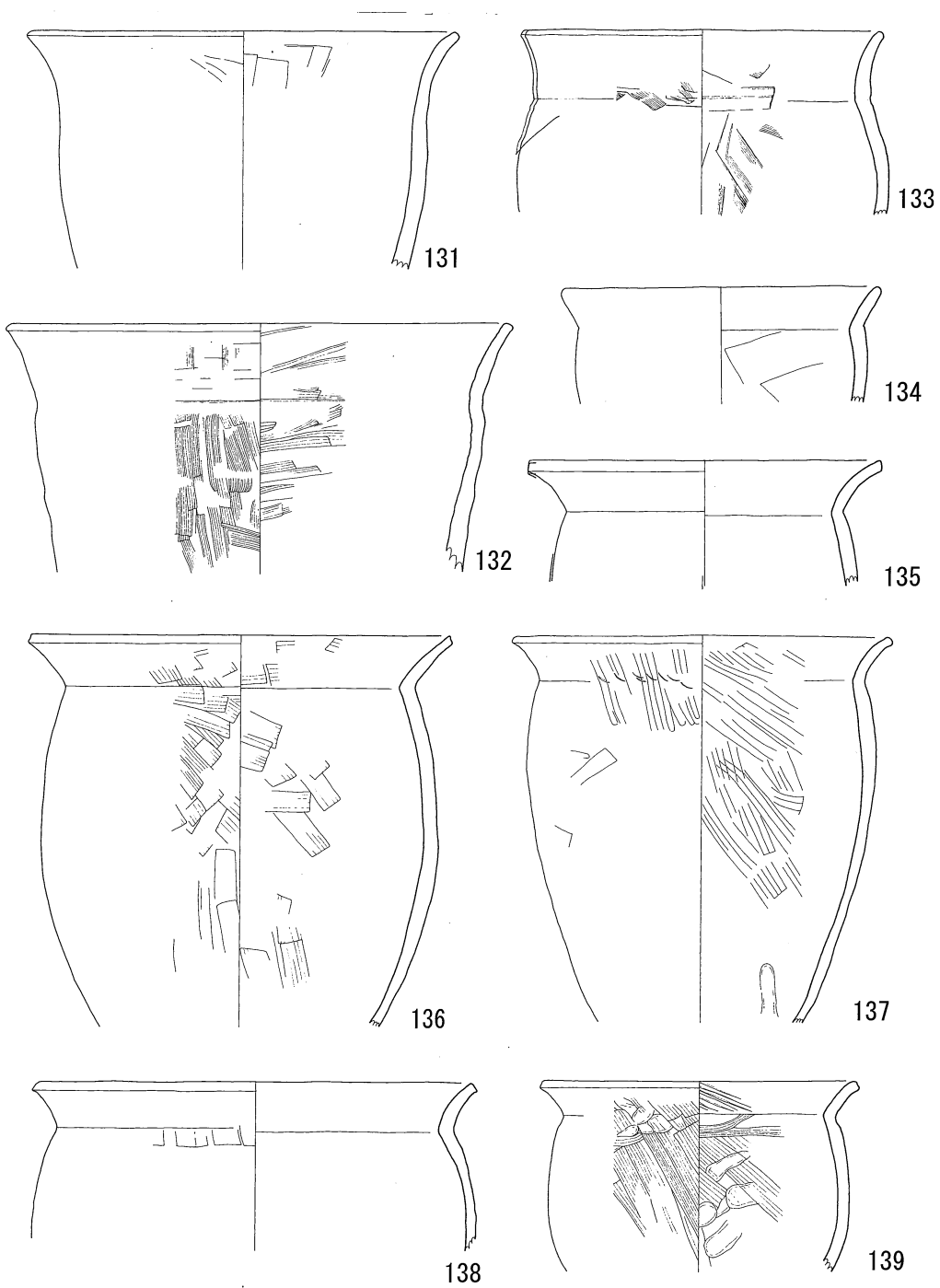
第60图 立山遺跡東区出土遺物実測图（4）



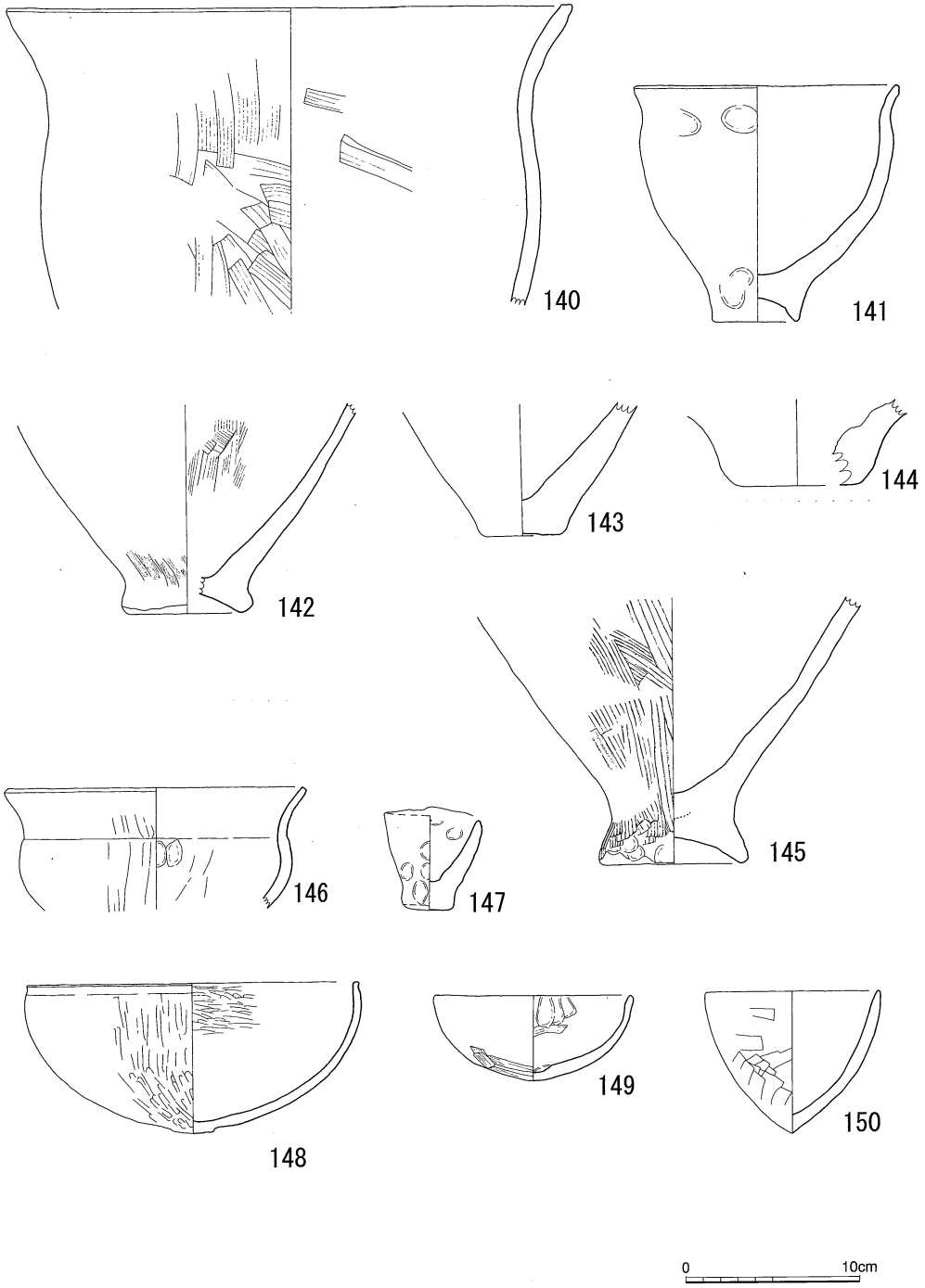
第61图 立山遺跡東区出土遺物実測图(5)



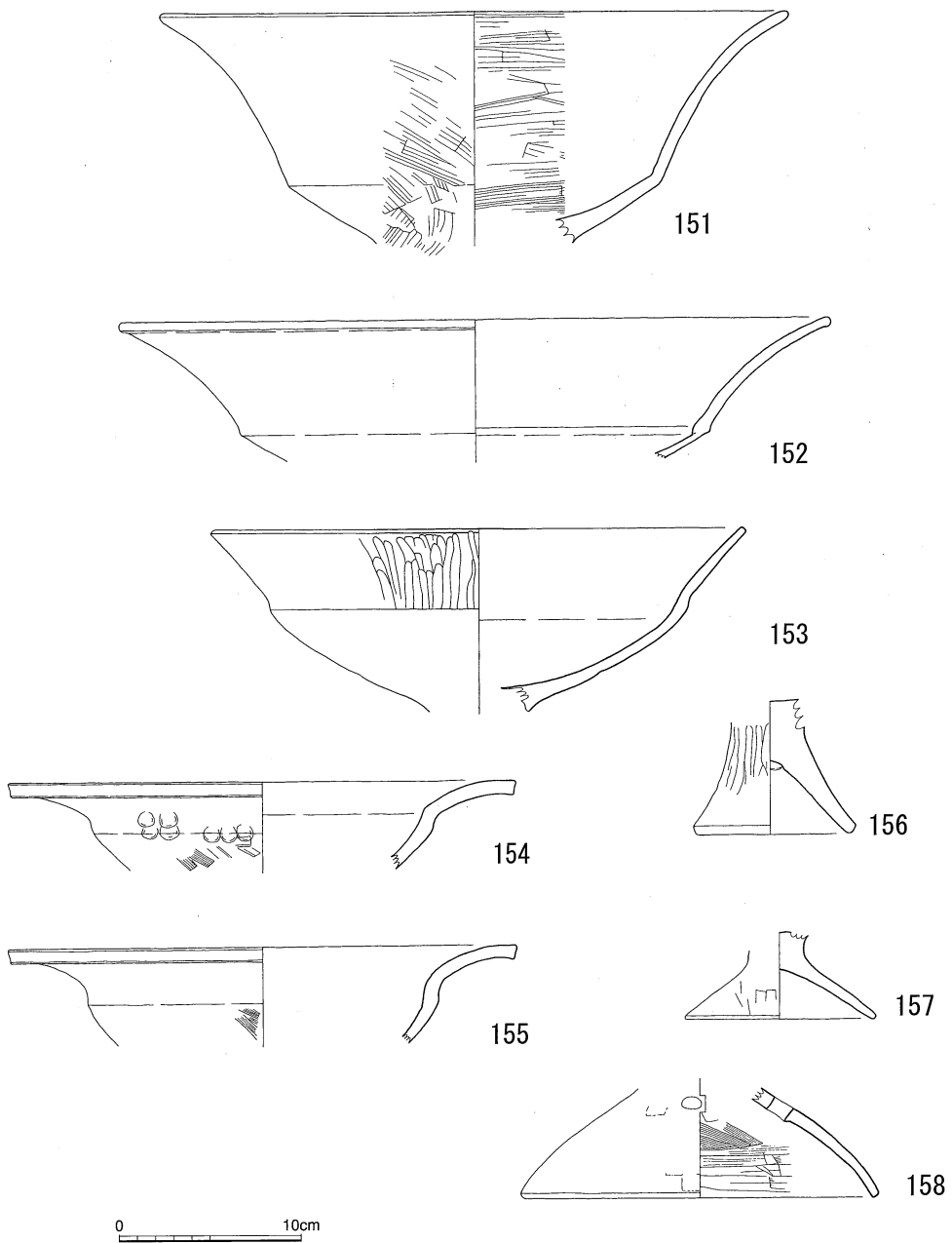
第62図 立山遺跡東区出土遺物実測図（6）



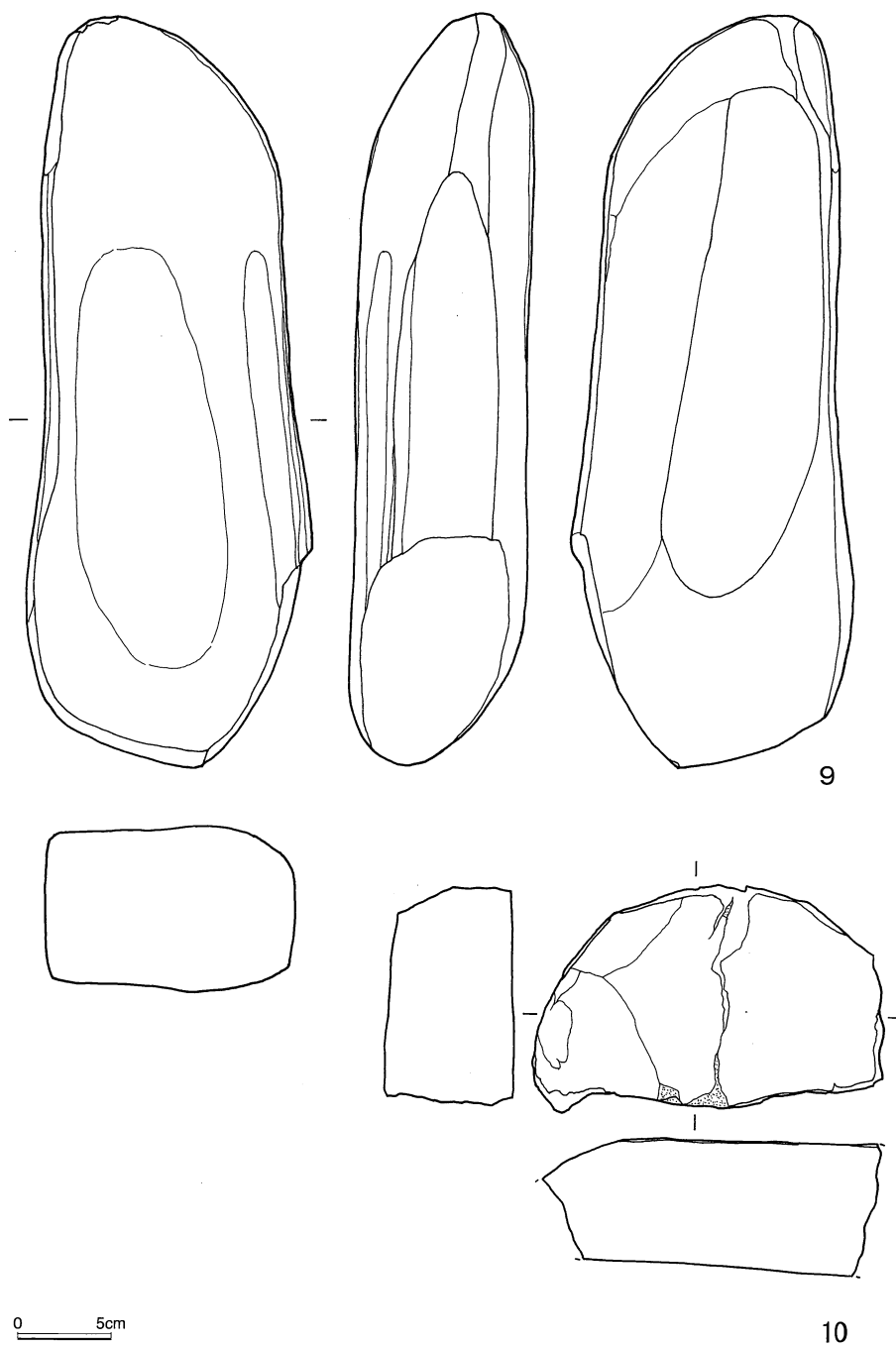
第63图 立山遺跡東区出土遺物実測図(7)



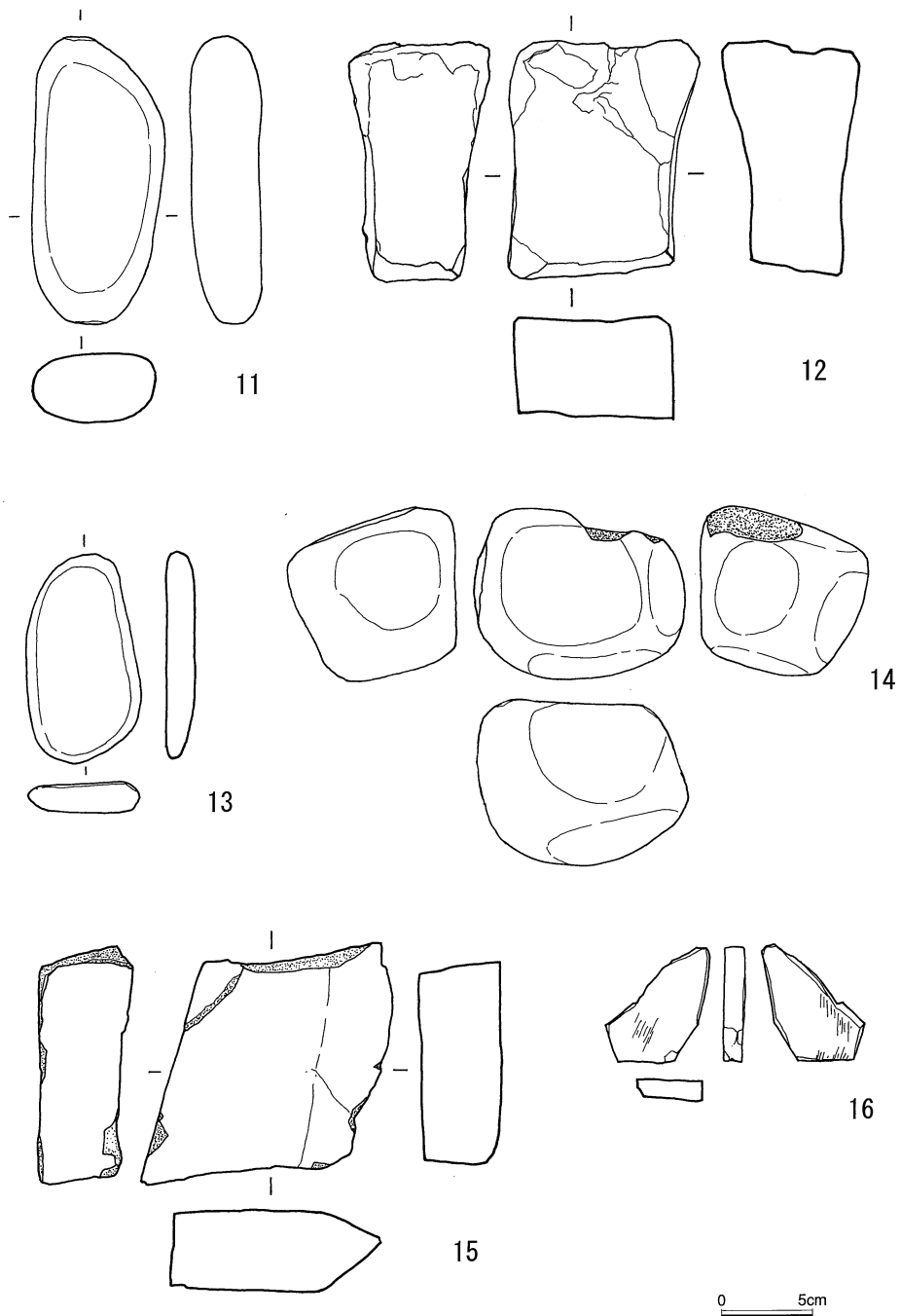
第64図 立山遺跡東区出土遺物実測図（8）



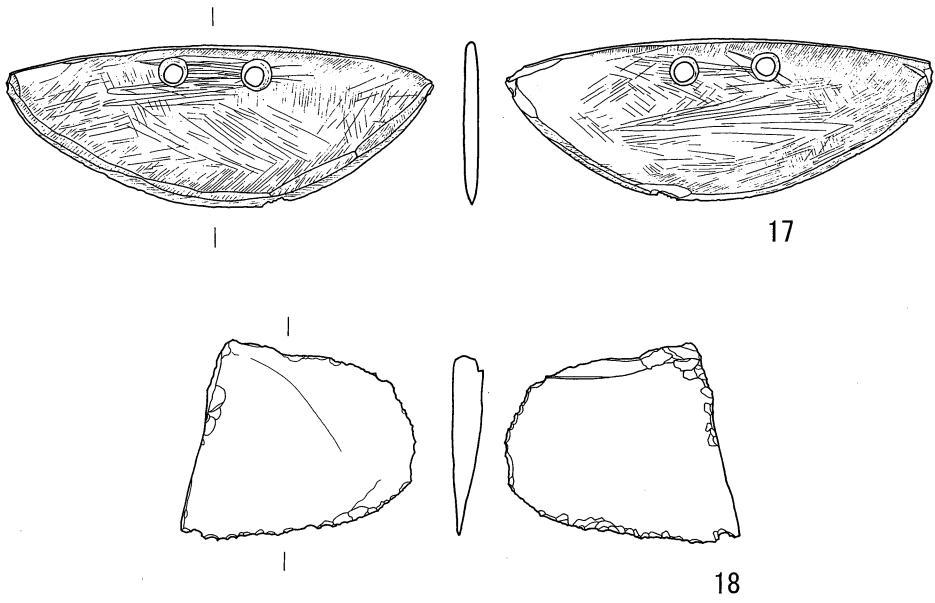
第65図 立山遺跡東区出土遺物実測図(9)



第66図 立山遺跡東区出土石器実測図（1）



第67图 立山遺跡東区出土石器実測图(2)



第68图 立山遺跡東区出土石器実測図（3）

第2節 古代の遺構と遺物

1. 古代の遺構

古代の遺構として明確なものは、南区のSA5に見られるようなカマドや埋め甕を有する平地住居が検出されているが、その他の遺構について共伴遺物が不明なため時期決定が困難であった。今回の調査では南区の平地式住居群と2棟の掘立柱建物、竪穴住居として南区のSA12、西区のSA22を古代の遺構とした。

SA12は長い煙道を持つカマドを有する竪穴住居である。しかし、遺構出土の遺物は検出されていない。周辺には古墳時代や古代の土師器が分布する。特に周辺で古代の土師器の出土する割合が他よりも高い事から古代の住居跡とした。

SA22では、住居北寄りから取り上げた遺物の中に刻目突帯を有する甕を含む古墳時代の遺物が出土しているが、黒色土器を中心に多くの古代の遺物も見受けられる事から古代の住居跡とした。

(1) 西区の遺構

SA22 (第69図)

西区北側住居密集地の北東端のL-10グリッドで検出された竪穴住居。主軸をN5°Eに持つ。SA23とはかなり接近する。又、北東方向にはSC8も隣接している。長軸がおよそ360cm~410cm、短軸が約360cmの台形プランを呈する。検出面から床面までの深さが10cmはない。住居中央よりやや南東に径約40cm、深さ約20cmの円形の掘り込みがある。柱穴は径約15cm、深さ約20cmの柱が四隅に掘り込んである4本柱である。柱間は250cm~320cmを測る。

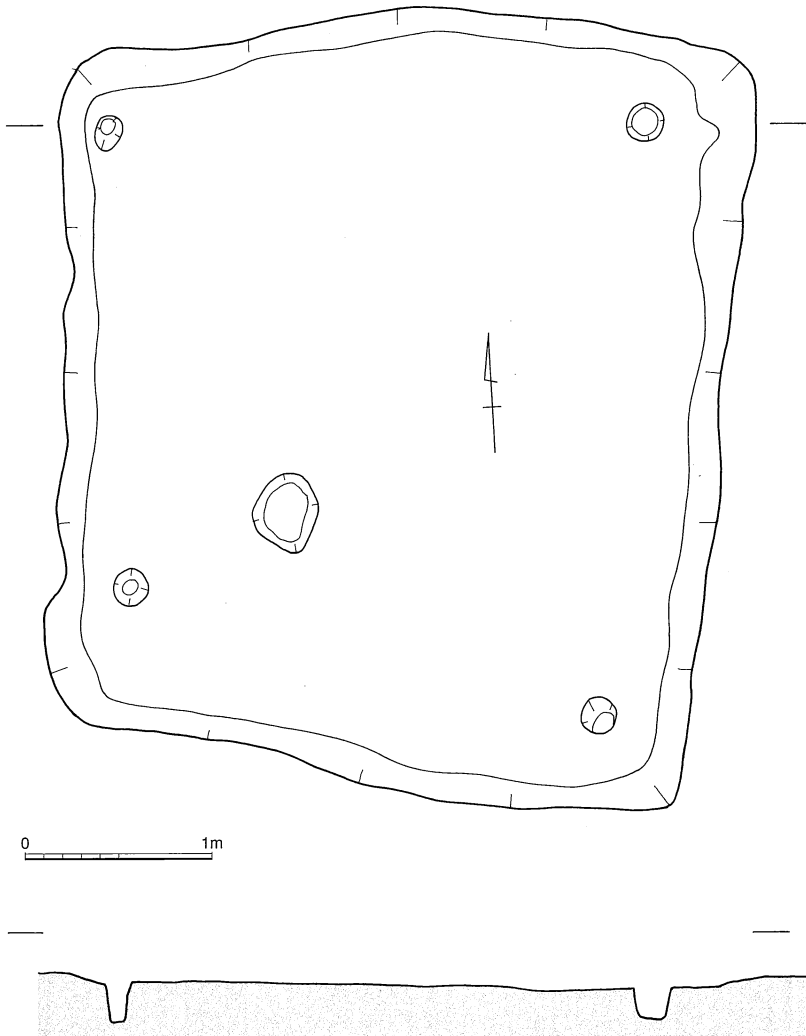
(2) 南区の遺構

【竪穴住居】

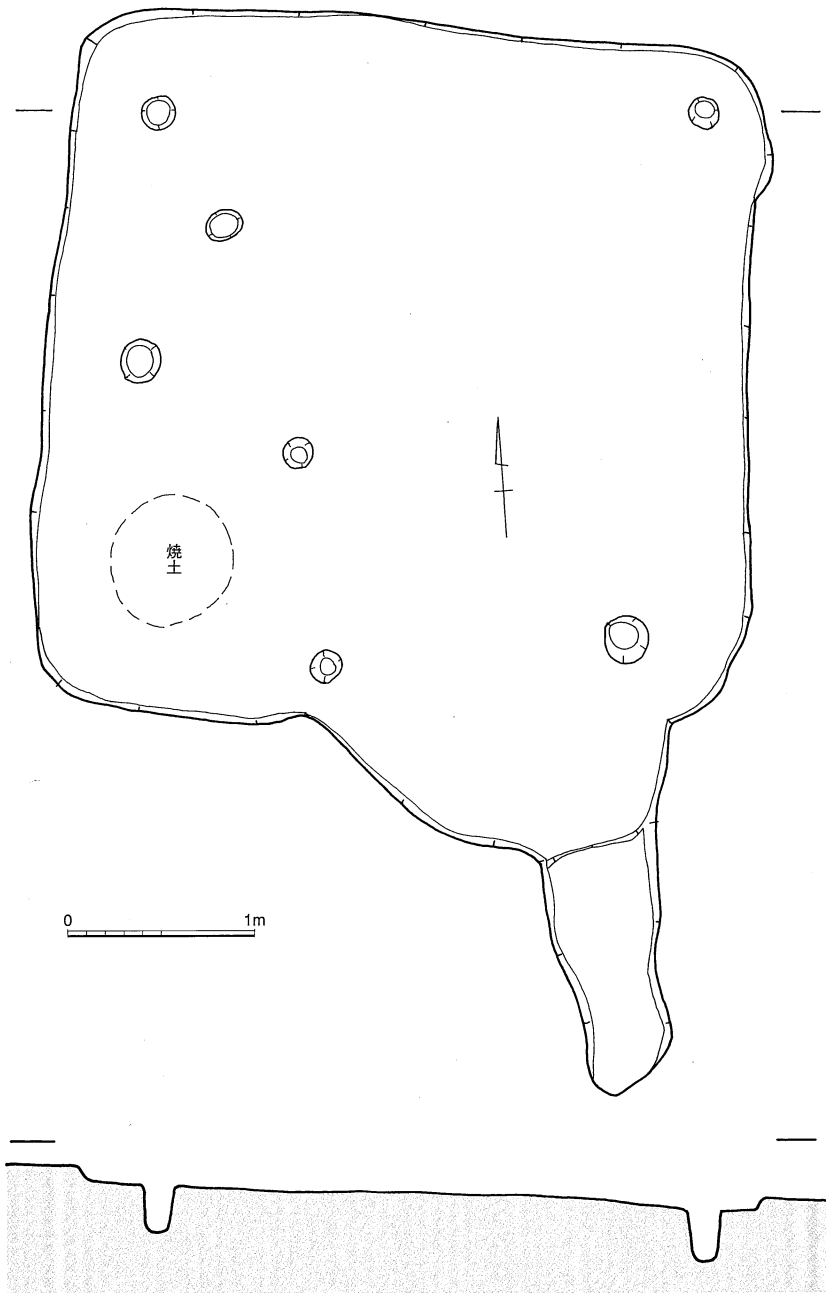
SA12 (第70図)

南区南側の遺構密集地の南側のY-16グリッドで検出された煙道をもつ竪穴住居。主軸をN10°Eに持つ。住居内の規模は長軸380cm、短軸370cmの方形プランを呈する。南壁の東半分が80cmほど外側に広がり、長さ130cm、幅60cm~45cmの煙道が延びる。又、住居床面の南西角で径70cmほどの焼土が円形に広がる。検出面から床面までの深さは、住居および煙道とも10cm~5cmと浅い。住居内に柱穴が7本検出されたが、主柱となるのは南東角・北東角・北西角の3本が考えられる。ほかの柱穴の埋土もさほど変わらない事から焼土付近の2本も主柱の可能性が大きい。柱間は主柱間で約290cm、その他の柱で120cm~150cmの間隔がある。

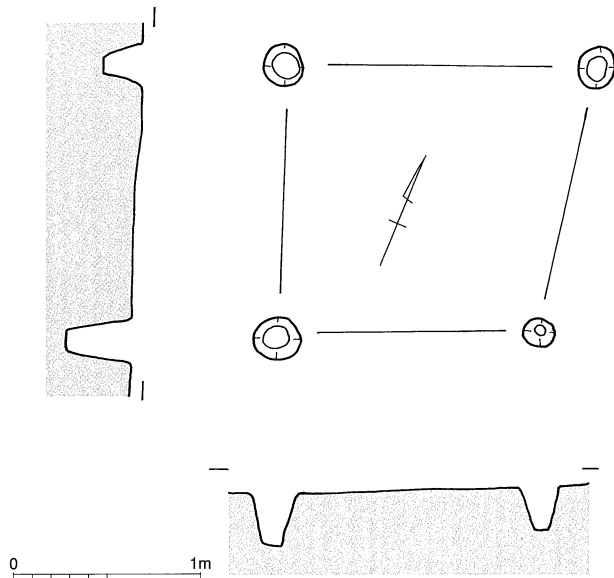
SA4 (第71図)



第69図 立山遺跡SA 22遺構実測図



第70図 立山遺跡SA 12遺構実測図



第71図 立山遺跡SA 4遺構実測図

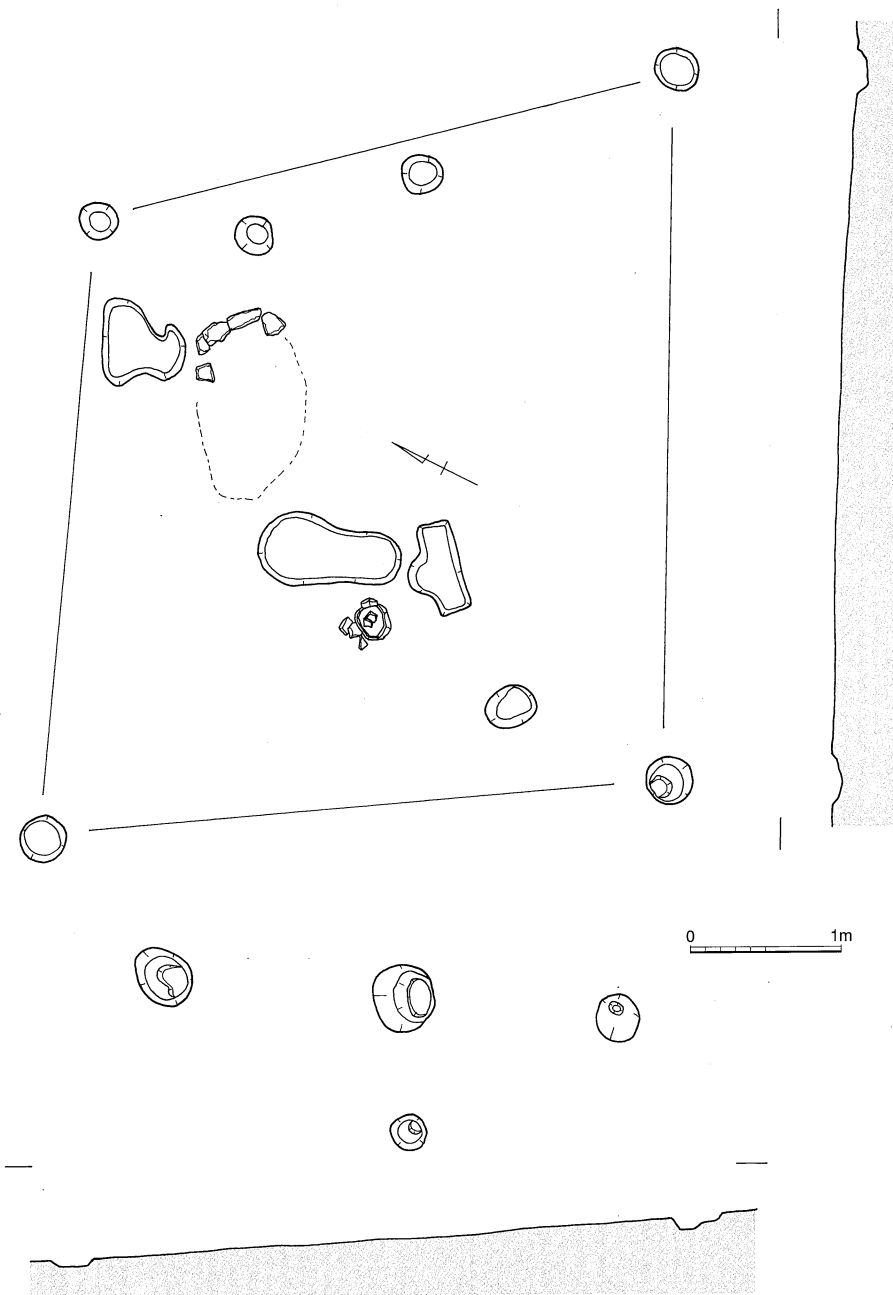
B地区遺構密集地の北端のV-16~17グリッドに跨って検出された平地式の住居。主軸をN15°Wに持つ。SA 6・SA 7の北にある。径約20cm、深さ20cm~70cmの4本の柱穴が150cm~170cmの間隔で方形に並ぶ住居跡である。床面での焼土の検出はなかった。

SA 5 (第72図)

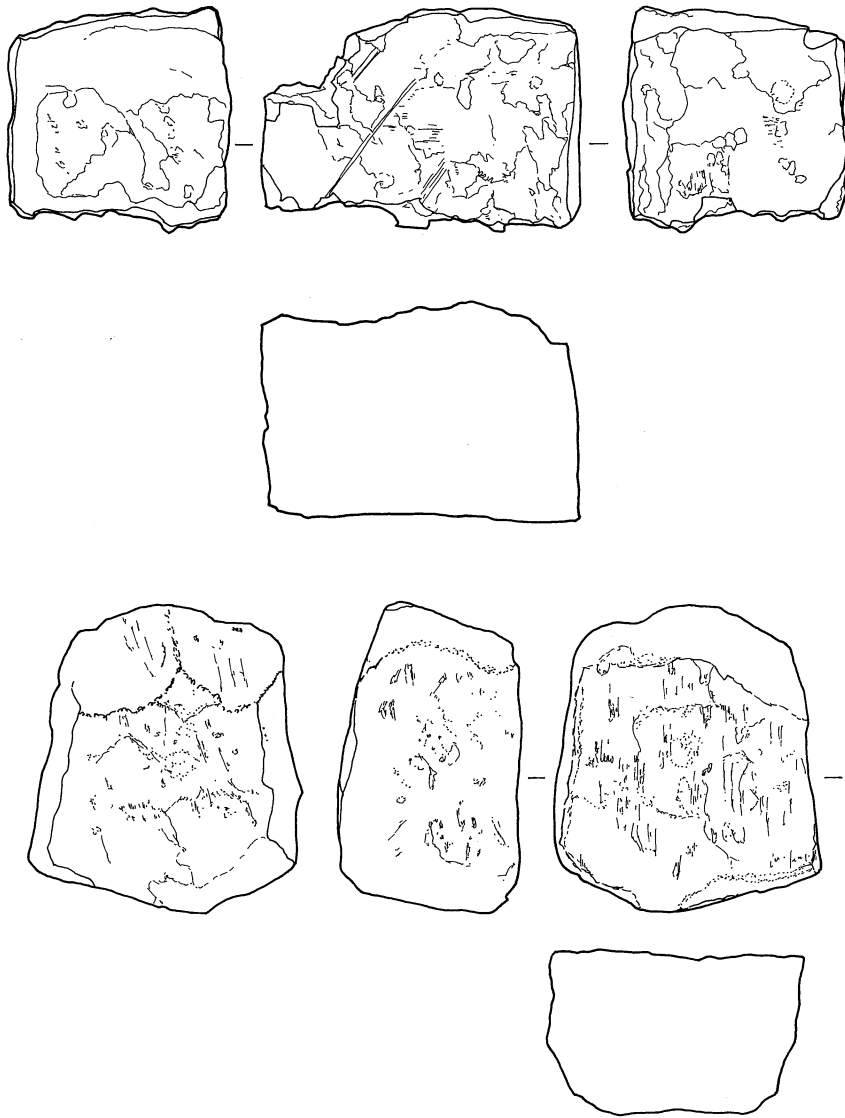
B地区遺構密集地の西側のX-15グリッドで検出された平地式の住居。主軸をN30°Wに持つ。SA 19・SA 29の西にある。径約20cm~30cm、深さ約10cmの4本の柱穴が400cm~470cmの大間隔で方形に並ぶ。柱で囲まれた中に、北よりの柱近くに、立方体に加工した軽石6個を「コ」字型に配列したカマドと焼土が検出された。軽石の内側は赤変し脆くひび割れている。さらに、カマドの南西側約2mの所に埋め甕が設置されている。主柱の他に柱穴が見られるが、主柱の間隔が広いことから住居に伴う補助的な柱の可能性も考えられる。出土した埋め甕(第86図272)の器形は、丸底で体部はほぼ垂直に伸び、口縁部で短く外反する。表面及び口縁部裏側まで丁寧なナデを施し、頸部裏側からヘラ削り調整をする。調整法は器体全体を丁寧になでた後、裏側の底から頸部までヘラ削りを施している。又、カマドを囲む材として使われた軽石加工品(第73図)は、17cm×12cm×10cm規模の立方体に加工したもので、表面には筋状の加工痕が見られる。

SA 6 (第74図)

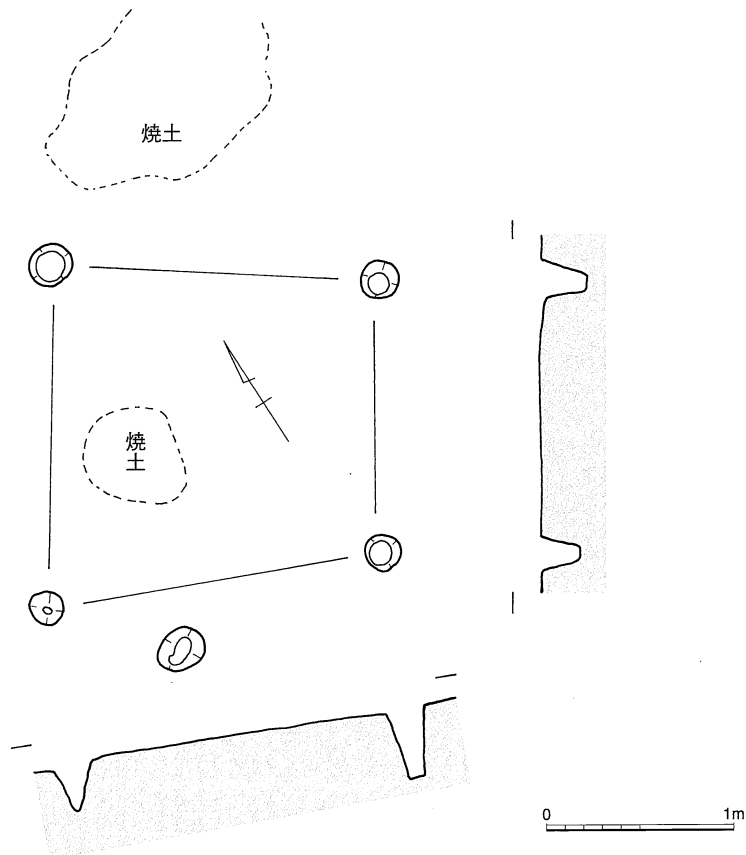
B地区遺構密集地の北側のV~W-17グリッドに跨って検出された平地式の住居。主軸をN60°Wに持つ。SA 14の西にある。約20cm、深さ20cm~30cmの4本の柱穴が150cm~180cmの間隔で方形に並び、柱で囲まれた西側と北側柱の外の北側の床面で焼土が検



第72図 立山遺跡S A 5遺構実測図



第73図 立山遺跡S A 5出土軽石製品実測図



第74図 立山遺跡SA6遺構実測図

出された。竪穴住居の床面のみの検出なのか平地式住居の検出かは不明である。

SA30 (第75図)

B地区遺構密集地の南端、Y～Z-16グリッドで検出された平地式の住居。主軸をN20°Wに持つ。SA20と近接する。径約40cm～50cm、深さ50cm前後の6本の柱穴が長方形に並ぶ。中央には110cm×80cm、深さ約17cmの焼土を含む掘り込みが見られる。柱穴は柱間が100・150・180・300cmを測る。建物としては桁長350cm～370cm、梁長約300cmの規模である。

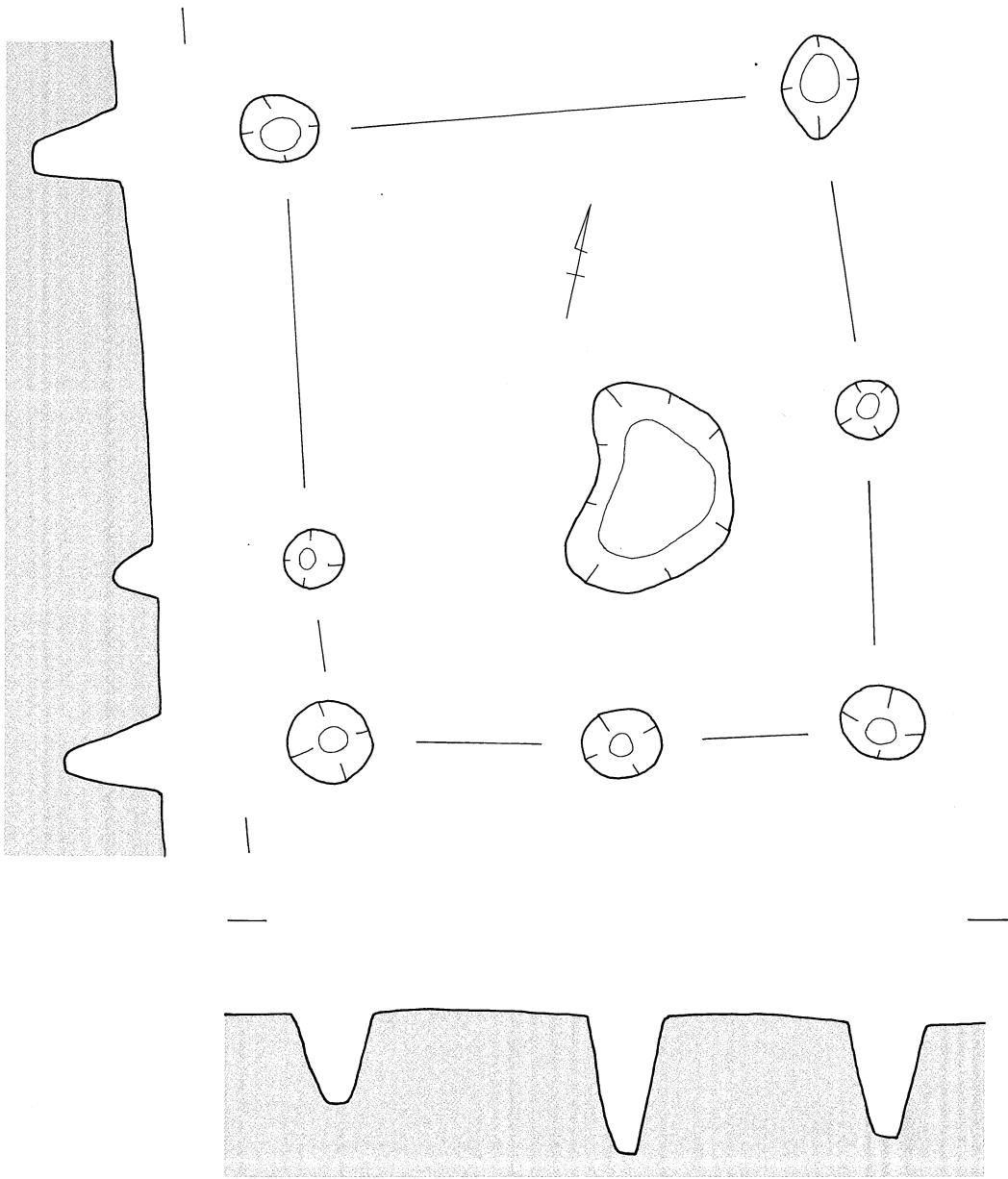
SA31 (第76図)

B地区遺構密集地の北端のV-17グリッドでSA4に隣接して検出された平地式の住居。主軸をN20°Wに持つ。SA4とは南西角の柱を共有する。径約20cm・深さ20cm～50cmの4本の柱穴が180cm～240cmの間隔で台形状に並ぶ住居跡である。南側の柱間の床面で焼土が長さ約130cm、幅約80cmの範囲で検出された。

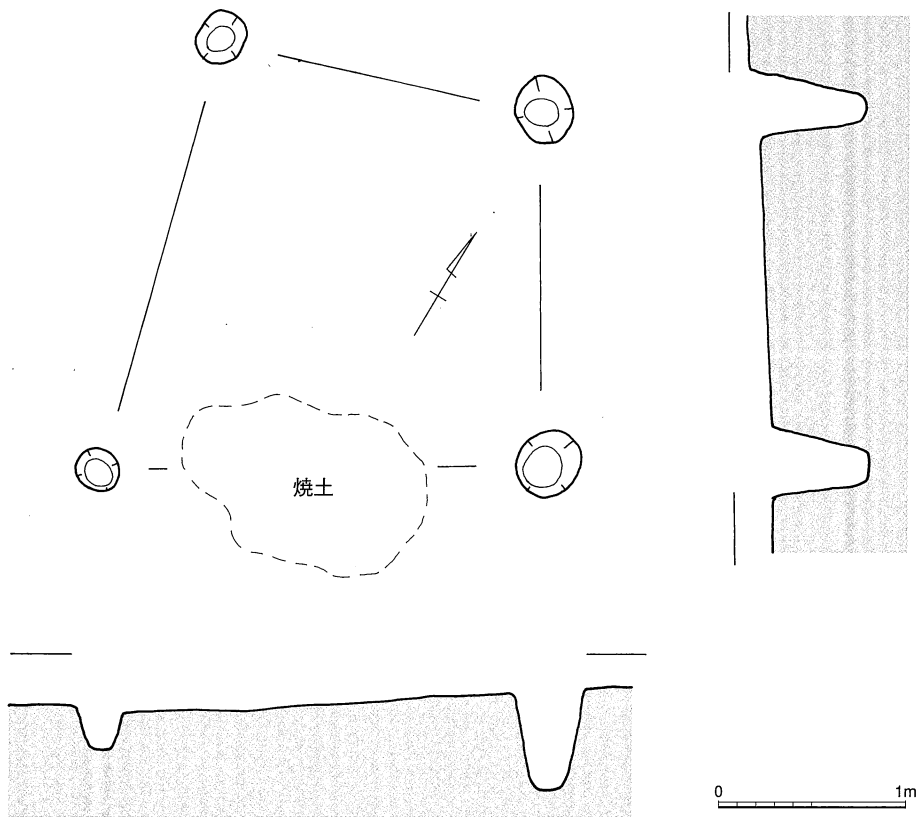
【掘立柱建物】

BS1 (第77図)

B地区遺構密集地の北西端のV～W-15グリッドで検出された掘立柱建物。主軸をN



第75図 立山遺跡SA30遺構実測図

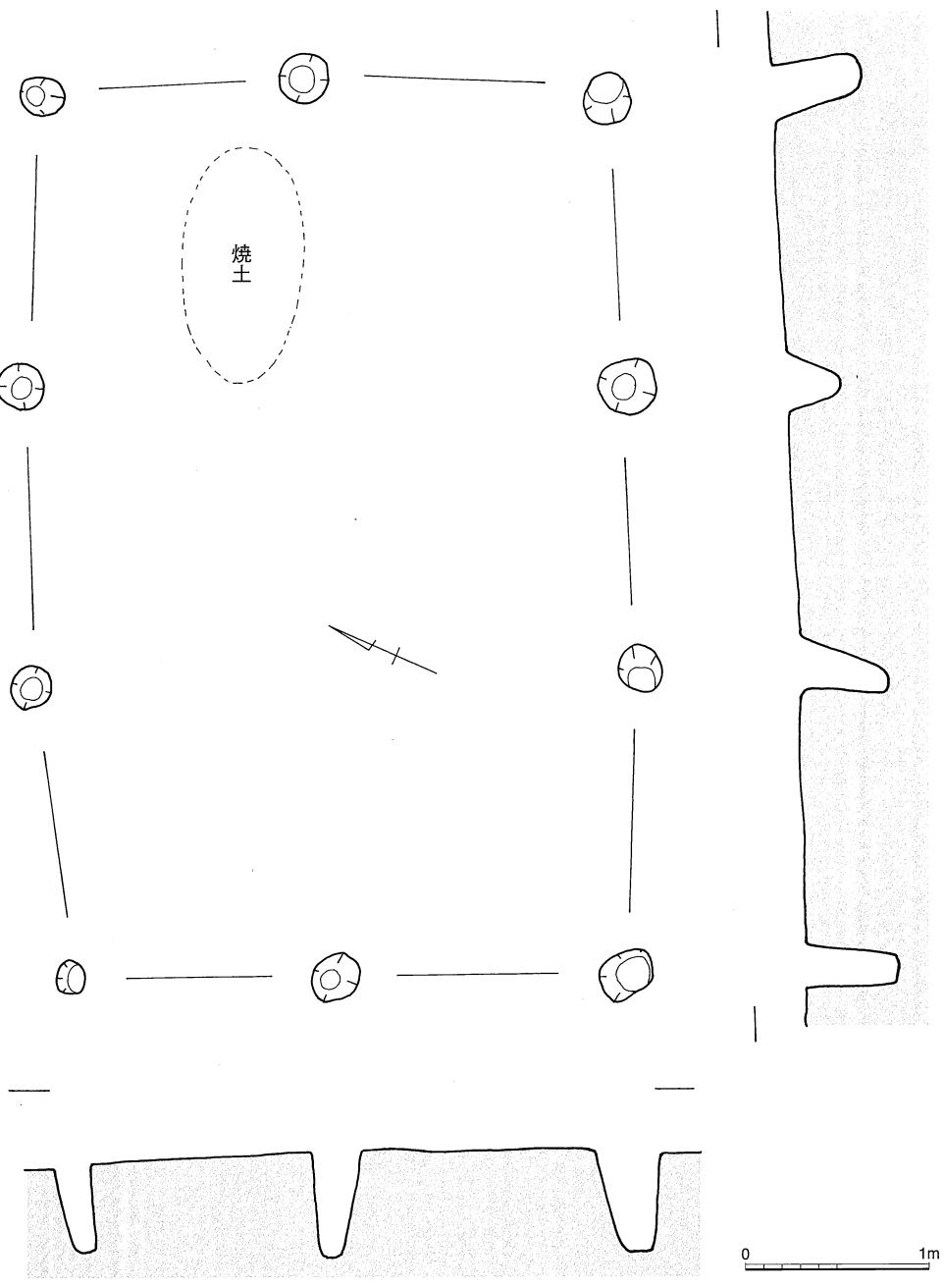


第76図 立山遺跡SA31遺構実測図

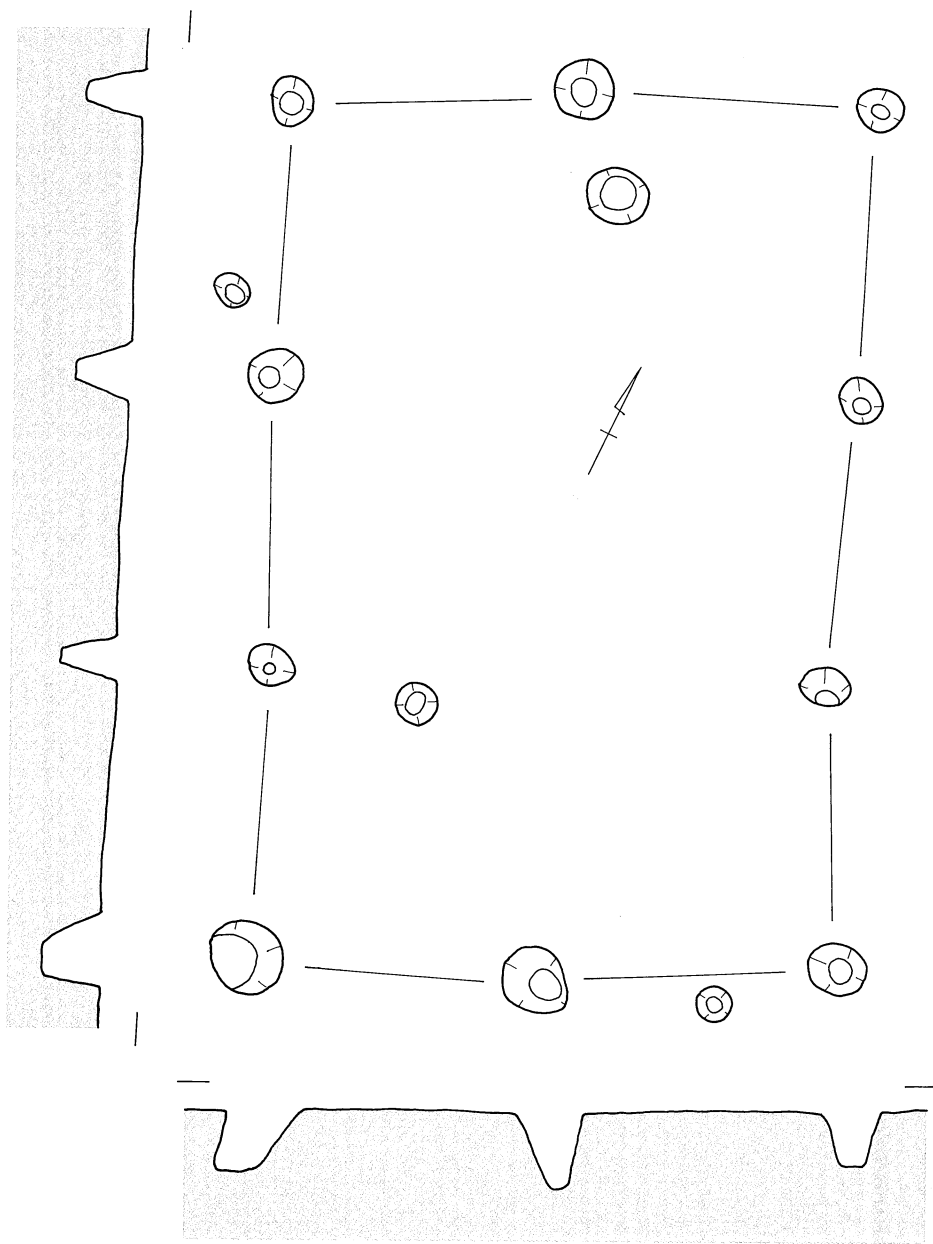
65° Wに持つ。2間×3間の建物で主軸を約N60° Eに持つ。桁行480cm～470cm、梁行310cm～300cmを測り、柱間は概ね160cm前後のものが主流である。東にはBS2が主軸を90° 振った形で隣接する。東側の梁行の真中の柱付近に東西方向に長さ約60cm、幅約30cmの範囲で薄く焼土が確認された。

BS2 (第78図)

BS1の東に隣接する掘立柱建物でV-15～16グリッドで検出された。主軸をN25° Wに持つ。2間×3間の建物で、主軸を約N30° Wに持つ。桁行約470cm、梁行約320cmを測り、柱間は150cm～160cmである。



第77图 立山遺跡SB1遺構実測図



第78図 立山遺跡SB 2遺構実測図

2. 古代の遺物（第79図～第87図）

今回、立山遺跡から出土した古代に相当する遺物としては、土師器（坏・高台付碗・円盤高台碗・黒色土器・甕・紡錘車）、須恵器甕がある。この中には住居埋土中から出土したものもあるが、大半は包含層から検出されたものである。

もっとも多く出土しているグリットはW～Z-15～17グリットである。この一帯からは竪穴住居、カマドを持つ平地式住居、掘立柱建物等の遺構が密集する地域である。

（1）土師器（159～264、272～287）

本遺跡では古代の遺物の中で出土量が最も多い。器種は坏・高台付碗、円盤高台付碗・黒色土器A類（内黒土器）・甕・紡錘車があり、そのうち、最も多い器種が坏である。ただ、完形品は少なく、殆どが破片である。

坏（159～216）

まず口縁部から見ると大きく4種類に分類できる。

- ・底部より真っ直ぐに伸びてそのまま口縁部に至るもの
- ・口縁部でわずかに内湾するもの
- ・わずかに緩やかなカーブを描きながら口縁部でまたわずかに外反するもの
- ・緩やかなカーブを描きながら口縁部で外反するもの

数量的には真っ直ぐに伸びるものが最も多いが、わずかに外反するものも4割程度見られ、この2つのタイプが大半を占める。明らかに外反するものは少なく、内湾するものはわずかである。そのほかに口縁部がわずかながら逆「く」字状の受け口のような段を有するものが1点（161）ある。

口径からは大中小の3種類に分けられる。

- ・径10.0～11.0cmの小型品
- ・径11.0～14.5cmの中型品
- ・径15.0～19.0cmの大型品

小型品の場合は10.4～10.8cmの間に偏るが、大型品の場合はばらつきが大きい。口縁部の形態から見ても中型品は最もバリエーションが揃い、小型品は真っ直ぐに伸びるものか、少し外反するもの、大型品は少し外反するものだけである。

底部についてみる。切り離しが全てヘラ切りで、糸切りは見られない。その後の調整でそのまま放っておくもの、丁寧になでつけるものがある。また、切り離した後に底部強化のための調整と推測されるスダレ状圧痕（板状圧痕）が2点（211・212）見られる。同じく底部強化のために内底部をなでた時に付いたと思われる扇状圧痕も1点（207）見られる。

体部下半の調整については、ナデ調整だけのもの・ナデ調整の後さらにヘラ削りをしたもの、の2種類がある。

底径からも大中小の3種類が想定されるが、中型品と小型品の境目は見分けがつきにくい。最も小型のものは底径4.3cmで、4.8～6.0cmまでのものが最も多い。中型品は上限が7.2cm程度が限界と考えられる。さらに、底径9.0cmの大型品も見られる。

高台付椀 (217~229)

高台付椀の中にも内面が黒変したものがあり、炭素の飛んでしまった黒色土器A類と混同されてしまうため、ミガキの施されたものは黒色土器A類、それ以外のものを高台付椀とみなした。完全に復元できるものはなく底部のみである。

高台についてみると、高台の倒れ具合と高台端部の形態から明確な違いが見られる。真っ直ぐ斜め下に断面が二等辺三角形形状に伸びるもの・高台上端の径が小さく角度の急な「八」の字になるもの・裾広がり「八」の字になるもの、の3種類に分けられる。高台端部も、単に丸く仕上げるもの。丸く肥厚するもの。しっかりと地面に接しているもの。接地面は少ないが内部に稜を持つものの4種類に分けられる。高台の高さは1.5cm~2.0cmの間に収まる。ただ、その後中心に向かって底部が下がるもの(226~228)と、そのまま平らになるものがある。

円盤高台付椀 (230~233)

4点が確認されている。完全に復元できたのは1点(230)だけで、残りは底部のみの破片である。底部には体部下端より裾広がりに開くだけのもの。明確に円盤と呼ぶ事のできるものの2種類がある。底部はすべてヘラによる切り離しである。

黒色土器A類 (234~262)

それ程数量は多くないものの、SA22周辺を中心に一定量は確認されている。完全に復元できるものは炭素分の飛んでしまった1点(234)のみで、残りは口縁部と底部の破片である。口縁部は底部より丸みを帯びて立ち上がり、口縁部で外反するものと外反せず真っ直ぐに伸びるものがある。しかし、体部の丸みは緩く、明確な椀の器形とは言い難い。

口径の違いにより大中小の3種類に分類できる。小型品は口径9.8~11.0cm、中型品は12.6~14.0cm、大型品は15.0~17.0cmである。そのうち、中型品と小型品は口縁部で外反するタイプで、真っ直ぐに立ち上がるものは大型品のみである。

底部は平底が2点確認されているほかはすべて高台が付く。平底は若干上げ底気味になるもの(249)と、底部がしっかりと接地しているもの(250)の2種類ある。

高台付きの底部は端部がしっかりと接地している。その端部断面は丸みを帯びた四角形状で、端部を全体的に丸く仕上げているものと、端部のみが小さく外反しているものがある。高台の高さは全体的に一定しているが低いものもいくらか混じっている。

特異なものとして、高台内部と坏部との境目に「ハ」字状の刺突痕を残すものが見られる。(254~256・262)。調整によるものか文様かは類例が見あたらない。一部消えかかっているものもあるが、黒色土器のみに見られ、高台付椀には見られない。高台の形態も異なるものばかりだがいずれも高台は小振りである。

紡錘車 (263・264)

2点確認されているがそのうち1点は一部が欠ける。いずれも土師器の底部断片に穿

孔したものである。264は側面にナデ調整の痕が残る事や、両面の円形の窪みがある事から、高台付椀を再利用したものと思われる。

甕 (272~287)

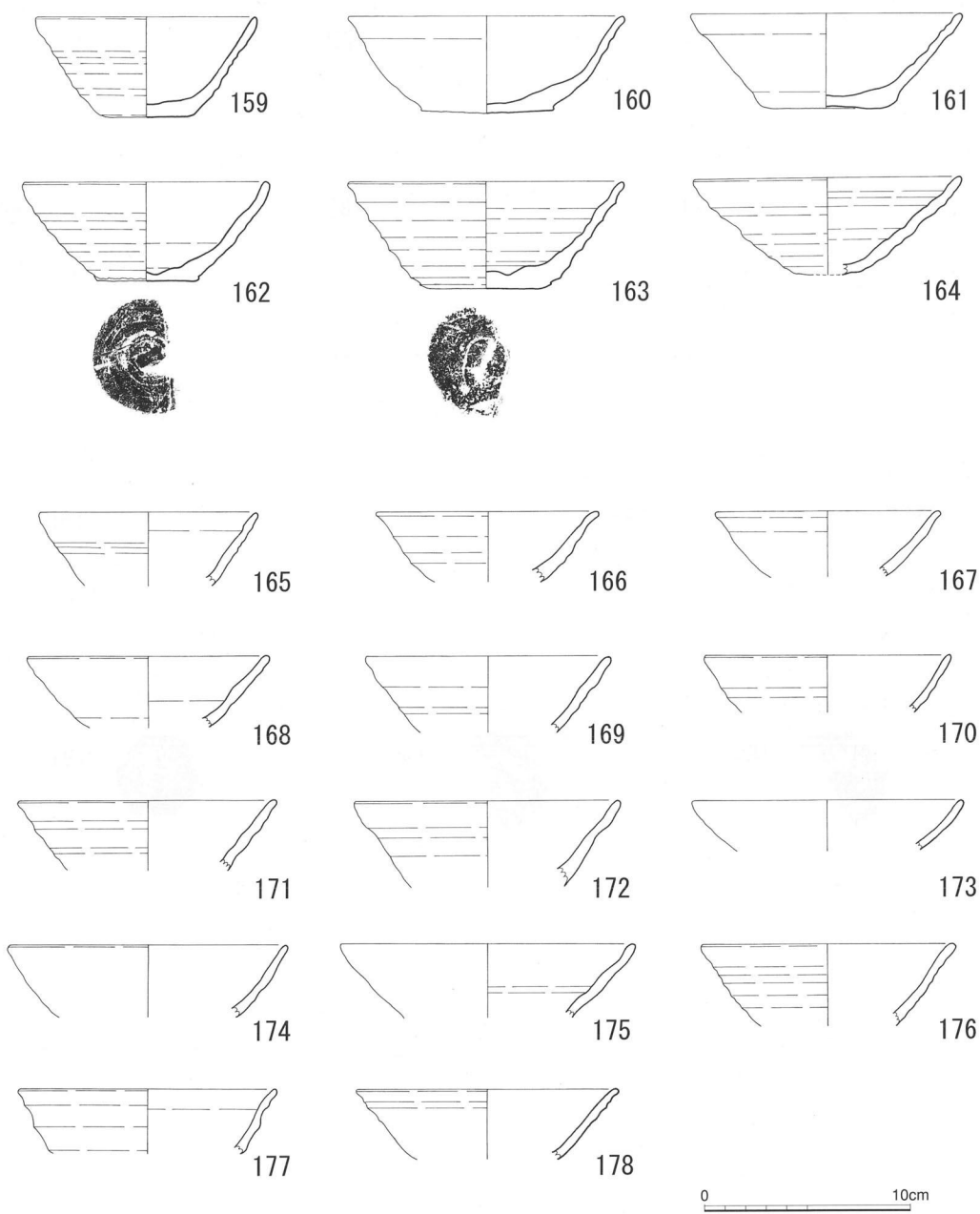
大半が口縁部の断片で、全体像を把握できるものは少ない。器形は丸底で体部はほぼ垂直に伸び、口縁部で短く外反する。表面及び口縁部裏側まで丁寧なナデを施し、頸部裏側からヘラ削り調整をする。頸部に明確な稜を作り、ヘラ削りを施すもの・稜を伴わずにただ下からヘラ削りを施すもの・ヘラ削りの端部をさらにヘラ削りで整えるもの、などがある。調整法は器体全体を丁寧になでた後、裏側の底から頸部までヘラ削りを施している。

墨書土器 (209・235)

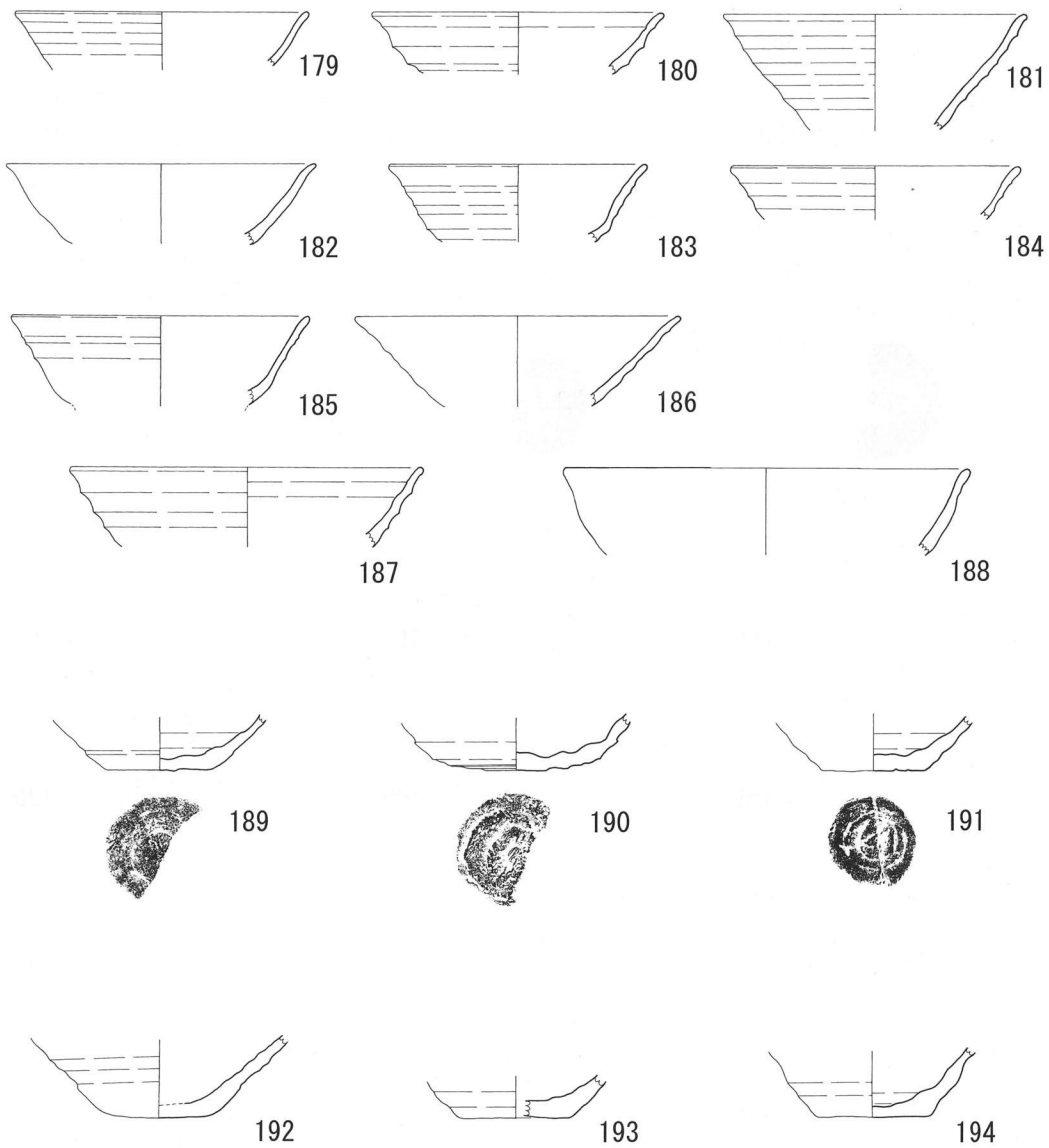
墨書土器が2点確認された。209は坏底部断片で体部下半に施されている。文字が切れているため何の字かは不明である。235は黒色土器の口縁部断片で、表面採集で確認された。墨が少し薄いが「太」という字が書かれている。

(2) 須恵器 (365~271)

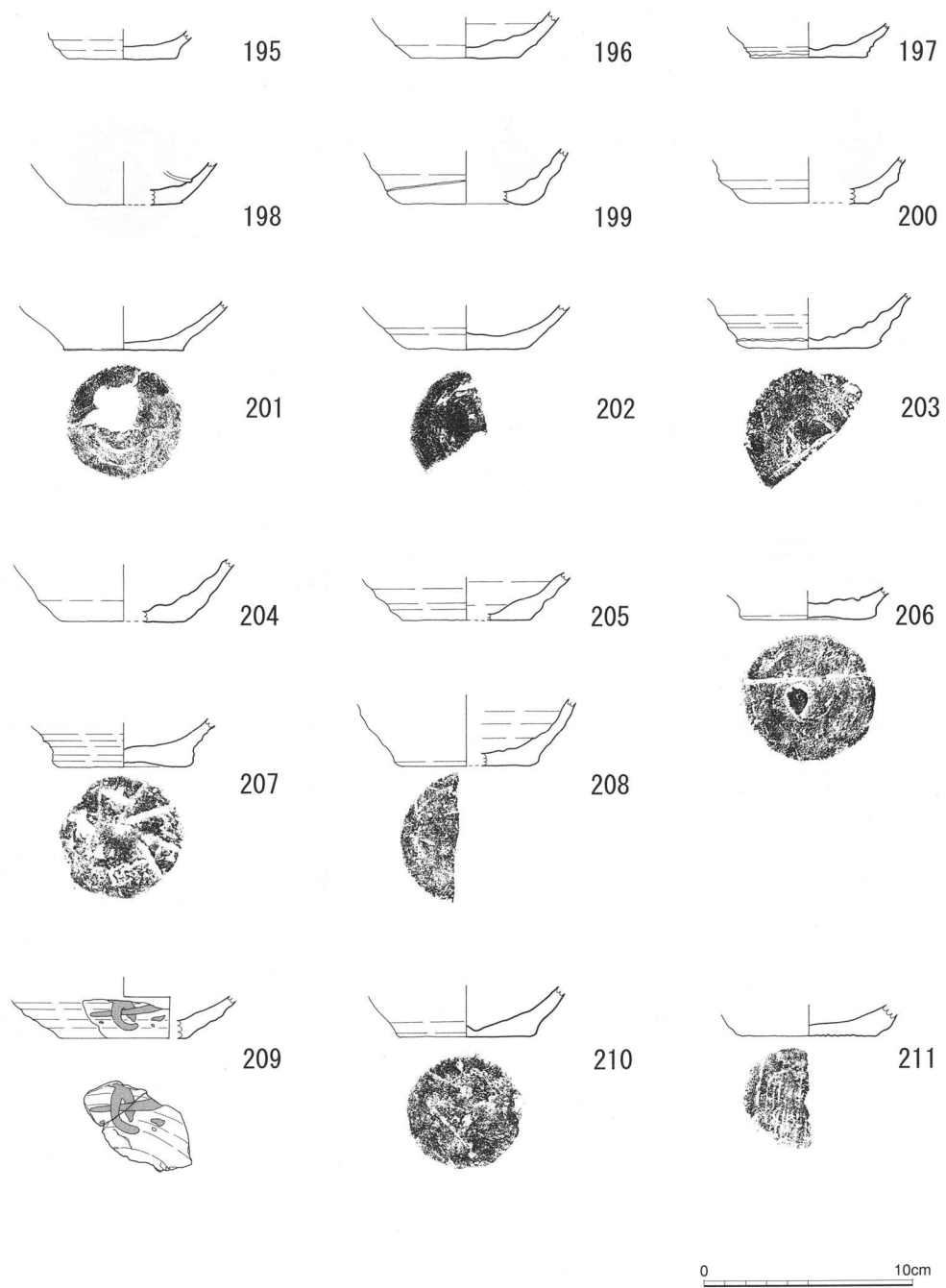
須恵器は全体の出土量の割合から見てもかなり少ない。器種も甕のみで口縁部が1点(265)のみで残りはすべて胴部片である。265は、口縁部片は逆「く」字状の受け口状になっているがその屈曲の度合いは緩い。266~271は胴部片だが、器表面にはタタキ調整による格子目状・斜線状の文様が見られる。器裏面では斜線状のものが少し見られるだけで明確なものは少ない。



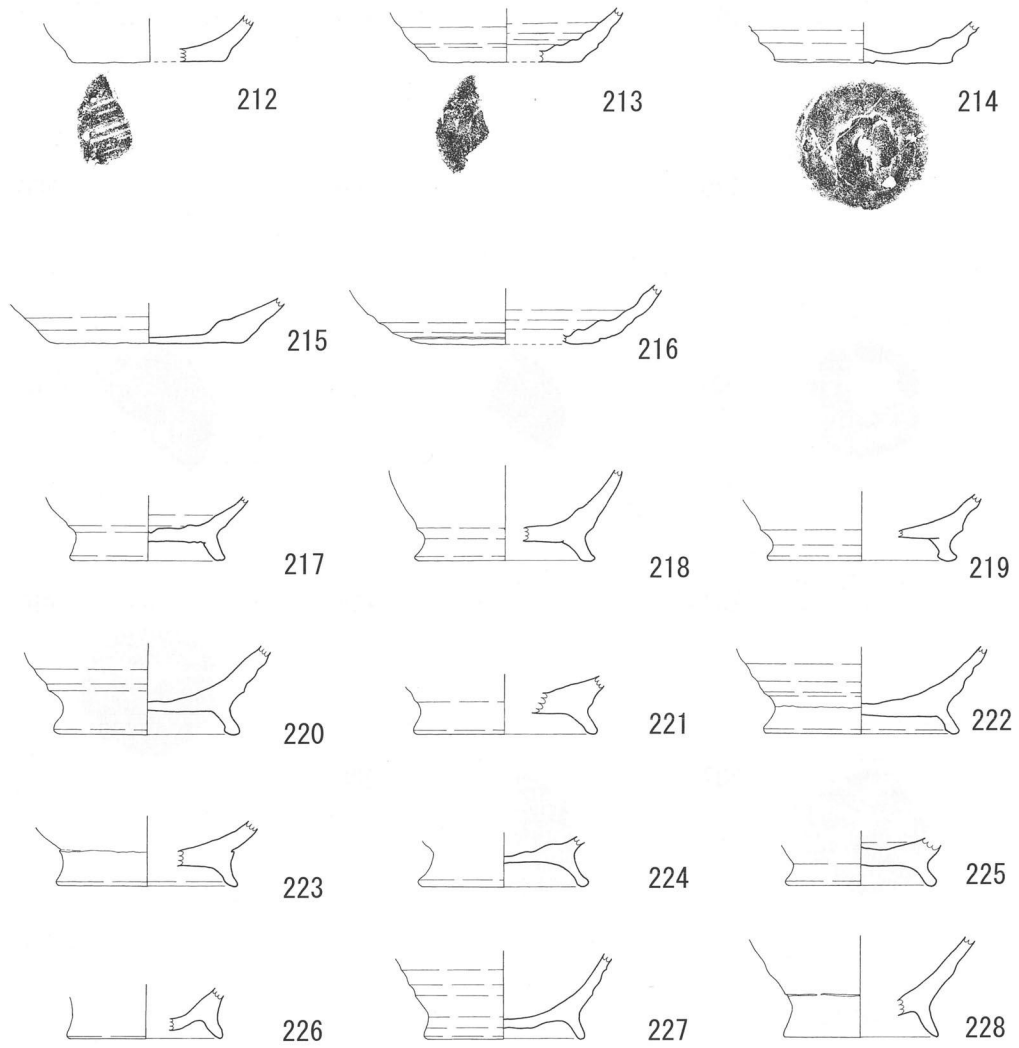
第79図 立山遺跡出土古代遺物実測図(1)



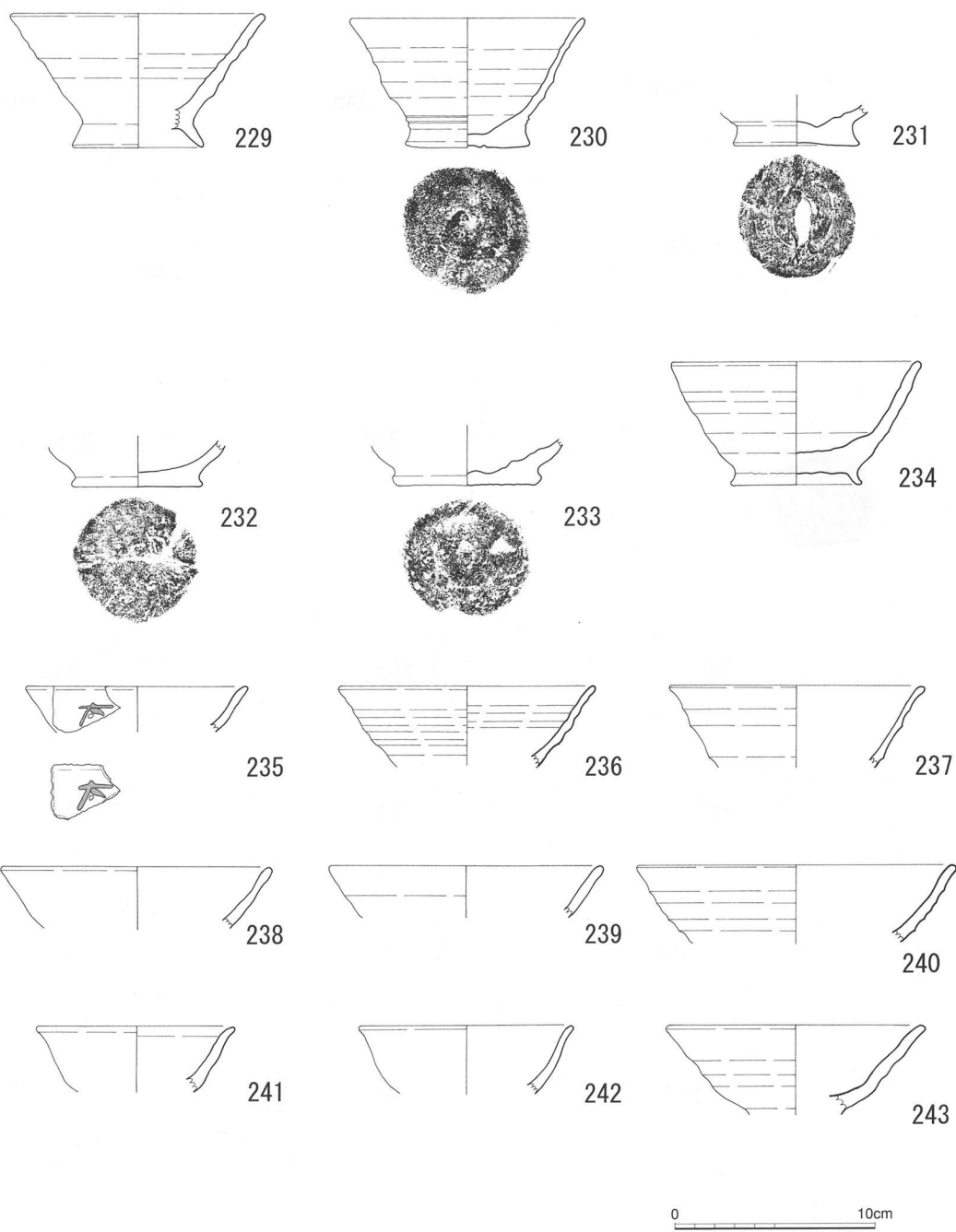
第80图 立山遺跡出土古代遺物実測図（2）



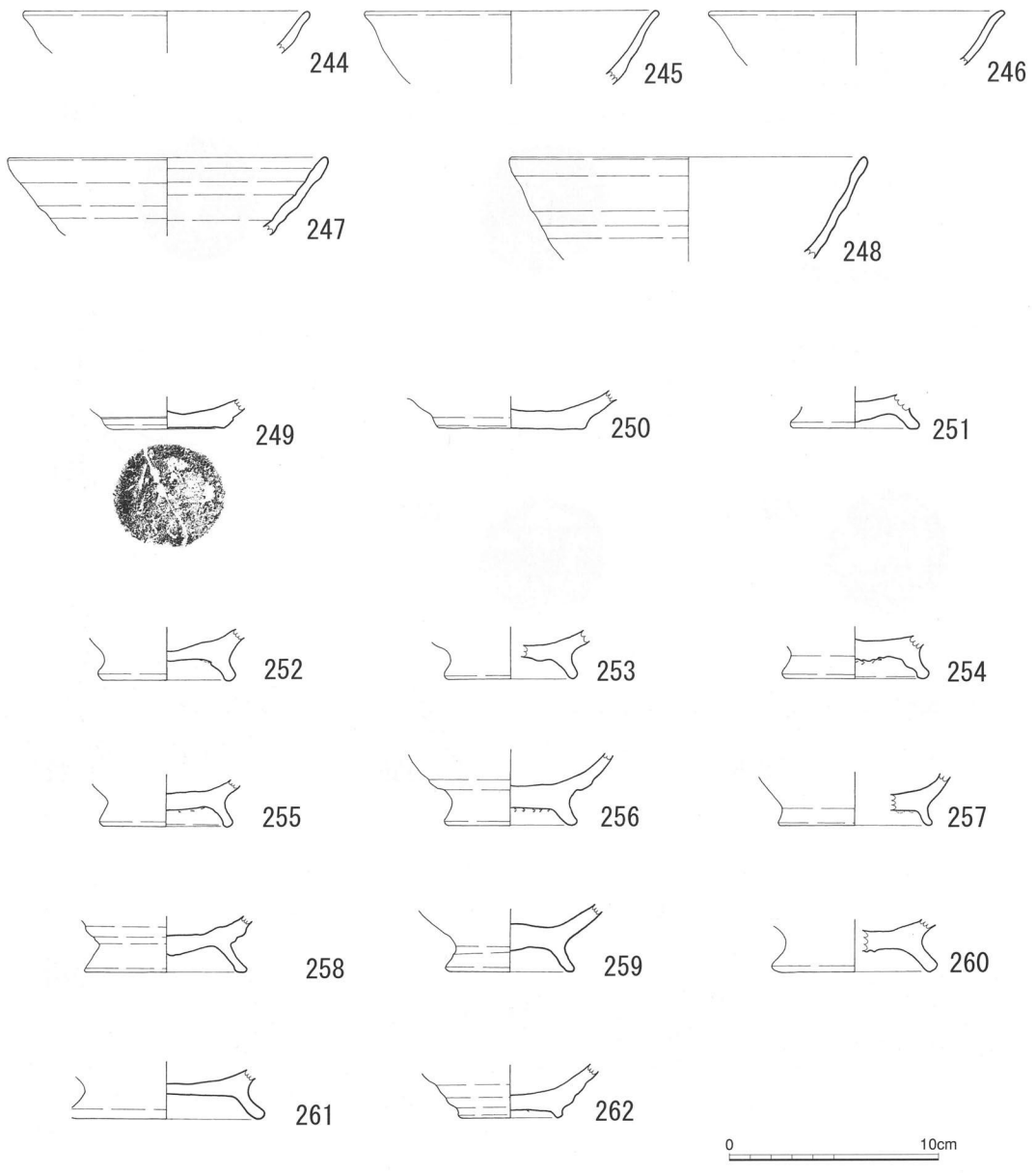
第81圖 立山遺跡出土古代遺物実測圖（3）



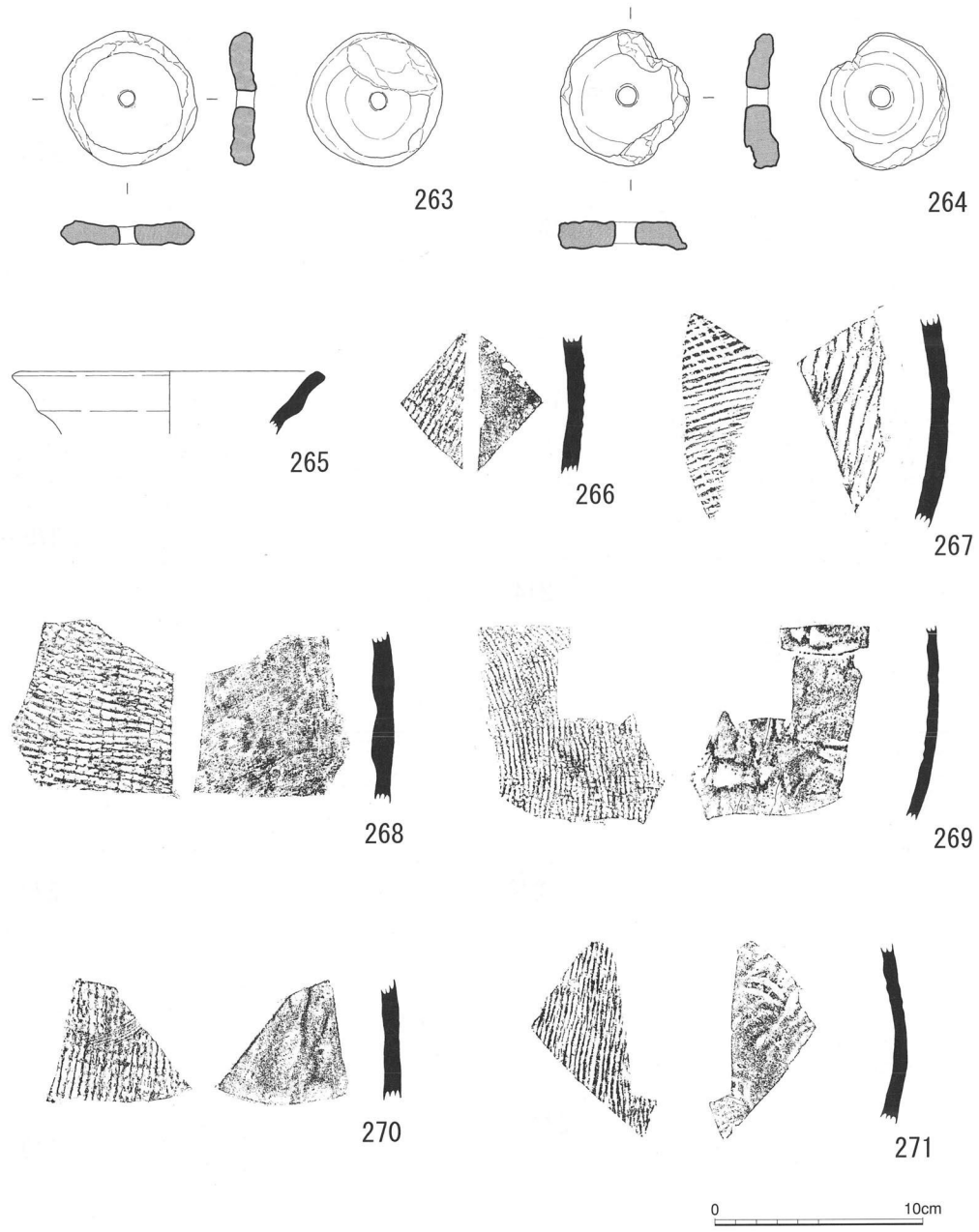
第82图 立山遺跡出土古代遺物実測図（4）



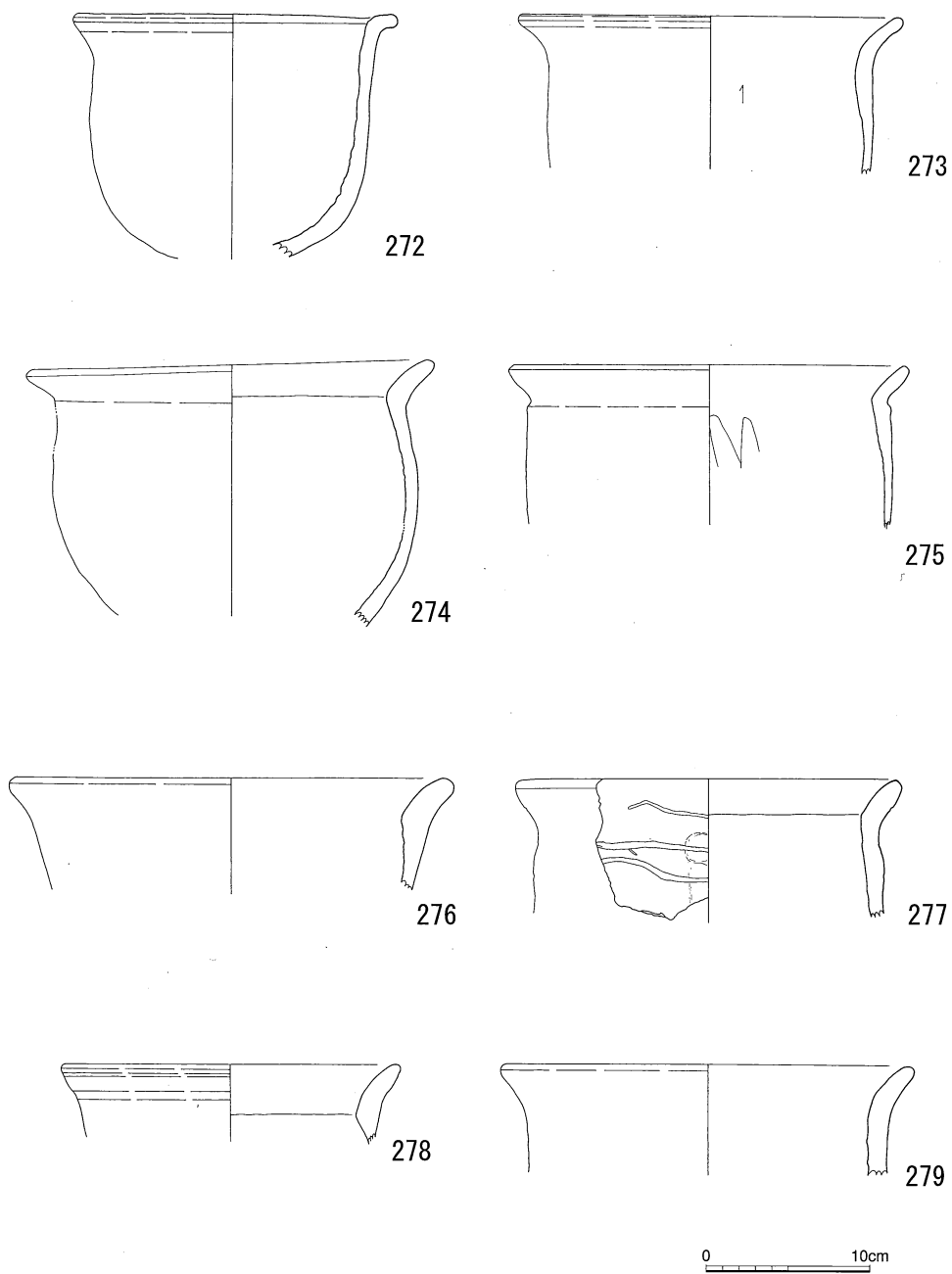
第83図 立山遺跡出土古代遺物実測図（5）



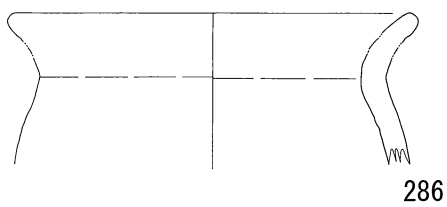
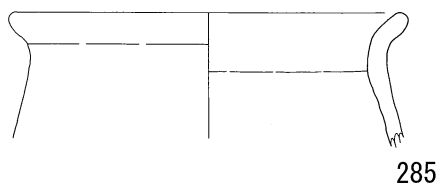
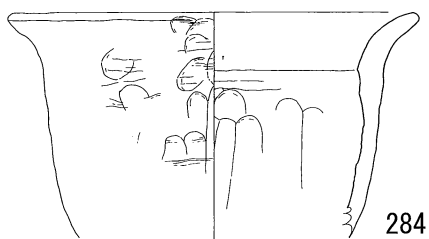
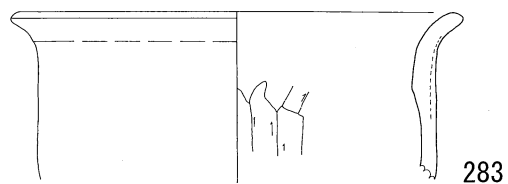
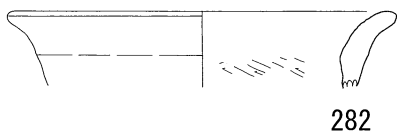
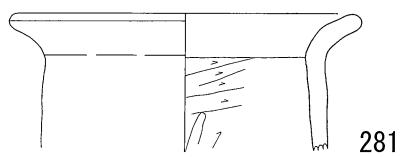
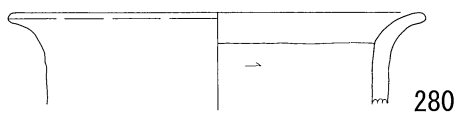
第84図 立山遺跡出土古代遺物実測図（6）



第85図 立山遺跡出土古代遺物実測図（7）



第86図 立山遺跡出土古代遺物実測図（8）



第87図 立山遺跡出土古代遺物実測図(9)

第5章 おわりに

1. 古墳時代の遺構・遺物について

立山遺跡では古墳時代の住居跡群がメインである。古墳時代の住居は西区で9軒、南区で15軒検出された。このうち時期の確認できる遺物（土師器）が出土した住居跡は、西区でSA1・SA2・SA23・SA24・SA25・SA26の6軒。南区でSA7・SA9・SA14・SA15・SA27の5軒に限られる。住居跡出土の土器のうち出土量の多い甕と壺を中心に特徴を述べていく。

【甕】

○刻目突帯を持つタイプ（A類）

- A-1 頸部のくびれが顕著で口縁部が大きく外傾する。いわゆる「く」の字口縁を有する。胴部の張りもあり口縁部径と胴部最大径がほぼ同じとなる。刻目突帯が頸部に付く（SA2-13）
- A-2 頸部のくびれは緩やかで口縁部が大きく外反する。胴部は肩部で膨らみを見せる。最大径は口縁部に持つ。刻目突帯は頸部よりやや下位に付く。（SA1-6）
- A-3 頸部のくびれは殆ど見られず口縁部が外反する。胴部の膨らみもない。最大径は口縁部に持つ。刻目突帯は頸部よりやや下位に付く。（SA9-74）
- A-4 胴部の膨らみも、頸部のくびれもほとんど見られず口縁部が緩やかに外傾する。口縁部径が最大径だが、胴部最大径も口縁部径に近い。刻目突帯は頸部のやや下位に付く。（SA7-72）
- A-5 胴部の膨らみをわずかに見せるが頸部のくびれは殆ど見られず、口縁部が緩やかに外反し口唇部で短く二重口縁状に直立する。（SA2-12）
- A-6 底部から口縁部にかけて一気にバケツ状に開く。口縁部下位に刻目突帯が付く。（SA14-77）
- A-7 底部から口縁部にかけて一気にバケツ状に開き口唇部が僅かに内湾する。口縁部下位に刻目突帯が付く。住居からの出土はなく、東区で多く見られる。

○刻目突帯を持たないタイプ（B類）

- B-1 頸部のくびれは緩やかで口縁部が大きく外反する。胴部は肩部で膨らみを見せる。口縁部径が最大径だが胴部最大径も口縁部径に近い。（SA7-72）
- B-2 頸部のくびれは緩やかで口縁部が大きく外反する。胴部は肩部でもあまり膨らみを見せない。口縁部径が最大径。（SA24-16・18）
- B-3 頸部のくびれも胴部の張りも見られず口縁部がわずかに外反する長胴の甕。（SA26-38）

【壺】

○二重口縁を有するタイプ（A類）

- A-1 二重口縁が内湾気味に直立するタイプ（SA25-25~27・SA1-2）
- A-2 二重口縁が外傾気味に直立するタイプ（SA1-3）
- A-3 二重口縁が外傾するタイプ（SA26-37）

○単口縁を有するのタイプ（B類）

- B-1 球形状の胴部の中位に2条、頸部に1条の刻目突帯を有する。口縁部は直立気味に立ち上がり口唇部近くから外反する。（SA1-1）
SA26-28は同じタイプだが胴部刻目突帯は1条、頸部の突帯には刻目は施されていない。
- B-2 突帯は持たないが、口縁部が直立気味に立ち上がり、口唇部近くから外反する。（SA26-36）
- B-3 頸部から外反する口縁部を持つ長胴で細身。（SA27-87）
- B-4 頸部から短く直立する口縁部を持ち、肩部が張らない球形状の胴部を持つ。（SA15-79）

住居出土の遺物の状況を見ると、刻目突帯を持つ「成川式」の甕（甕A類）が大半を占めており、壺にも刻目突帯を持つ「成川式」の大型の壺（壺B-1類）や瀬戸内系の系統を持つ二重口縁壺（壺A類）などが見られる。又、長胴化した壺（壺B-3）・甕（甕B-3）も見られる。その他、高坏や朱塗り碗なども一部の住居からは出土している。しかし、須恵器の出土は包含層も含め数点しかない。

甕では大きく外反する「く」の字口縁のもの（SA2）からバケツ状に開くタイプ（SA14）までの甕が見られる。SA2で見られる「く」字状口縁の甕（甕A-1）は弥生からの系譜を持つもので4世紀代に比定できる。又、SA2からは口縁が内傾する大型の甕（甕A-5）も出土しており、二重口縁壺の系譜から古手と考えられる。比較的新しいタイプの甕としてSA14で見られるバケツ状の甕（甕A-7）が考えられる。脚台付きの甕ではあるが、5世紀代の「成川式」にも見られるタイプで、立山遺跡出土の甕のなかでは新しい時期のものに当たる。

壺から見ると、二重口縁壺の多くは口縁部が直立するタイプで、4世紀代のものと思われる。特に、SA25の二重口縁壺（壺A-1）は内湾気味に立ち上がるタイプでSA2の大型の甕の口縁と類似する。立山遺跡の中では古手と考えられる。又、刻目突帯を持つ大型の壺（壺B-1）も4世紀代の「成川式」に見られる壺である。一方、SA15に見られる直立口縁を持つ壺（B-4）は5世紀代のの様相を持つ。

甕・壺以外の器種で見るとSA1出土の高坏（SA1-10・11）は坏部下に稜を有する坏部で4世紀代の様相を持つ。

このように見ていくと、立山遺跡の古墳時代の住居群は、4世紀の早い段階でSA2やSA25等の住居が形成され、次の段階でSA1やSA26・SA14・SA15等の5世紀前半頃まで営まれたと想定できる。

なお、立山遺跡全体で古墳時代の遺物を見てみると、集落の下限を知る資料としては、

バケツ状の甕（甕A-7）で口唇部が内湾する一段階新しいタイプの甕（117）が東区から出土しており、住居跡群で考えていた時期よりも、もう一段階新しい時期が考えられ5世紀後半まで集落が継続されたことを伺わせる。一方、集落の上限を見ると、東区出土の脚台付き甕（128）、櫛描波状文を施した二重口縁壺（110・111）、稜を坏部中位に持つ高坏（153）、稜を坏部上位に持ち口縁部が横に開く高坏（154）など、弥生土器の様相を持つ土器類も見られる。この事から立山遺跡の集落の時期としては、弥生終末から古墳初頭の時期まで遡る可能性もある。

又、今回図示はできなかったが、免田式土器の長頸壺の文様を持つ胴部小片（図版50）も確認できたことを最後に記しておく。

2. 古代の土師器について

上述のとおり立山遺跡で出土した古代の遺物は圧倒的に土師器の割合が多い。そこで土師器の器種ごとの注目点をあげると次のとおりである。

①坏について

- ・口縁部の形態の違い
- ・底部の違い
- ・体部下端の調整法の違い

②高台付椀について

- ・高台の形態の違い

③円盤高台付椀の存在そのものについて

④黒色土器A類について

- ・口縁部および高台の形態の違い
- ・底部の形態の違い
- ・高台内部の「ハ」字状刺突痕

⑤須恵器について

- ・供膳形態が見あたらない点

坏については、須恵器の供膳形態と非常に似通った形態をなしている。又、口縁部も真直ぐ伸びるものから外反気味のものまである事から、時期幅のある事がうかがえる。

高台付椀についても、その高台の形態の違いが時期幅を表していると推察できる。

円盤高台付椀については、宮崎学園都市遺跡群の一つでもある小山尻東遺跡をはじめ、宮崎市西ノ原遺跡、さらには太宰府でも確認されており、9世紀後半に突然現れ、南九州全域に分布し、10世紀前半までという極めて限られた時期に使用されるというものである。

黒色土器A類については、口縁部を見ると外反していないものと外反しているものがあり、坏と同じく時期幅が推察される。また、高台についても、その形態の違いから時期幅があるものと考えられる。

その他の違いとして、胎土が挙げられる。大きく分けて直径1mm程度の小石を多く含

んだ橙色系統の土と、非常に精良な淡黄色系統の土である。前者は坏や高台付椀に多く、後者は黒色土器A類に多く使われている。勿論、坏や高台付椀の中にも後者の胎土のものも見られる。しかし、黒色土器についても言えるが、通常見られる黒色土器の胎土よりも精良で堅く焼け締まっている。ただ、瓦器の胎土とも異なる事から、これを時期差と捉えるなら、瓦器に至る過程の製品と考えられる。

以上から推察できる事は、坏は須恵器の形態を残していること、黒色土器A類が供伴していること、供膳用の須恵器を伴っていない事から、時期は9世紀後半と推定される。ただ、坏などの口縁部の外反化、円盤高台付椀も供伴していることから、9世紀後半を中心として、10世紀前半まで下がると考えられる。

3. 高原スコリアについて

今回の調査では2層にあたる高原スコリア（御鉢起源）の下位層から、9世紀から10世紀前半の時期の遺物が出土している。高原スコリアはこれまで延暦7年（788）の噴出と考えられている。しかし、近年いくつかの調査で、高原スコリアの下位層から立山遺跡同様に9世紀から10世紀前半の時期の位置付けられている黒色土器等が出土しており、御鉢起源の高原スコリアの年代について見直しが急務とされている。今回のテフラ分析では年代測定までは行っていないが、調査の結果から霧島御鉢延暦テフラ（A. D. 788）と霧島新燃享保テフラ（A. D. 1717）との間に未記載の2層のテフラの存在がわかった。文献にも11世紀から13世紀にかけて霧島山で3回の噴火の記録が残っている。幸い、立山遺跡に隣接する荒迫遺跡（宮崎県埋蔵文化財センターが平成6年度～8年度に調査）において高原スコリアの年代測定を行っておりその結果が待たれる。

今回の立山遺跡の調査では、小規模の調査体制で広大な調査面積を短時間で調査せざるを得なかった事や、遺構検出が非常に困難であった状況などから、十分な調査とは言い難い。特に最初に調査に入った東区では、十分な遺構検出が行えなかった点は調査員の力不足もあり問題点の一つと言える。しかし、以上述べたように多くの成果を得ることができた。

隣接地には平成6年度から8年度まで宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った荒迫遺跡があり、立山遺跡と同時期の遺構・遺物が数多く検出されている。しかし、遺跡の立地は立山遺跡とは異なり丘陵上の狭い平坦地に、弥生時代終末から古墳時代にかけての住居や古代の畠が営まれている。今回、両遺跡の比較は行えなかったが非常に興味深い問題であり今後の検討が必要である。